

筑波大学地球科学系人文地理学・地誌学分野の四半世紀

雑誌名	筑波大学人文地理学研究
号	23
ページ	105-217
発行年	1999-03
その他のタイトル	The Quarter of a Century of the Human and Regional Giography Divisions, Institute of Geoscience, University of Tsukuba
URL	http://hdl.handle.net/2241/00121913

筑波大学地球科学系

人文地理学・地誌学分野の四半世紀

ま え が き

筑波大学は、新構想大学として1973（昭和48）年10月1日に開学し、1998（平成10）年10月に25周年を迎えた。開学時に、地理学者として着任したのは、故尾留川正平氏のみであった。彼は東京教育大学から筑波大学への移転に際して、マスタープラン委員の一人であったため、そのご苦勞は計り知れないものがあつたはずである。なお、彼は筑波大学の初代の企画調査室長の要職を務めた。

筑波大学が25年間成長したのも先達の教官、技官、事務官、学生たちの親密な連繫による辛苦の賜物であつた。人文地理学関係者で本学に教授として籍を置かれて、退官された先生のみを以下に記してみる。

地球科学系所属は、前出の故尾留川正平、高野史男、山本正三、正井泰夫、奥野隆史、佐々木 博の6氏、歴史・人類学系関係では、菊地利夫、千葉徳爾、川喜田二郎、黒崎千晴の4名、教育学系では朝倉隆太郎、篠原昭雄の両氏であり、合計12名にも達する。錚錚たるスタッフの八面六臂の活躍によって、今日の本学の礎が築き上げられている。

本記念号を企画したのは、開学四半世紀という一つの節目に、細やかながらも記録を残しておきたいという願いからである。定期刊行物の「人文地理学研究」は本巻で23号、「地域調査報告」は20号を数え、「歴史地理学調査報告」は8号に達している。

この25年間の期間に、日本地理学会の春季学術大会が当地で2回開催され、国際地理学会関係のシンポジウムや日仏コロキウムなどが催され、「開かれた大学」と標榜されてきた一端が実現した。本文中に掲載されているように、外国人教師・外国人非常勤講師、外国人研究員、留学生、外国人研究生も多数受け入れてきた。本学が筑波研究学園都市に位置していることから、外国人地理学者の訪問も絶えない。

東京教育大学時代から始まったブラジルの海外研究は、筑波大学に5年間設置されたラテンアメリカ特別プロジェクトによって一層推進された。その終了後も、ブラジル研究は継承されてさらにアンゴラアメリカ研究にまで及んでいる。一方、パリ地方（イル・ドゥ・フランス）の研究から始まったフランス研究も、EU諸国の研究へと対象地域のスケールを拡大しつつある。

筑波大学の組織は複雑であるが、前述の通り、人文地理学関係の教職員は、地球科学系、歴史・人類学系、そして教育学系の三学系にまたがって属している。教育組織としては、第一学群自然学類の地球科学専攻内に、人文地理学と地誌学コース、人文学類に歴史地理学専攻、そして第二学群の比較文化学類に文化地理学コースがあり、合計4コースを数える。博士課程の研究科は地球科学と歴史・人類学の二つであり、修士課程として教育研究科と地域研究研究科に院生、研究生がいる。

東京教育大学の時代から、「人文地理談話会」が綿綿たる伝統を保ち、教職員・院生・学群生、卒業生は勿論のこと、学外から誰でも参加できるアカデミック・サロンとして、毎月ほぼ1回の頻度で開かれている。毎年3月に院生が企画し、案内をも行うその巡検は、好評であり、ときには学外から

の参加者もある。

キャンパス内の小さな石碑に、青野壽郎氏の直筆によって「大塚の地理学を筑波へ」(1977年秋)と刻み込まれている。果たして、青野壽郎先生他が望んだ地理学が、本学で育まれているのであろうか。評価は他人に委ねるしかない。いずれにしても、本学に籍を置く者は、未来永劫、不断の研究・教育活動を地道に続けてゆかねばならない。

本学はまず、大学院の重点化・再編成に直面している。そして国内では少子化の下、大学の個性化が求められている。次の「節目」をより強靱な態勢で迎えるためにも、個人と組織の内なる改革と、他からの諸批判を受け入れる更なる決意を表明したい。

すでに述べたように本学の組織は複雑であり、人文地理学・地誌学に関する研究・教育はさまざまな組織にまたがって行われている。そのため、この記録は地球科学系の人文地理学分野と地誌学分野を中心に、適宜他の組織に関する記述を加えた。このことをあらかじめお断りしておきたい。

1999年 2 月 1 日

高橋 伸夫

筑波大学地球科学系人文地理学・地誌学分野の四半世紀

目 次

まえがき

目次

I	人文地理学・地誌学分野の歩み	1
I-1	東京文理大・東京教育大の地理学教室から筑波大学地球科学系へ	1
1.	東京文理科大学地理学教室の伝統	1
2.	東京教育大学地理学教室の伝統	4
3.	筑波大学の構想と地理学の位置	5
I-2	筑波大学における人文地理学・地誌学分野と研究・教育体制	7
1.	研究組織	8
2.	教育組織	8
I-3	創立時から今日までの思い出 高野 史男, 山本 正三, 正井 泰夫, 奥野 隆史, 佐々木 博, 高阪 宏行, 小林 浩二, 町田 親久	12
II	人文地理学・地誌学分野の記録	27
II-1	専任教職員の年表	27
1.	地球科学系	27
2.	歴史・人類学系および教育学系	28
3.	専任教職員氏名および在任期間リスト	29
II-2	招へい外国人教師・研究者	30
II-3	非常勤教員の年表	30
II-4	共同利用施設	34
II-5	定期刊行物	34
1.	人文地理学研究 Tsukuba Studies in Human Geography	34
2.	地域調査報告 Area Research Papers	35
3.	Science Reports of the Institute of Geoscience, University of Tsukuba, Section A	35
4.	Annual Report of the Institute of Geoscience, University of Tsukuba	35
II-6	人文地理談話会	38
III	人文地理学・地誌学分野の研究活動	42
III-1	専任教職員（関連分野含む）の主要研究領域（1998年度現在）	42
III-2	現在の教職員の海外での調査研究歴	42

Ⅲ－３	文部省科学研究費とその他の研究助成金	43
1.	文部省科学研究費（研究代表者に限る）	43
2.	その他の研究助成金	45
Ⅲ－４	国際シンポジウムおよび学術大会の開催	45
Ⅲ－５	主要著作物（図書）	45
Ⅳ	人文地理学・地誌学分野の教育活動	51
Ⅳ－１	開設授業科目と担当者	51
1.	自然学類	51
2.	比較文化学類	56
3.	地球科学研究科	63
4.	地域研究研究科	68
5.	教育研究科（教科教育専攻社会科教育コース地理的分野）	71
Ⅳ－２	卒業論文および進路の一覧	74
1.	自然学類	74
2.	比較文化学類	81
3.	人文学類	88
Ⅳ－３	修士論文および進路・現職の一覧	91
1.	地球科学研究科	91
2.	歴史・人類学研究科	93
3.	地域研究研究科	94
4.	教育研究科（教科教育専攻社会科教育コース地理的分野）	96
Ⅳ－４	博士論文・勤務先一覧	101
1.	地球科学研究科	101
2.	歴史・人類学研究科	104
	地理学に輝かしい未来を　—あとがきにかえて—	106

I 人文地理学・地誌学分野の歩み

I-1 東京文理大・東京教育大の地理学教室から筑波大学地球科学系へ

1. 東京文理科大学地理学教室の伝統

東京文理科大学の母胎となった東京高等師範学校の地理学教室は、1902（明治35）年ウィーン大学の A. Penck 教授の下で地理学・地形学を研究して帰国された山崎直方が、日本ではじめて近代地理学を講じられた、日本における近代地理学研究・教育の発祥地ともいえよう。

研究会・学会としては1878（明治11）年東京帝国大学理学部内につくられた博物友会から1883（明治16）年に地学会（会長小藤文次郎）が独立し、1884年から「地学会誌」を発行し、1889（明治22）年には10年前に創立された東京地学協会から「地学雑誌」が発行された。その創刊号にのせた小藤文次郎の論文「地理学の意義に解釈を下す」は、F. Ratzel の名著 *Anthropo-Geographie* の考えを基礎にしたもので、学界における近代地理学推進の機運は、山崎直方の講義に先行していた。一方、1888（明治21）年東京帝国大学文科大学に史学地理学の講座が開かれ、外人教師 L. Riess の後、白鳥庫吉・坪井九馬三等が講義をしたが、歴史地理学は史学の補助学科と考えられ、小藤文次郎の地理学に対する考えは発展しなかった。

東京高等師範学校では、1894（明治27）年に卒業した筆者の父のノートによると、自然地理・地学は後藤牧太教授、地誌は Mill. の *International Geography* を用い、三宅講師が担当されていたようである。その後、野口保興、矢津昌永が講義をもち、1902（明治35）年から山崎直方教授が地理学教室を主宰することになる。

それ以来、東京高等師範学校の地理学教室は、1907（明治40）年京都帝国大学文学部史学科の中の地理学講座（小川琢治教授創設）、1911（明治44）年東京帝国大学理科大学での地理学講座（山崎直方教授担当）、1919（大正8）年東京帝大理学部地理学科開設（山崎直方教授創設）ごろまでは、日本の地理学発達の中心的役割を果たした。山崎直方の研究の中心は地形学にあり、東京高師の大関久五郎、東大の辻村太郎のような後継者が育ったが、山崎は1902～1917年に互って佐藤伝蔵と共著で日本最初の近代地理学に基礎をおく地誌「大日本地誌」を発表し、1908（明治41）年からは東大法科大学講師として経済地理学を講じ、同年東大教授を兼任して、地理学講座を担当され、1912（大正元）年東大教授に任ぜられてからも、東京高師の兼任教授として地理教育の発表もあり、地理学全体に大きな影響を与えた。

この間に東京高等師範学校を卒業して、地理学界・地理教育界で活躍された主な方々は次のようである。

1899（明治32）年地理歴史専修科卒	小田内通敏（早大・慶大講師）
1901（同 34）年文科地理歴史部卒	大関久五郎（東京高師教授）
1902（同 35）年農学地学専修科卒	正木助次郎（東京府立三中教諭・日本地理学会創立発起人）

1903 (同 36) 年本科第二学部卒	富士徳次郎 (東京女高師教授)
1904 (同 37) 年本科地理歴史部卒	依田 豊 (女子学習院教授)
1904 (同 37) 年本科地理歴史部卒	西田与四郎 (奈良女高師教授)
1906 (同 39) 年本科博物学部卒	新帯国太郎 (満鉄研究員)
1908 (同 41) 年本科地理歴史部卒	下田 礼佐 (横浜高商教授)
1910 (同 43) 年本科地理歴史部卒	内田 寛一 (東京文理大教授)
1910 (同 43) 年本科地理歴史部卒	田中 秀作 (彦根高商教授)
1912 (同 45) 年本科地理歴史部卒	田中 啓爾 (東京文理大教授)
1913 (大正 2) 年本科地理歴史部卒	山極 二郎 (天王寺師範教諭)
1913 (同 2) 年本科博物学部卒	渡辺万次郎 (東北大教授)
1913 (同 2) 年本科博物学部卒	長尾 巧 (東北大教授)
1914 (同 3) 年本科地理歴史部卒	上治寅次郎 (京都大教授)
1916 (同 5) 年本科地理歴史部卒	山本 幸雄 (東京高師付中教諭)
1917 (同 6) 年本科地理歴史部卒	佐藤保太郎 (東京教育大教授)
1917 (同 6) 年本科地理歴史部卒	石井逸太郎 (富山高校・富山大教授)
1918 (同 7) 年本科地理歴史部卒	浅井 治平 (東洋大教授)
1919 (同 8) 年理科 3 部博物・地理卒	富田 芳郎 (東北大教授)
1920 (同 9) 年理科 3 部博物・地理卒	藤本 治義 (東京教育大教授)
1921 (同 10) 年理科 3 部博物・地理卒	田山利三郎 (東北大教授)

以上のほか、地理歴史部出身の学者には、日本史の中村孝也 (東大教授)、東洋史の有高 巖 (東京文理大教授)、社会学の綿貫哲雄 (東京文理大教授、東大講師) などが出ている。

以上のうち、大関久五郎・田中啓爾・内田寛一の 3 教授は、山崎教授の後の東京高師の地理学教室経営のスタッフとして、学界、教育界に活躍され、その名声をあげられた。

また、教室と密接不離な関係をもち、山崎直方教授を会長、田中啓爾教授を副会長として発足した大塚地理学会 (1924年東京高等師範学校地理学会として発足。教室のスタッフ・卒業生・地歴科学生・生徒、1929年以後は文理大地理学専攻学生を会員とする) の活動も大塚の地理学の伝統を育てる重要な役割を演じた。月々の例会、春秋 2 回の学術大会をもつほか、大塚地理学会々報 (1924～1937年)・地理学論文目録 (1～3, 1934～1937年)、大塚地理学会論文集 (I～VI, 7 冊, 1933～1950年)、リーフレット、雑誌地理 (I.1～V.4, 1943年地理学評論と合併) の出版物を出した外、教室のスタッフの指導による日帰り巡検がほとんど日曜毎に行なわれ、野外調査を主体とする大塚の学風を育てる力となっていた。

これらを背景にして、1929 (昭和 4) 年東京文理科大学地理学教室が、東大地理学教室の創設者山崎直方を再び迎えて、自然地理学・人文地理学の 2 講座の教室として創設され、山崎直方教授と田中啓爾助教授が任命された。山崎教授は新教室の構想をねり組織を作られたが、病床にあって自然地理学の講義は東大の辻村助教授が担当され、残念ながら組織の完成をみずして 7 月に逝去された。1930 (昭和 5) 年にはフランス留学から帰朝された今村学郎助教授・内田寛一講師、榊田一二助手のほか、人文地理学の武見芳二、自然地理学の福井英一郎が助手に任命された。さらに湖沼学の田中阿歌麿 (1932年から吉村信吉が継ぐ)、気候学の大石和三郎 (1934年から岡田武松が継ぐ)、地質・鉱物学の富田 達・藤本治義、土壌学の関 豊太郎等各方面の専門家を講師に迎えて、研究・教育の分野は多方面に互った。専任であった地誌学・人文地理学の田中啓爾助教授を中心に、地形学・数量的研究

の今村助教授、歴史地理学の内田寛一講師（後に助教授）のほか湖沼学の吉村信吉講師等の下に、多彩な大塚の地理学が育っていった。

当時、日本の大学の地理学教室は3つあったが、東大は1講座で自然地理学特に地形学、京大は1講座で人文地理学特に歴史地理に中心をおいていたのに、東京文理大は学界からは地誌研究に特色があるとされていた。しかし、東京文理大には自然地理学・人文地理学の2講座があって、地誌学・地形学・歴史地理学の教授・助教授のほか、陸水学・気候学・地形学・経済地理学・水産地理学・農業地理学等の分野を専門とする講師・助手・副手が多くて、野外の実証的地域研究に特色をもっていたので、卒業論文をみても東大・京大に比べて、研究テーマが自由に選択され、広い分野に互っていたのが特色であった。この野外での臨地調査・実証的研究と自由な研究分野の選択とその指導が他大学に比べての大きな特色であり、文理大の大きな伝統といえよう。

文理大は1953（昭和28）年3月29日閉学式を行ったが、それまでに11名の文学博士、13名の理学博士を出しており、その中には矢嶋仁吉の「武蔵野台地の新田集落の立地に関する地理学的研究」と尾留川正平の「裏日本海岸砂丘の地理学的研究 — 開拓および土地利用とその因子 —」の2論文が含まれ、文理科大学地理学教室としてはじめて2人の理学博士の学位を出した。続いて1953年中に幸田清喜が学位を受けたが、以後も研究科学生の指導と学位論文審査のため、文理大は1962（昭和37）年3月まで存続したので、その間に多くの学位が授与され、日本で最も多くの地理学による学位授与者を出したのであった。この功績は大塚・青野・石川の3教授、特に青野教授によるところが大きかった。

また、単科大学であって、教授会には当然文理両分野の教授が一緒になり、学位論文もその正教授会で審査されたので、教授陣における文科・理科の交流が総合大学より密であり、学生も文理両面の講義を自由に聞くことができた。筆者は地理学教室で開講した講義以外でも、中野治房講師の植物生態学、小野島右左男講師・田中寛一教授の心理学、務台理作教授の哲学等に特にひかれたことを思い出す。

野外調査では、5～6人の学生に教授あるいは助教授と助手2名がついていったので、ほとんど個人指導を受けることができたし、非常勤講師でも野外調査の指導をされる方もいた。しかも、1年の時は田中教授の人文地理・地誌の野外実習、2年の時は今村助教授の自然地理の野外実習があって、それぞれ進級論文を提出して、3年の卒業論文にはいることになっていて、自然・人文両分野の研究能力が仕込まれた。野外実習と共に最も力を入れたのは演習で、英・独・仏語の論文の紹介・批判をしなければならぬので、学生が多くの時間をさいたのも演習であった。正規の演習の外に、今村助教授は一部の学生・助手と共に週1回論文の紹介批判の時間をつくって、学生の力の養成に努められた。

教授・助教授のほか、福井・吉村・青野・石川・尾原・小笠原・尾留川等若い講師・助手・副手が多く、教室の研究活動は活気にあふれていた。

筆者は助手になると、田中教授の人文地理学演習のほか、石川助教授の自然地理学演習にも出、また自分の研究発表については、大塚教授・石川助教授の批判指導を仰ぎ、自然地理学における研究・

態度・手法の吸収にも努めた。これも文理大であったからこそ、できたものと思っている（青野助教授は当時紅陵大学教授であった）。

第二次世界大戦中は、教室の秩父への疎開や戦災で大きな障害にあったが、漸く落ちつくとも新制大学への発足に伴う問題がおき、これには内田教授・大塚教授・青野助教授・石川助教授・尾留川助手等が難産の渦中にはいり、文理科大学で育った伝統を受けつぐ、東京教育大学の誕生に努め、1949（昭和24）年6月に到って東京教育大学が発足した。この時、文理科大学のファカルティーは学問研究に中心をおく大学の創造に全力をあげて努力し、助手陣もその実現に協力したが、特に哲学・物理学・動物学・地理学の助手の協力は目覚ましいものであった。内田教授はすでに1949（昭和24）年3月に停年で退官され、東京教育大学地理学教室の発足とその位置づけについては、物理学の教授で初代理学部長となられた藤岡由夫教授の理解、大塚教授、青野教授の尽力によるところが特に大きかった。

2. 東京教育大学地理学教室の伝統

発足当初は山崎直方教授が文理大に創設された自然地理学・人文地理学の2講座と、東京高師の2学科によって構成されたが、主に青野教授の尽力によって地誌学の講座が認められ、続いて地誌学講座は地誌学第一講座、地誌学第二講座となり、4講座となった。後にはさらに水収支講座が付加されることになって、地理学教室は5講座からなる日本一の大規模な地理学教室となり、文理大時代と同様日本で最大の学位授与者を出してきた。そうして、大学院の学生数も修士課程1年定員10名、博士課程1年定員5名をもつに到り、このほかに、台湾、シンガポール、韓国、ブラジル、アメリカ合衆国からの留学生を受け入れ、指導陣にも5名の教授、5名の助教授、7名の助手、数名の非常勤講師のほかに、1953（昭和28）年以来、アメリカ合衆国からC.L. Dow, P.C. Morrison, C.A. Manchester, K. Stacey, D.H. Kornhauser, G.H. KakiuchiのVisiting Professorを招き、さらに講演者としてはフランス・ドイツ・イギリス・アメリカ合衆国・カナダ・ソ連・ニュージーランド・ブラジル等多くの海外地理学者の来訪を受けたり、招待をして交流を密にし、国際的地位を確立するようになってきた。外国人留学者の大部分は帰国後自国の大学教授となって活動しているが、シンガポールから人文地理学講座に来ていた黎経富（Loy Keng-Foo）はシンガポールの日本駐在大使として活躍した。他方、教育大学地理学教室からの海外留学生も増加してきたが、特に人文地理学講座からの学生の留学が多く、アメリカへは正井泰夫（文理大研究生）、奥野隆史、菅野峰明、矢ヶ崎典隆の4名、ドイツへは佐々木 博、朝野洋一、石井英也、小林浩二、桜井明久の5名、フランスへは高橋伸夫、大嶽幸彦、手塚 章の3名計12名（うち10名は博士課程学生）が留学し、アメリカとフランスでは学位を取得して帰っている。

5講座にも及ぶ広い分野の講座をもち得たのは、文理大時代に地形学や人文地理学の講座のほか、陸水学・気候学の講師・助手を迎え、広い分野に互る学生を育てたことが大きな力となったものと思う。また、伝統の野外調査は学部でも大学院でも行われてきたが、人文地理学講座では終戦後青野教授以来、大学院の野外実験は下田臨海実験所を利用して30年近く継続した。同一地域の長期に互る調

査研究は、地域遷移の研究に便利であるばかりでなく、方法論的に研究の反省を伴うという筆者の持論から始めたものであり、この点で成功したものと思っている。そのため研究業績も多く、東京教育大学地理学教室研究報告Ⅱ（1958）、Ⅲ（1959）、Ⅴ（1961）、Ⅸ（1965）、Ⅺ（1967）、日本地理学会学術大会要旨（1958）、東京教育大学人文地理学教室地理学調査報告 No.1（1966）、No.2（1972）、National Academy of Science-National Research Council, USA.（1965）、朝倉現代地理調査法Ⅳ 地域調査（1976）、日本地誌研究所日本地誌Ⅺ 巻等多くのものに発表されている。

教育大学になってからの大きな変化は、学部学生が理学部・文学部から入って多様化してきたこと、女子学生の入学者が文理大時代より少しふえてきたこと、これに応じて論文内容の多様化も必然的に生じてきたこと、教育面でも研究面でも海外との交流が盛んになり、教室の事業として3回に互ってブラジルの海外調査を実施したこと、文理大以来の理学部の Science Report 以外に、年々発行する東京教育大学地理学研究報告（Ⅰ－XX）の発表機関誌をもったこと等があげられる。この地理学研究報告の発行については、石川教授の熱意が特に大きかった。

この研究報告の外に、人文地理学講座では、地理学調査報告（Geographical Research Paper）として、No.1, Geographical Distribution of Ama in Japan.（1966）、No.2, 伊豆白浜における沿岸集落の変貌（1972）、No.3, 菅平における高冷地の集落と土地利用の調査（1975）を発行した。

5 講座になって予算も豊富になったが、学部学生が1 学年27～28名、合計約100名いるほかに、修士コース学生が約20名、博士コース学生が約15名の定員のほかに、専攻生や外国人留学生も加えて学生数が多すぎ、文理大時代と同じような個人指導は大学院学生に限らざるを得なくなり、学部学生の指導は極度に制約されざるを得ない状況になった。また、5 講座に分れていることから学生が早くから専門に分れすぎ、将来のびる基礎となる勉強が不足がちになる欠点をも生ずるようになり、新制大学本来の最も大きなねらいであった教養および基礎学習の不足が生じがちとなってきた。これらのことが、大学改革問題のおきる一つの動機ともなったといえよう。

3. 筑波大学の構想と地理学の位置

東京教育大学は東京文科大学・東京高等師範学校・東京農業教育専門学校・東京体育専門学校・東京文科大学付置の光学研究所が合併して作られたものであり、校舎が3カ所に分散していて、教養課程の教育の充実を図るうえでも、学部間での総合的研究や共同研究を行なう点でも不便が多かったこと、メインキャンパス大塚では特に理学関係の新しい設備施設を造るには余りにも狭小なことなどがあり、早くから移転計画を検討してきた。1962（昭和37）年には大学の将来計画委員会、1967（昭和42）年にはマスタープラン委員会を作って、ゆきづまった大学の抜本的改革の検討を続け、筑波に移転して自然・人文・社会諸科学の調和のとれた総合大学として発展することを決定し、難産の末、1973（昭和48）年秋に発足したのである。筆者は上記両委員会の副委員長として、新大学設立の基本計画をまとめ、発足後は企画調査室長として、基本計画の実現、移転後の大学建設および運営の中核に参画したので、その成立過程・推移については、詳細を知悉しているが、ここでは東京文科大学・東京教育大学のよき伝統をのびし、短所を是正するために、新大学で企画し、実現しつつある

地理学関係の構想・組織の概要を示してみよう。

まず、筑波大学は、学界にも社会にも開かれた国際性の高い大学で、研究面では個別科学の深化ばかりでなく、学際的研究開発が十分になし得られ、教育面では基礎的な学力と調和のとれた人間性、体力をもつ国際性の豊かな人物を養成するため、研究組織である学系・研究所（センター）と教育組織である学群・学類とを分離した。

在来の学部はクラスターカレッジ（学群・学類）制とし、基礎的な第一～三の3学群と、体育・芸術や医学等の専門学群とした。3学群はすべて、自然・人文・社会の各分野の学類を含み、各学群が互に切磋琢磨して学業に励み、カレッジライフをエンジョイし得る組織とした。大学院は研究後継者を養成する5年制の博士課程と高度の知識技能を習得して社会のリーダーとなるべき国際性豊かな社会人を養成する2年制の修士課程とに分けた。また、研究所は年月の経過と共に創立時代の活気がうすれ、人事の停滞、施設や研究の老朽化の弊が生じ易い欠点を防ぐため、在来の永続的な付置研的なものでなく、年限をつけた機関（センター）とし、特定の所員だけの利用でなく、広く共同的に利用するようにした。文科系では図書館の制度を抜本的に改組することにした。

以上のような組織・編成の中で、地理学が所属しあるいは密接な関連をもつ機関をあげると、次のようである。

まず、地理学のスタッフの所属する学系は地球科学（Geoscience）系とした。ここには地理学・地質学関係の研究者が集まっているが、そこでの研究内容はドイツで出版されている国際的専門雑誌「Geoforum」がめざしている physical, human and regional geoscience を包含するように計画された。地球科学系での研究は決して physical geoscience だけではないことを忘れないようにして、学際的研究の開発深化に努めてもらいたい。例えば、古地理学、第四紀研究、花粉分析、カーボンデレーティング、泥炭や火山堆積物研究、考古学、人類学、植物地理、気候変化などを総合したような研究とか、総合的な地域研究などは、そのよい研究例であろうかと考える。

大学院博士課程は地球科学として当然もつが、修士課程には地域研究研究科、環境科学研究科、応用地球科学研究科が設けられる。地域研究研究科の内容は語学・国際政治・国際経済・地理学・歴史学・民族学などを主体とする。環境科学には人類・生物と環境との関係論、環境測定、測定した環境の地図表現、自然環境の保全と開発論等が中心で、地図学・写真測量およびそれからの図化技術、リモートセンシング、コンピューター地図学・自然保護などが含まれるよう計画されている。したがって、地理学、生態学、生物学、化学、農学、地質学、経済学などの専門分野が含まれる。

学部段階では、第一学群の第三学類が主に物理学・化学・地球科学を志向する学生が含まれるが、第二学群の第一学類比較文化にも地域文化・地理学・地誌学が含まれるように計画されている。

センター関係では、水理実験センターとラテンアメリカ研究センターが計画され、水理実験センターはすでに発足している。ここでは、地形営力・水収支・気象・植生などが中心になるが、地質学・土壌学・地球物理学とも関係をもつ。ラテンアメリカ研究センターは海外調査を主体とするが、今までの科研費によるような短期のものではなく、中心研究者は少なくとも1年間は現地に滞在して調査研究に努める制度で、現地の大学と契約して相互に研究室を提供する方式が計画されている。こ

れは、東京教育大学地理学教室ですでに3回に互って行なってきたブラジル調査とその報告が一つの基礎になったもので、さらにその発展を図るものである。地理学が中心であるが、ほかに植物学、人類学、民族学、歴史学、国際経済学、国際政治学、地質学なども含まれる性質のものである。それだけに、中心研究者はライフワークとして研究をまとめる意欲的な学者で、若い研究者はこの調査研究によって学位論文をつくる意欲をもつ者で組織されなければ成功しない計画である。

以上のように、地理学という名称は組織名にはないが、地理学の実質的研究や教育は多くの部門で行なわれるように組織されており、学際的研究に比較的なれている地理学研究者が、さらに心を合せて新しい地球科学の開拓に努力されることを念願している。こうした雰囲気は A. von Humboldt 以来、早くからヨーロッパで行われてきた学術探検や、日本での九学会の総合調査、第四紀学会の研究などに現れ出しているものであり、それは大塚の地理学教室の野外実験や海外調査などで、その芽が育ちつつあったものでもある。

ただ、長年つちかわれてきた講座制、助手制度には、欠点と共に長所をもっていて、明治以来、日本の科学を発展させる原動力となってきたので、その長所を生かし、発展させる配慮には、さらに十分な工夫をこらすべきであったかと反省もしている。しかし、新しい大学の創造には、何とんでもファカルティー全体の頭の切り替えによってはじめてなされることが多いのであり、知的生産の創造や人材の養成は組織や設備で出来るものでなく、ファカルティーの学問に対する情熱と協力、実践によってはじめて達成されることを念頭において、新大学の理念の実現に精進されることを祈って止まない次第である。

(尾留川正平 (1977): 東京文理大・東京教育大の地理学教室から筑波大学地球科学系への発展. 東京教育大学地理学研究報告, 21, 81-87を転載)

I-2 筑波大学における人文地理学・地誌学分野と研究・教育体制

以下では、まず筑波大学における地理学関係分野の全体像を略述し、その中で人文地理学分野と地誌学分野が占める位置と役割について述べることにしたい。

筑波大学がほかの大部分の大学と大きく異なる点の一つは、「学部」を廃して、研究組織と教育組織を分割したことであろう。開学時に、大学首脳部の粋な某先生が、本学の組織を芸者のそれにたとえて、研究組織である「学系」を「置屋」、教育組織の「学類」を「お座敷」と呼称した。しかし、若い人たちの中には、芸者のことを知らない人もおられるであろう。

細部を省略して大まかに説明すると、研究組織としては、教職員の本籍地に相当する「学系」という集団がある。筑波大学には26の学系があり、原則として、教官はいずれかの学系に属している。地球科学系には地理学以外に、地質学を専門とする教官がいる。そして、歴史・人類学系と教育学系にも地理学を専門とする教官が合わせて3名在籍している。他方、教育組織としては、大きく「学類(他大学では学部に相当する)」と「研究科(大学院)」に分かれる。大学院には、5年制の博士課程と2年制の修士課程がある。

1. 研究組織

筑波大学において、地理学を専門とする研究者は、原則として何れかの学系に所属している。以下では、地球科学系と歴史・人類学系、教育学系について、それぞれ簡潔に述べることにする。

(1) 地球科学系

地球科学系は大別すると、地理学・水文学と地質学に二分される。地理学・水文学には人文地理学、地誌学、地形学、気候学・気象学、水文学の5分野がある。

地球科学系の中には、地理学を専門とする教官が40名近く在籍している。学系内では学系会議が月に一度あり、学系の運営に関する事項が諮られる。現在、学系長は地質学の梶原良道教授である。教官の大半は同じ建物に研究室をもっているため、地理学の各分野はもちろんのこと、地理学と地質学の教官の交流は密である。しかし、東京教育大学理学部の地理学教室と地質学教室との合体を基盤としているため、本来の地球科学の他分野が欠けている点は、地球科学系の今後の課題であろう。

(2) 歴史・人類学系

歴史・人類学系は、史学と人類学の教員集団に大別されるが、歴史地理学は史学を構成する、小さいが独立した分野である。歴史地理学分野は、筑波大学になって新設され、1976年に菊地利夫先生が初代教授に着任された歴史の浅い教室である。しかし、大塚の地理学の伝統を築かれた一人といわれる内田寛一先生が歴史地理学に大きな足跡を残されたり、東京高等師範の人文地理学が歴史学との関係が強かったりしたこともあって、それらの伝統の復活ともみることができる。

(3) 教育学系

教育学系の伝統は、1872（明治5）年の東京師範学校の開校から引き継がれている。教育学系は、教育基礎学、教育環境学、教育経営学、教育方法学、教科教育学の5つの研究領域に分けられ、さらに教科教育学は、人文学、数学、理科、社会科の各教育学から構成される。社会科教育学に含まれる地理教育では、教育学としての伝統が重んじられるとともに、教育学と地理学とを踏まえた教科教育学としての創造が求められている。

2. 教育組織

人文地理学分野と地誌学分野に所属する教官は、筑波大学の中で多様な教育組織と係わっている。以下では、人文地理学分野・地誌学分野が関係する教育組織と、歴史地理学分野が関係する教育組織をあわせて紹介することにしたい。

(1) 学類（他大学では学部に対応）

a. 自然学類（地理学・水文学専攻）

自然学類には数学、物理学、化学、および地球科学の4主専攻があり、他大学の理学部にはほぼ相当する。地球科学主専攻の中では、地理学・水文学と地質学の二つの専攻に分れている。一年次の授業は主専攻の区別をせず、広い範囲にわたって自然科学の基礎教養を修得したうえで、二年次以降に主専攻を選択できる。

地理学・水文学専攻は地球の大気圏、岩石圏、水圏にみられるさまざまな事象、およびそこを舞台

に展開される人間活動などを研究対象としている。

本専攻には人文地理学、地誌学、地形学、気候学・気象学、そして水文学の5分野がある。一年生は地理学関係の入門の講義・実験などを受け、専攻が決まると、各分野では入門、特論、実験、野外実験（3泊4日程度）、そして演習などがカリキュラムとして用意されている。外国地誌（アジア、ヨーロッパ、アングロアメリカ、ラテンアメリカ、オセアニア、アフリカ、ロシアなど）は、毎年2～3科目ずつ順番に開講している。その他、地図学・地図学実験は毎年開講しており、植生地理学、土壤地理学、海洋学などの集中講義がある。卒業生の進路については、表1を参照されたい。

b. 比較文化学類

比較文化学類は「伝統的学問の長所を継承しながらも、総合的な視野に立って学問・文化の諸領域を展望し、自由闊達な考察と創造を進める」ことを理念とする。すなわち、既成の学問分野にとらわれず、教官、学生諸君がともに学際的で創造性豊かな研究を進めることを目指しているのである。このため、比較文化学類は大きく文学、地域、思想の3主専攻に区分され、さらに地域主専攻は、文化地理学、文化人類学、日本研究、アジア研究、ヨーロッパ研究、アメリカ研究の各分野に分れている。文化地理学分野には、学類定員80名のうち毎年10名前後の学生が所属している。

文化地理学分野の特徴は、それぞれの空間および時代において人間が営んでいる文化のパターンや構造の解明と、世界の各地域がどのような自然的・経済的・文化的性格をもっているかを分析する地域地理学（地誌学）の研究に力点を置いている点である。また、他分野と密接な関連を持ちつつ幅の広い文化科学としての地理学を目途としている。卒業論文のテーマは多岐にわたり、外国研究が多いのも大きな特色である。

文化地理学のカリキュラムは、まず基本概念と研究手法を身につけ、世界各地の自然的・経済的・文化的性格を学び、幅広い視野に立った卒業研究が行えるように、段階的に編成してある。特に野外実習での自然環境と都市的・農業的景観の観察、地形図や空中写真の利用などを重視している。94年から「文化地理学実験実習」では、地表の文化事象の地理学的分析の高度化を意図して、地理情報システム（GIS）の初歩についても教育している。卒業生の進路については、表1にまとめられている。

c. 人文学類（歴史地理学）

人文学類は、社会学類・自然科学類とともに基礎的性格の強い学問分野の集合である第一学群を構成する。人文学類は、哲学主専攻、史学主専攻、考古学・民俗学主専攻、言語学主専攻に分れており、歴史地理学コースは史学主専攻に属する。教員数の関係で十分な授業数を提供しているとはいえないが、概説、講義、特講、資料講読、演習、実習が開講されている。また、史学や日本民俗学などの隣接分野、それに比較文化学類や自然科学類の地理学関係の授業が豊富に用意されている。

近年における卒業論文は、日本の近世・近代を扱ったものが多いが、古代・中世、あるいは外国との比較研究を行ったものもあり、テーマは多彩である。地歴科免許状のほか、人文学類では学芸員の資格も取得しやすい。卒業生の主要な進路については、表1にまとめられている。

なお、人文学類の授業は、主として歴史・人類学系所属の教員が担当しているが、うち1人は第二学群の日本語・日本文化学類日本文化専攻（地理学の独立したコースはない）の主担当教員でもある。

第1表 卒業生の進路

学類	卒業年度	民間	官界	教育界	進学	その他 ・未定	合計
自然学類 (人文地理学・地誌学専攻)	1977年度	0	1	2	1	1	5
	78年度	1	2	2	4	0	9
	79年度	4	0	1	2	0	7
	80年度	2	0	2	2	0	6
	81年度	1	1	1	3	1	7
	82年度	1	0	2	3	1	7
	83年度	1	2	0	3	0	6
	84年度	2	0	0	0	1	3
	85年度	1	2	0	3	0	6
	86年度	2	0	2	2	0	6
	87年度	0	0	4	2	0	6
	88年度	2	3	2	5	0	12
	89年度	5	0	0	1	0	6
	90年度	2	1	1	3	0	7
	91年度	6	0	2	0	0	8
	92年度	8	0	0	0	0	8
	93年度	10	4	1	3	3	21
	94年度	5	1	0	3	1	10
	95年度	4	0	1	2	3	10
	96年度	7	0	0	3	2	12
	97年度	12	1	1	3	3	20
	98年度	2	0	0	4	7	13
合 計		78	18	24	52	23	195
人文学類 (歴史地理学専攻)	1977年度	0	0	0	1	0	1
	78年度	0	0	0	1	1	2
	79年度	0	0	3	0	0	3
	80年度	0	0	1	0	0	1
	81年度	1	0	0	1	0	2
	82年度	1	0	2	1	0	4
	83年度	1	0	2	0	0	3
	84年度	0	0	2	2	0	4
	85年度	0	0	1	2	0	3
	86年度	1	0	1	0	0	2
	87年度	0	0	0	1	0	1
	88年度	1	0	2	1	0	4
	89年度	2	0	0	2	0	4
	90年度	1	0	0	0	0	1
	91年度	0	0	2	0	0	2
	92年度	1	0	1	2	0	4
	93年度	0	0	1	1	0	2
	94年度	1	1	0	0	0	2
	95年度	1	1	0	0	1	3
	96年度	0	0	0	2	0	2
	97年度	1	0	0	1	2	4
	98年度	0	0	0	0	4	4
合 計		12	2	18	18	8	58
比較文化学類 (文化地理学専攻)	1978年度	2	2	2	1	0	7
	79年度	5	2	4	4	0	15
	80年度	2	0	1	1	0	4
	81年度	4	1	2	1	0	8
	82年度	2	0	1	0	0	3
	83年度	2	0	0	2	0	4
	84年度	0	1	3	1	0	5
	85年度	5	0	0	1	1	7
	86年度	4	0	0	2	1	7
	87年度	3	1	1	2	0	7
	88年度	4	0	1	3	0	8
	89年度	2	0	2	2	0	6
	90年度	9	1	2	0	0	12
	91年度	2	0	4	3	0	9
	92年度	7	0	1	1	0	9
	93年度	2	0	1	4	0	7
	94年度	6	1	0	0	0	7
	95年度	4	1	2	1	2	10
	96年度	4	2	0	2	1	9
	97年度	3	1	0	1	2	7
	98年度	2	0	0	1	0	3
合 計		74	13	27	33	7	154

(2) 大学院

a. 地球科学研究科 (博士課程)

地球科学研究科は、二つの専攻、すなわち地理学・水文学専攻と地質学専攻からなる。地理学・水文学専攻には、人文地理学、地誌学、気候学・気象学、地形学、および水文学などの分野がある。

入学した一年生は、地球科学共通の科目、例えば「統計学」、「地球科学特論 (特にリモートセンシ

ング)」などを選択することができる。そして前述の5分野は、それぞれ「研究法」、「演習」、「野外実験」、「特論」を用意している。また毎年、複数の非常勤講師（他大学教員）による集中講義もある。

5年一貫制の博士課程であるが、前期（2年間）で特別研究を書き上げなければならない。これに合格すれば修士（理学）の学位が得られる。

博士課程後期では、もちろん、博士号取得のための研究を続ける。院生は各分野のゼミや中間発表、さらには指導教官からの個人的指導を受けつつ研究活動を続ける。取得できる博士号は、博士（理学）又は博士（地球科学）のいずれかであり、本人が選ぶことができる。

大学院入試は9月上旬に行われる。筆記試験は英語（英文和訳・和文英訳）、専門科目、および関連科目である。専門科目と関連科目は人文地理学、地誌学、気候学・気象学、地形学、水文学、数学、化学、物理学、生態学、地質学、経済学、および日本近世史であり、そのうちから3科目を選択する（ただし、専門科目を少なくとも2科目含める）。筆記試験の翌日には口述試験がある。

地理学・水文学専攻の募集人員は、連携大学院（後述する）を除くと5名である。ただし、大学院の重点化によって、数年前より募集人員をはるかに超えた学生を入学させている。第一年次と第三年次の追加・編入募集が、翌年の2月に行われることもある。受験を希望する人は、入学後に研究を希望する分野の教官と事前に話し合うことが望ましい。なお、入試問題は過去3年間のみ閲覧・コピーが許されており、その問い合わせには地球科学系事務室が応じている。

b. 歴史・人類学研究科（博士課程）

歴史・人類学研究科は、歴史・人類学系という教員組織に対応する研究科で、史学と文化人類学という二つの専攻からなる。歴史地理学は、日本史・東洋史・西洋史とともに史学を構成する1分野である。歴史地理学が独立した分野になっていることは、筑波大学の特色の一つである。

講義、演習のほか、地域調査を行う実習を重視したカリキュラムが組まれており、実習の成果は一年おきに「歴史地理学調査報告」として発表している。歴史理論と史学史という共通科目が必修であるが、ほかの史学や、文化人類学の専攻科目、あるいは地球科学研究科の授業をかなり自由に履修することができる。2年目に中間評価論文（修士論文に相当）を書くことが義務づけられている。取得できる学位は、修士（文学）と博士（文学）である。

史学専攻の募集人員は6名で、歴史地理学分野には、年によって変動があるが、平均して毎年1名入学している。入学試験は2月中旬に行われ、外国語・資料講読・専門科目の筆記試験、それに卒業論文と面接の評価を総合して判定される。過去の入試問題は、歴史・人類学系の事務室でコピーを入手することができる。

c. 地域研究研究科（修士課程）

本研究科は、急速に流動化しつつある現代世界の各地域の実態を広い視野から総合的・学際的に捉え、また同時に、国際社会に対応しうる高度な専門的知識と技術を身につけた学生（有職学生を含む）を教育することを目的としている。

次の8つの地域がコースとして設定されている。アメリカ研究コース、カナダ研究コース、ラテン

アメリカ研究コース、ヨーロッパ研究コース、東アジア研究コース、東南アジア研究コース、日本研究コース（日本語教師養成プログラムを含む）、そして中近東研究コースである。

教授陣・学生に外国人が多いことも特色である（入学定員50名。ただし大学院重点化への対応で入学定員の枠が拡大しつつある）。

d. 教育研究科（修士課程）

本研究科内には、教科教育という専攻があり、地理学に関係するものはそのうち、「社会科教育コース」と「理科教育コース」である（入学定員はそれぞれ23名）。

社会科教育コースは、社会科教育に関して、総合力のレベルの高い専門性と実践力を備えた、中等教育の分野において指導的役割を果たす人材育成を目指している。したがって、将来社会科教育と関連する優れたプロフェッショナルあるいは研究者を育てるべく、大学卒業予定者だけでなく教育関係の有職者も募集対象に含まれる。また、現職者に対する特別選抜の制度もある。

（高橋伸夫（1995）：地理学教室あんない 第39回筑波大学。地理，40（1），82-95を修正）

I-3 創立時から今日までの思い出

大塚の地理学を筑波の地に

高野 史男

（1）筑波大学も発足以来すでに20年余、当初植えられた若木が亭亭たる大木に育っているのだといえ、それなりに誠に祝福すべきことと思う。しかし考えてみると筑波大学は全く新しい大学として新設されたものではない。

明治維新当時「邑に不学の戸なく、家に不学の人無からしむ」ことを目指して1872（明治5）年に学制頒布が行われた時、最初に創設されたのが東京本郷湯島の教育者養成のための師範学校であった。それが1886（明治19）年高等師範学校となったが、校地狭小のため1903（明治36）年に小石川区大塚に移転した。さらに1929（昭和4）年同校が東京文理科大学に昇格し、高等師範も併設されたが、戦後の学制改革で1949（昭和24）年文理大・高師その他が包括されて東京教育大学となった。大塚学園には全国の俊秀が集まり、一流教授陣と共に学問の花を咲かせていたのである。

大塚の地に深々と根を下ろしていたこの大学も、新しい時代の学問・教育の進展に適応した施設の拡大充実のためには余りにも敷地が狭かった。このため他に適当な土地を求めて移転ができないかを都内および周辺地域に探し求めたのであったが、ちょうどその頃国家的プロジェクトとして新しく計画的に造成されることになった筑波研究学園都市があり、その中心的施設の一つとして有力大学を誘致することが考えられていた。東京教育大がその構想に乗るのが最善の選択とされるようになり、その間種々複雑ないきさつがあったことは事実であるが、結局東京教育大学は閉学して筑波に移転し、新しい筑波大学として生まれ変わるようになった。そして1973（昭和48）年開学、翌74年4月学生を入学させて本格的に発足したわけである。

（2）筑波大学成立の前史をごく簡略に圧縮すれば以上のようなものであるが、ここでこのような前史をわ

わざわざ記したのは筑波大学が決して1973年に突如として筑波の地に誕生したものではなくて、明治初期以来ほぼ100年の歴史と伝統を持つ学園であることを強調しておきたかったからである。

竹という植物は幹は空で柔軟な動きをするが、所々に節（ふし）があって強靱ですくすくと伸び、なかなか折れることがないように、わが学園もその時々の流れに従って名称や組織、場所などを変えてはいるが、それは竹の節のようなものであった。その根は深く広く地中を這い、幹は真っすぐに天（理想）に向かって伸びて行っているというべきであろう。

学園の伝統なるものはどの大学にもあり、それは必ずしも良いことばかりではなく捨て去るべき悪しき伝統もあるかもしれない。しかし学園が長い歴史を持つということはそこに学ぶ人々にとって必ず将来のために何らかの肥やしとなるはずである。一概に無視すべきものではないであろう。筑波大学の地理学教室（地球科学系地理学水文学部門・地球科学研究科地理学関係専攻）は大塚の東京教育大学、さらにそれ以前の東京文理科大学・東京高等師範学校時代からの長い歴史をもつ地理学教室の後身であることはまぎれもない事実である。大塚の地理学教室はわが国で最も古くまた最大の地理学教室として輝かしい学問的業績と伝統を築き上げ、多くの人材を学界・教育界に送り出してきた。

- (3) とくに「大塚の地理学」が特色を発揮したのは、1923年から1947年まで教室を指導された田中啓爾先生を中心として一貫して「地誌学が地理学の本命である」という立場を推進してきたことである。教室の関係者の学会発表なども“〇〇地域の実態調査に基く研究”といった地誌学的研究が多かった。このようなことから自然に“地誌学派”とでもいうべきものが形成される状況が生じてきた。そしてその基盤の上に青野壽郎先生（1947年～1965年東京教育大教授）が主宰された「日本地誌研究所」による「日本地誌全21巻」（二宮書店、1967～1980年）が完成したのである。これは量的にも質的にも日本はもちろん外国にも比類のない地誌書といってもよいが、これこそ田中先生が長年育成された大塚の地理学教室における地誌学の伝統と人材、そしてそれを見事に「日本地誌」という形でオーガナイズされた青野先生の精力的な仕事の結果である。個人的なことを記すのを許されるならば、筆者は「地誌研究所」スタッフとして「日本地誌」の編集とその一部の執筆、及び「地誌」の副産物としての「地理学辞典」（改訂版1989年・二宮書店）の編集に関与した事を大変幸せに思っている。

筑波大学の地理学にはこのような「大塚の地理学」の遺産が引き継がれているものと思う。地球科学系棟の前庭には今は大きく育っているであろうがマテバシイの樹が植えられ、その根元に「大塚の地理学を筑波の地に」と彫られた石碑が据えられているはずである。これは青野先生の筆になるもので、諸先生や諸先輩によって大塚の地に大きく育てられた地理学の伝統が筑波の地に移し植えられてさらに大きく育てて欲しいという願いが込められたものである。もちろん伝統を守るということは新しい先端技術などの進展に伴って地理学の研究方法や考え方が拡大進化することと矛盾するものであってはならない。21世紀に向ってこの地球上で人類がいかに生き残ってゆくことができるかについて、地球の科学としての地理学、そして地誌学が果たすべき役割には重大なものがあろう。このような地理学の将来について全地球的視野からの展望を切り開くこ

とを筑波大学の諸氏に期待している。

今や筑波大学は広大な敷地に多大な国費を投じて様々な最新の施設が建設され、国際A級大学の資格十分なものがある。しかし問題は建物や施設が立派なことではない。そこでいかに優れた研究が行われ、いかに優れた人材が育成されて社会に送り出されているかにかかっているのである。

- (4) 終りに一言付加すると筆者はちょうど大塚から筑波への大学移行の時期に地理学教室主任を引き受けさせられていた。この移転の最も多忙な時期は1976年から77年にかけてであった。1974年には筑波大に一年生が入学したが、大塚にまだ学生が残っており最後の地理学科学生の卒業は1977(昭和52)年3月であったから、多くの教授は両大学兼務であった。筆者も両方の大学の授業や学位論文審査、事務的な会合や雑務に追まわられていた。この猛烈に多忙な大学移転の残務整理の期間中、大塚の教室の最後の助手を勤められた田林 明・高阪宏行・松倉公憲・田宮兵衛・鈴木裕一その他の諸氏には図書資料や機械器具の整理運搬など全ての実務に大変なご苦労をかけた。初期の筑波大の地理学教室の業務が支障なく動いたのはこれらの方々の縁の下での力持ちのおかげで、これはその後の筑波大地理の発展の基盤となったことを銘記したい。筆者にとって筑波は個人的にはなつかしい思い出の残る人生の一つの節目であり、1977年5月から80年3月に停年退官するまでの間、単身赴任で並木の3LDKの官舎に独身時代の田林君及び地球科学系技官の宮坂和人君と同居し、一つ釜の飯を共に食って暮らした。筑波がまだ都市としての体をなしていない時期の話である。

筑波大学地球科学系発足時における人文地理学・地誌学

山本 正三

筑波大学地球科学系が発足し、人文地理学・地誌学の専攻コースが始まってから25年たったと聞いて、時の過ぎるのの早さに驚いている。開学当時のことがさまざま思い出されるが、なかでも時々思い出して、不思議でならないことがいくつかある。それは裏面史みたいなものでかなりうらみがましくもあり、聞き苦しいことのようにも思われるが、誰かが書き残しておかないとこの世から消えてなくなってしまうので、あえて書いてみることにした。

筑波大学のマスタープランがかなり出来上がってきた頃のことだろうと思う。ある時、菅野三郎先生から渡部景隆先生の研究室に来るよという電話があった。東京教育大学の地下1階の中庭側にあった渡辺先生の研究室に早速おじゃましたところ、両先生から「本学の地理学教室と地質学教室は筑波新大学構想では1つになって地球科学系に統合される計画になっているが、人文地理学は筑波大学の地球科学系に参加するということだが、本気でそう思っているのか、尾留川さんはそういつておられるけど」と尋ねられた。私は非常に驚いて、げん顔をしていたのではないかと思う。菅野先生は「まさか田中啓爾さん流の地域性の地理学をやるつもりではないだろうねえ、啓チャン流の人文地理は地球科学ではないよ」といわれ、「どんな人文地理学を筑波ではやるつもりか」と質問された。その時まで私は尾留川先生から筑波新大学構想では地球科学系というものがつくられ、地理学と

地質学が一緒になるという話を聞いていなかったの、どう答えるべきか一瞬戸惑ったが、地球科学系に地理学教室と地質学教室を統合するという案は、尾留川先生を中心として東京教育大学地学科の先生方がつくられたものだということなので、当然、人文地理学の仲間も地球科学系に参加するものと考えて、両先生にお答えすることにしたが、私にとっては別につくりごとをいったわけではなかった。それは次のようなことである。

地理学は地球の表面の現状、つまり地表における自然と人間の現状を記述説明することを目的とする学問領域であって、地表にどのような手を加えて地表を人間が生き住むことができる場所にしているか、そこでどんな活動をしているか、つまり、人間の生きている姿を地球の1つの事象として理解しようとするのが人文地理学なので、人文地理学は地表に関する地球科学の1分野と見做されている。研究対象は多方面にわたり、自然との関係で人間の現象を考えたり、人間が空間的に広がって分布することから距離とか人間の集まり具合などから人間の現象の地域的な特色を分析したりするので、計量分析とか新しいさまざまな方法が用いられているし、時間的な変化を追って現象の形成過程を分析するなどさまざまな研究手法があることなどを説明した。

すると両先生は、君たちがそういう研究をやっていることを示す事例があるかといわれたので、「それではこれからすぐもってきます」といって私は研究室にもどり、自分や奥野先生や尾留川先生などの論文の別刷をいくつかと、A.ショレーの地理学方法論の論文集の訳書と私たちの編著「世界の自然環境」をもってきて、内容を説明した。尾留川先生の鳥海山における高度による気候条件の差異と栽培可能な作物との関係の分析に基づく開拓可能性の評価や、南伊豆における丘陵の斜面の向きによる土地利用や生業状態の差異の分析を説明したり、私と奥野先生の農業生産性の多重相関分析なども説明した。奥野先生の毎日の人口移動の分析などには、両先生はこれまでの人文地理学のイメージがふきとんだよう気がしたといっておられた。そして結論として、なるほど人文地理学は地球科学の一分野とみてよいということになった。

筑波大学発足とともに筑波に在住し、文字通り地球科学系の施設の建設に携わったのは私たちの仲間では高橋講師であり、ついで石井、小林、赤羽の3準研究員であった。尾留川先生は初代の企画調査室長として大学全体計画の指揮に当たられた。今でも不思議に思っているが、地球科学系発足当時、人文地理の仲間は地質学の先生方との親近感が強く、結果として、随分好意を受けたように思っている。それは私は間違いなく菅野先生、渡辺景隆先生との話合いが契機になっていると思っている。その後、鈴木淑夫先生、佐藤 正先生、藤井 隆先生、さらに猪郷久義先生、青木先生から色々な時に人文地理の仲間への声援をうけた。大学院生の研究発表会で、人文地理学・地誌学の院生が、特定の地域を綿密に調査した研究を発表しているのをみて、地域のフィールドワークを重視される地質学の分野の先生方の共感を呼んだのかもしれないと感じている。山下清海君の横浜中華街の研究を御覧になって、菅野先生は、人文地理学の研究方法は地質学のある分野の方法ときわめて共通しているという感想を述べておられたが、それがとてもよい印象として記憶に残っている。

それにつけても地球科学系地理学・水文学専攻では、筑波大学発足当時、不思議なことばかりであった。その第1は、私たちは筑波新大学構想の中身についてほとんど何も知らされていないまま、

東京教育大学から移籍されてきたことである。うらみなどさらさらないが、尾留川先生は私などに意見をもちめたことは全くないし、私どもが引き受けなければならない業務や責任についても情報をほとんど流してくださらなかった。幸い先生を信頼申し上げていたので、それほどいらいることはなかった。しかし、地理学・水文学専攻コースの先輩の先生方の同じような態度にはいらいらしたり、ずいぶん腹立たしい思いをしたものである。ある時、佐々木博さんがあの人たちは「情報貴族だ」といったことを忘れることができない。みんなに知らせるべき情報を仲間うち、あるいは自分1人でかかえこむ人がこの大学にはいっぱいだと彼はいったのだが、まったく同感であった。責任だけをおしかぶせ、他人を排除して自分たちだけがチャンスを利用するというやり方があちこちらに出てきた。少なくとも人文地理学・地誌学分野には筑波大学のマスタープラン策定に参画できた人が、尾留川先生以外ただ1人もいなかったことは確かなことである。したがって私たちの仲間は新しい研究企画や施設づくりなどの機会からはすべて疎外されたといって過言ではなかったのである。

実に不思議なことがあった。新しい専攻コースが作られる場合には、そのコースでどんな学生を養成するか方針が決められ、その方針に沿って履修すべき学科目が決められ、学年別にそれらが割り当てられるのが普通のやり方だと思う。養成方針は1つであることもあれば複数であることもあり、履修すべき学科目の編成は、人文地理学と地誌学と気候学と地形学とでは当然違いがある。しかし、地理学という専攻分野には、この違いを超えた共通な履修科目の必修が義務づけられるべきだと思う。東京教育大学の地理学専攻コースでは、かなり厳重な必修科目の履修が課せられていた。筑波大学地球科学系地理学・水文学コースの会議でも議長がそのような発言をして、標準履修例を作る委員会ができた。ところが、この委員会では共通の履修科目を決める議論はついにまとまらないでしまった。地形学の教授は、自分たちの学問は工学であって地理学ではないといい、気候学の教授は気候学は気象学の一分野で、地理学にまたがっているばかりで、地球物理学を目指していると公言していた。まして水文学は地理学とは別の学問分野だということで、口では地理学共通の科目履修を言いながら、それではどの科目を共通に履修させるかという段になると、自分たちは地理学ではないというのであるから、議論がまとまるわけはなかった。地理学・水文学コースの標準履修例の最初に印刷されてきたものが、地理学にまるで縁のない、少なくとも人文地理学・地誌学分野には縁もゆかりもない水文学分野の履修例であったのには唖然とさせられた。

地球科学系が発足してからしばらくの間、人文地理学・地誌学分野はなぜ自然学類に入っているのか、まるで出て行けといわんばかりの声が地理学の仲間からしばしば聞こえてきた。これはひがみや恨みで言うのではない。ある時、私は吉野教授にヤケのヤンパチでいったことを忘れない。「世界中に人文地理学、地誌学のコースのない地理学教室があるかいてみる。自然地理学のコースのないところはざらにあるけど」と言ったら、彼は「その通りだ。だから自分たちは地球物理学の専攻になりたいのだ」とはっきりいった。

こんな状況だったからに違いないと思うが、ある木曜会の会食の時、人文地理学・地誌学の何人もの先生が、われわれは歴史・人類学系に移ろうではないかという提案をされた。この提案はその場限りで実行にうつされることはなかったが、当時ののはなはだ釈然としないわれわれの仲間のおかれた状

況を思うと、これもいわれの無い提案ではなかったように思う。

こんな状況で出発して、人文地理学・地誌学の仲間は先生方も学生もずいぶんがんばったものである。いまや全国各地に同窓の研究者が根をはり、日本の地理学界を支える大きな役割を果たすことになったのだから、これからは初心を忘れることなく、新しい研究分野の開拓や海外への飛躍に大いに期待している。

私の筑波時代

正井 泰夫

筑波研究学園都市の建設が始まっていたことは知っていたが、どのくらいの進捗状況なのか見てみようと思って、ある日、東京から自分の車で見に行った。国道6号線は松戸を過ぎると周りの景色はほとんど農村風景であった。土浦の少し手前で左へ戻るように曲がり、大ざっぱな方向を目指した。その道は、いなかには立派なもので、6号線と大差なかった。なぜか不思議な感じだったが、あとで考えると、土浦から谷田部へ抜ける道で、今も幅は同じである。

適当に右折し、太陽の位置で車の方向を「確認」しながらいなか道を進むと、所々に道路建設中の殺伐とした風景が見られた。藪と林を少し抜けると新しい建物があった。藪に囲まれた無機材質研究所で、こんなところで何が研究できるのかという感じがした。北に向かっていなか道を適当に走ると、公務員住宅と思われるアパートが数軒あった。その後、この辺りは竹園と呼ばれることになる。何枚か撮った写真はどこかへ行ってしまった。

それからしばらくして、当時、お茶の水女子大にいた私に筑波へこないかという話があった。1975年4月、お茶大を併任のまま筑波に籍を置くことになった。大学院地域研究研究科の新設に伴う人事であったが、筑波の方には校舎が不足しているというので、最初の1年間は大塚の、しかもすぐ取り壊すことになっていた終戦直後のバラックみたいな建物で授業が始まった。

筑波では校舎の建設が急速に進められていた。しばらく前に何か大きな道を作っているらしかったところに、未舗装の東大通り（当時、この名はなかった）が走り、無機材質研究所も、すぐそばまで行かなくても見えるようになった。しかし、1年間は、筑波まで行く用事はほとんどなく、ただ気になったので建設進捗状況を時折り見に行ったり、無理して筑波で会議をもったりした。「超デラックス」といわれた体芸棟ができ、周りには次々と建物がつくられた。

地域研究の授業は、2年目、つまり1976年4月から筑波で行われるようになった。学群の方も3年次生まで入ってきているので、学生数は急速にふえ、私も比較文化学類の授業を少し担当するようになった。私は並木の公務員宿舎を借りたが、ほとんど使わなかった。そのうち、竹園の1戸建て公務員宿舎に入らないかといわれたので、そうした。もしかすると家族が皆くる可能性があったからである。

あれよあれよという間に時間がたち、1976年度も終わりになった。すると筑波大学第1回の修了生を出すというのである。地域研究研究科は修士課程だったので、学群の第1期生よりも1年前に修了（卒業ではない）ということになったのである。幸い立派な会議室が完成していたので、そこでめでたく9人の修了生を出すことができた。

学園都市の建設は急速であった。自動車交通都市指向ということで、確かに学園都市内は、日本としては別格に恵まれた道路整備が進められた。しかし、よくいわれるように、当初は長靴が本当に必要ところだった。東京・筑波間は原則として自分の車で行ききしたが、途中の道の悪さと分り難さには閉口した。新しいルートを開拓しようとする、必ずといっていいほど迷った。練馬と筑波の間は、深夜ならば片道2時間だったが、日中は3～4時間が普通であった。

途中の道も、年中、工事中だったり、新設されたりした。何年かして、一応最短コース（時間的に）と思われるルートを発見した。何とそれは、私がかつて4年間ほど住んだことのある南浦和団地経由のもので、しかも私の昔のアパートの真ん前を通るものだった。そこが時間的にちょうど中間点だったのは、何かの偶然か。

竹園の家の庭の管理は大変だった。何しろ芝が堅いのである。つまり、東京の家でつかっていた芝刈機は竹園の「芝」に合わず、機械がすぐ壊れてしまうのである。そこで仕方なく、3台こわしたあと、業者に頼むことにした。もっとびっくりしたのは、10本ほど植えられていた木が、数年の間に、数は半分となり、背丈も半分になってしまったことである。水やり不十分のせいもあるだろうが、盛土した粘土質の赤土があまりにも堅かったのだろう。

ある日、といっても夜の11時半、東京へ帰る学生を3人乗せて竹園の家を出た。その夕食ではビールを飲んだので、家でコーヒーを飲んで酔い覚ましをしたあとである。深夜のいなか道を突走り、やがて南浦和の懐かしい団地に入った。するとたくさんのランプがともっている。夜間の一斉検問である。「どちらへ行きますか」、「東京へ」、「あれ、少し飲んでますね」ということで、生まれて始めて丁寧に「風船」の使い方を教えてもらった結果、「少し休んでから帰ってください」というので、少し回り道をして帰京した。昔だったらその20メートル手前に家があったのである。こうして一度も常磐自動車道を使わないで、私の筑波時代は終わった。

筑波大学 好事・嫌事

奥野 隆史

筑波大学に1976年4月に赴任し、その後1996年3月まで丁度20年間在任していた。その間、様々な研究・教育上の出来事を体験し、また好学、篤志の先輩・同僚・後輩を持てたことは大変好運であり、幸せであった。しかし、世の常として楽しいことばかりでなく、いやなこともまた数えきれぬほどあった。それらの若干のものについて記したい。

（1）好事

筑波大学在職にあって最も楽しかった事は、大学院の巡検であった。それは、雑事から完全に開放され、思う存分、四方青山ともいえる世界一美しい日本の国土を観察しえたからである。とりわけ、私が主催した分野での巡検は、大体6月末に行われるのが常であったため、緑の絨緞の中を調査して歩くの感があった。私の大学院巡検での方針は、院生たちが自ら設定した修士論文や博士論文の課題が、操作上実行可能であるか否か、実行可能ならば、効率的な調査法は何か、を検討する実験場とし

て巡検を利用することであった。そのため、巡検対象地域を巡検期間中固定させることとした。私が学生であったときに、観光旅行もどきのもの、委託研究の手伝いのもの、野外観測だけのものなど多様な巡検を経験したが、恩師青野寿郎先生の巡検は、一度として伊豆下田町を離れることはなかった。先生の語るところによれば、下田町を初めに調査に訪れたのは1930年頃のことで、白浜海岸で裸の海女さんに誘われて閉口したそうである。それ以来蓄積された南伊豆一帯に関する知識は大変なものであり、農家一軒一軒に飼われている豚の頭数まで覚えられていた。そのため院生の聞き取ってきた情報が正しいか否かをチェックでき、そのような理由で、伊豆下田町に固定化したとうかがったことがあった。この青野先生方式を少しだけ真似をして、毎年同じ場所を対象にするのではなく、単年あるいは若干年は固定化することとし、調査課題は院生の自由にまかせた。この巡検での調査成果が修論や博論の一部になったものがかなりの数にのぼり、私の巡検が院生の研究にかなり役立たと現在でも自負している。

記録保存のため、私が主催した大学院巡検を記しておく。

1980. 9. 7～ 9.13 前橋市：

上野健一、浅見良露、村山祐司、伊藤 悟、菊地俊夫、全 順任、中川 正、大八木智一、加賀美雅弘

1981. 9. 6～ 9.12 甲府市：

浅見良露、村山祐司、伊藤 悟、菊地俊夫、南 榮佑、大八木智一、加賀美雅弘、大関泰宏、根田克彦、金 建錫、尾藤章雄、鳥谷 均

1982. 6.26～ 7. 2 新潟市：

村山祐司、伊藤 悟、菊地俊夫、加賀美雅弘、大関泰宏、根田克彦、金 建錫、尾藤章雄、井田仁康

1983. 6.25～ 7. 2 松本市：

上野健一、伊藤 悟、菊地俊夫、大関泰宏、根田克彦、金 建錫、尾藤章雄、井田仁康、郭 金水、丸山浩明、山下宗利、山本 充

1984. 5.26～ 6. 2 松本市：

上野健一、伊藤 悟、大関泰宏、根田克彦、金 建錫、尾藤章雄、井田仁康、郭 金水、サマルカンディ、丸山浩明、山下宗利、山本 充、井上 孝、尾野久二、洪 顕哲

1985. 6.22～ 6.29 山形市：

大関泰宏、根田克彦、井田仁康、郭 金水、丸山浩明、山下宗利、山本 充、井上 孝、尾野久二、洪 顕哲、篠原秀一、椿真智子、岡村 治

1986.10.11～10.18 山形市：

丸山浩明、山下宗利、井上 孝、尾野久二、安 在鶴、酒井多加志、森本健弘、山下 潤、河野敬一

1987. 7. 1～ 7.12 韓国（成田→ソウル→板門店→水原→仁川→ソウル→公州→大田→全州→光州→木浦→釜谷→馬山→釜山→浦項→慶州→蔚珍→雪岳山→ソウル→成田）：

大関泰宏、根田克彦、井田仁康、丸山浩明、洪 顕哲、安 在鶴、篠原秀一、井上 孝、酒井多加志、森本健弘、呉羽正昭、須山 聡、平 篤志

1988. 7. 2～ 7. 9 郡山市：

井上 孝、洪 顕哲、安 在鶴、篠原秀一、張 長平、酒井多加志、森本健弘、山下 潤、橋本雄一、松村公明、椿真智子、三橋浩志、満田宏子

1989. 7. 1～ 7. 8 盛岡市：

酒井多加志、橋本雄一、松村公明、呉羽正昭、須山 聡、平 篤志、伊藤貴啓、小田宏信、林 秀司、吉村忠晴、佐藤俊彦、上木原静江

1990. 6.30～ 7. 7 盛岡市：

酒井多加志、橋本雄一、松村公明、呉羽正昭、須山 聡、平 篤志、上木原静江、小田宏信、林 秀司、吉村忠晴、若本啓子、五十嵐弘道、栗倉美砂子

1991. 6.29～ 7. 6 新潟市：

橋本雄一，松村公明，小田宏信，林 秀司，吉村忠晴，若本啓子，鹿嶋 洋，側島康子，芳賀博文

1992. 6.27～ 7. 4 新潟市：

松村公明，小田宏信，林 秀司，吉村忠晴，若本啓子，鹿嶋 洋，側島康子，芳賀博文，堤 純，濱里正史，松井圭介，渡辺正和

1993. 6.26～ 7. 3 松本市：

小田宏信，林 秀司，若本啓子，鹿嶋 洋，中村康子，堤 純，濱里正史，松井圭介，渡辺正和，川瀬正樹

1994. 6.25～ 7. 2 松本市：

林 秀司，若本啓子，鹿嶋 洋，中村康子，堤 純，濱里正史，松井圭介，川瀬正樹，草原 輝，仁平尊明，浜野義則，山下 潤

1995.11.18～11.28 台湾（成田→台北→金山→淡水→台北→新竹→鹿港→台中→霧社→日月潭→北港→台南→高雄→台東→花蓮→太魯閣→梨山→台北→成田）：

中村康子，松井圭介，濱里正史，植田宏昭，堤 純，川瀬正樹，草原 輝，仁平尊明，平井 誠，桜井 誠，伊藤徹哉

（2）嫌事

上述の好事に相対する嫌事は，何といっても会議の多さであった．会議には何枚かの書類を伴うので，当然の事ながら山のような紙くずがたまることとなる．一時，会議を削減するための委員会を設けよう，いやまた会議が増えるから止めようといった笑い話のような話があった．私の20年間の在任中に関係した会議は次のとおりであった（会の名称に誤りがあるかもしれない）．

評議員会（月1回），財務委員会（年1～2回），四学系長連絡会（月1回），社会学類教員会議（年2回），比較文化学類教員会議（月1回），自然学類教員会議（年2回），自然学類運営委員会（月1回），全学カリキュラム委員会（年2回），大学会館運営委員会（年3回），図書館選書委員会（年2回），菅平実験センター運営委員会（年2回），厚生委員会（年3回），地球科学系会議（月1回），地球科学系教授懇談会（月2回），地球科学研究科教員会議（月1回），理学博士審査委員会（年4回）

さらに，教員人事の専門委員会の構成員になると，この委員会は1件につき2回開かれ，世話人に指名されると本委員会に2回出席させられる．私は10件について世話人に指名されたが，専門委員会は10人の委員から構成されており，その中少なくとも8人の日程を尋ねて開催日を決める作業の煩わしさ，世話人の不手際から提案人事が否決されるならば切腹ものであるもので，会議での気配りなど，神経の磨り減りは大変なものであった．また，歴史・人類，社会工学，体育の諸学系や自然系他学系の委員会にも引っ張り出される仕末であった．

このような会議に単年度ですべて出席せねばならぬという訳ではないが，そうでなければならないとすれば，年間約100日も会議をやっているということとなる．これに加えて，組織変更，大型研究プロジェクト，カリキュラム改訂など大学の研究・教育の根幹にかかわる問題が発議され，それらに関する会議に参画するということになると，会議による時間消耗は倍加することとなる．このような会議に対するいやさに対抗して内職をよくやったものであった．

地域研究研究科と比較文化学類草創期

佐々木 博

(1) 筑波大学との出会い

1975年2月9日(日)、地球科学系初代教授吉野正敏に高円寺駅でボン大学の故G.アイマンス教授とともに車に拾ってもらい、筑波大学の追越寮に泊まったのが最初の出合いであった。当時大学の建物は今日の体芸棟1棟のみで、松林の中に大きな黒い箱がそびえていた。地球科学系もその中にあり、その後第一学群棟へ、さらに今日の自然系学系棟へと増築につれて移転した。

立正大学に10年勤めたのち、1975年4月1日筑波大学助教授で赴任することになり、3月24日(月)10時30分から筑波大学地球科学系懇談会が東京教育大学理学部会議室W317で開かれた。終って占春園で記念撮影した写真には、元気象庁長官故高橋浩一郎・故藤井 隆先生・増田富士雄技官(現京都大教授)・同夫人(甲斐)啓子さんらが映っていて懐かしい。

(2) 比較文化学類

1975年4月より第二学群比較文化学類が発足した。5月から手薄になった東京教育大学理学部の助教授を併任することになり、文部大臣永井道夫より辞令をいただき、恩師青野先生、尾留川先生の入っておられた、本来は演習室の広い研究室に入るようになった。停年後1年経つのに尾留川先生の本や荷物はそのままであった。この広い研究室で、歴人の野口鉄郎・現現の中田光雄氏らと、比較文化学類地域文化分野のカリキュラムを、青表紙の原案を参考にして改変作成した。

比較文化学類会議(5月28日(水)15-17時)の開催通知が初代学類長高橋進(現目白大学学長)名で届いた。教育大学理学部教授会と重なっていたため、廊下で町田貞理学部長に相談したら、「無くなる大学よりは、これからの大学の方に出たほうがいいんだろうなあ」。比較文化学類会議構成の地球科学系メンバーは正井泰夫さんと私の2人、2年目には石井英也君が技官から講師となって参加した。初年度初講義「人文地理学」を5月12日(月)、12時50分~14時05分に行った。54A11教室へ入ると、一人の学生が「起立、礼」と号令をかけた。これが音に聞く管理大学・中教審大学かとビックリした。第1回生は優秀で、社会で活躍している人が多い。

(3) 地域研究研究科

1975年から比文と並んで修士課程地域研究研究科が発足した。地球科学関係では正井泰夫さんが設置準備段階から参加され、研究科発足とともにお茶の水女子大から配置換えになって着任された。4月3日(木)、研究科会議が東京教育大学東洋史研究室田中正美教授の部屋E229で行われた。井門富士夫研究科長のほか村松剛・円羽春喜らがいて、広い学問分野のことをまくしたてられて、地理だけの世界とは違った会議に緊張の連続で疲れ、W館の理学部地理学教室へ戻ると正直ホットした。カリキュラムでも、地域別に政治・経済・歴史・文化などに区分されると、地理ができる講義は地形・気候など自然地理学しかないのではと思った。地域研究研究科は東京教育大学グランド脇の古色蒼然たる木造のS館を利用して発足し、2名の事務官が稲葉(現九州大教授)・故川島(元防衛大教授)2

人の技官とともに一階にいた。2階の廊下を人が歩くと、1階の机上にゴミが落ちてくるといった、今日では想像もできない校舎であった。初講義は5月8日（木）10時25分～11時40分で、「東アジアの地域性と風土」であった。桜村の本校へは、比文の人文地理学の講義と地球科学系会議のために、週1日月曜日に行くだけであった。

地域研究研究科は発足当初ご三家といわれる津田塾大・ICU・上智大学からの受験者が多く、東大やアメリカの大学卒業者も入学し、語学に強い地域研究の評判が定着していたが、今は昔話となったようである。防衛大卒業の自衛官が3～4名入学しており、礼儀正しく、はきはきし、よく勉強し、地域調査法の実習の案内作成などは、作戦計画書を書き慣れていてお手のものであり、調査地まで車に分乗していく際も、トランシーバーで連絡し合い、所要所にトイレストップを兼ねた集合地点を設定するなど、常に院生のリーダー役である。院生2年目は六本木の旧陸軍大・海軍大の生徒となって兼務し、平行して軍事を勉強する人が半分ほどいる。かれらの中から日本大使館ワシントンおよび北京駐在武官や外務省欧亜局への出向者が出てきたことは嬉しいことである。

私事であるが、1974年8月、尾留川正平筑波大企画調査室長からの電話で、「君を比文要員として1位でノミネイトしてある」と告げられた。どうしたことか比文の定員枠は人文地理学担当には割り当らず、尾留川先生が地域研究科教員定員10人の中に小生を突込んだらしい。初代井門研究科長から、「佐々木さん あなたのポストは尾留川さんに押し切られたものですからね」と何回も言われた。正井さん立正大へ転出の後、枠は文化人類学に取られてしまってまだ回復していない。

（4）地球科学系人文地理学グループへの期待

教授4名をようした大部屋である。博士課程の院生の数も多く、日本の中では有力な教室である。現在いる目白大学人文学部には教員38名中、人文地理枠は1名。小生は大学院設置のための1代限りの特別枠で、榎木先生が1年後停年になったら補充しないらしい。とても地理教育ができるようなカリキュラムもマンパワーもない。地理学科をもたない全国のほとんどの大学も、同じような状態であろう。

筑波大地球科学研究科のような人数の多いところで、初めて研究者が養成できる。お互い切磋琢磨し、情報交換が出来、外国雑誌が多いほか、関連分野の図書も多いからである。ただ調査報告書作成に時間を取られるせいか、読書量が少なく、大きな構想を考える訓練にやや難点を感じる。人文地理グループの卒業生なら、安心して使えるという思いが強い。研究と知識と興味を広くもち、変化する時代とシステムに対応できる大学院生が、澎湃として輩出することを期待しております。

筑波の思いで

高阪 宏行

私が筑波大学に勤め、筑波研究学園都市に住んでいたのは、1976年から81年にかけての5年間であり、そのうち1年間はイギリスに留学していたので、実質的には4年間だけなのです。1976年4月に筑波大学の併任助手になり、東京と筑波の二重生活が始まりました。並木住宅はまだ北側の一部がで

きたばかりで、私は入居者の最初の団で、最北端の棟に住むことになりました。並木のショッピングセンターはまだ開店しておらず、竹園まで買い出しに行き、途中でタケノコ狩りをした思い出があります。荒川沖の近くに駐車場を借りて、東京教育大学に行くときには、そこに車を置いて通勤したのです。

東京教育大学が閉校になり、筑波大学だけに勤めるようになると、意外なところで問題が起きはじめました。それは通勤形態が変わってしまったことでもあります。はじめは車を利用していましたが、運動不足に陥り、次に自転車を買って通勤しましたが、冬の寒さで耐えきれず長くは続きませんでした。運動不足解消のため、遠くの駐車場に車を置き歩いてみたり、住宅のまわりをジョギングしたりしましたが、どれもだめでした。要するに、家から駅まで歩き電車に乗って通うという形態が、私の生活にとって非常に大事な部分になっており、筑波学園都市ではそれができないことに寂しさを覚えました。電車で通勤というのは、単に運動不足の解消だけではなく、雑踏の中で行き交う人々の表情を眺めたり、季節の中で移り変わる都市の風情を感じたりすることで息抜きとなっていたのです。通勤は私にとって社会とつながっているという実感をもたせる時間と場を提供していたのです。筑波にきてから何か世間から隔離されてしまったと感じたのは、そこら辺に原因があったように思われます。

筑波大学で思い出すのは、池の前にある低層で茶色の建物の大部屋が研究室であったことです。安仁屋さんと机を並べ、いろいろ英語を教えていただきました。安仁屋さんはアメリカ帰りで、昼休みになるとアメリカン・フットボールを持ち出し、練習をやらうと誘われました。ボールは長軸を中心にぐるぐると回転するように投げなければだめだとおっしゃり、そんなボールを投げてるのとれるわけがありません。サッカーもやりました。宮坂君などのサッカーチームに加えてもらい、短パン、靴、ストッキングを揃えて買ったのを覚えております。サッカー王国埼玉県の浦和出身で子供の頃からサッカーをやってきたので、どうにかついていけたのですが、スライディングの練習には足が痛くなり泣きました。

仕事のことで思い出に残るのは、この『人文地理学研究』の創刊号に関わったことです。印刷所を3社、夜の6時頃呼んで入札を行い、イセブという印刷所が落札したのをよく覚えております。最初の2、3号は私が編集のお手伝いをしていたので、この雑誌にはいまでも愛着があります。高野先生、奥野先生、高山先生を荒川沖に車で送りに行ったのも、当時は重要な仕事でした。

筑波大学周辺で記憶に残るのは、まず、筑波山の夜景が美しかったことです。学園都市北部の、おそらく国土地理院の北側付近から冬の夜に眺める筑波山は、ホテルや旅館の明かりが宝石をちりばめたように点在し、すばらしい眺めでした。また、食事でも楽しい思い出があります。一つは、土浦市の中心部にあるおそば屋さんで、天ぷらそばは絶品でした。さらに、場所は定かではありませんが、田圃の中にぽつんとあるようなお店で、大きなエビフライを食べさせてくれるところです。

授業のことはあまり記憶にないのですが、先日日本地理学会の会議で隣に座った若い方から先生と呼ばれびっくりしました。お聞きしましたところ、私が最後の1年だけ担任をしたときに新入生だったそうで、月日の経つのが早いのを実感しました。母校を離れて思うことは、私が今日あるのも先輩

や後輩によって直接、間接的に支えられているからこそであるということです。最後に、人文地理学・地誌学分野が末永く発展していくことを祈願いたします。

筑波時代の思い出

小林 浩二

行く先々に常に工事現場があり、ダンプやブルドーザーが行き交っていたこと、雨が降るとあちこちにぬかるみができ、それを避けるためにぬように歩かざるをえなかったこと、冬の晴れた日には冷え込みが厳しく、早朝大学に通うのがつらかったこと……筑波時代を思い出すとまず浮かんでくるのがこうした光景やことがらだろうか。

私は、1975（昭和50）年8月から1977（昭和52）年3月までの1年半にわたって筑波大学に文部技官として勤務させていただいた。そんなわけで、私が所属していた地球科学系の組織自体も暗中模索の状態だった。そんななかで、私自身ドイツの留学を終えて帰国早々のしかも初めての職場、レールを敷きながらの大学づくり、そのなかでの慣れない仕事……喜怒哀楽こもごも、私は実にさまざまな経験をした。筑波時代の1年半は、今でも私にとってきわめて鮮烈な印象として残っている。

その中で特に印象深い二つをあげてみよう。ひとつは、いろいろな先生と知り合いになれたこと、しかも親しく付き合っていたことだ。これは、地球科学系に地理の先生だけでなく地学の先生もいらっしやっただけだ。また、当時は東京教育大学と掛け持ちをされている先生が多く、筑波に単身赴任でこられる先生が多かったこと、それゆえに先生に比較的時間の余裕があったことによるものだったのだろう。先生方は、暇をみては私たちを食堂やレストランに誘ってくださったし、自宅へも招待してくださった。また、「巡検」と称してあちこちへつれていってくださった。巡検で訪れた四季折々の北関東の光景や情景は今でも忘れられない。大洗で食べたアンコウ鍋の味、鬼怒川のT教授の別荘宅に数人の仲間と押しかけ、夜遅くまで歌った数々の歌、これらの情景はメルヘンのように、またなつかしい昔の写真をみるように今でも私の脳裏に焼きついてはなれない。

もう一つは、私自身、比較的ゴージャスな生活を享受していたのではないかということだ。当時私は独身で、外食が日課となっていた。確かに当時は近くに食堂やレストランがまったくといっていいほどなく、車を10分走らせなければ食事にありつけなかった。雨が降ろうものならちょっと歩くだけで水たまりにはまり泥だらけ。逆に晴天が続くと工事現場から舞い上がるほこりで身体中ほこりだらけ。決して快適な居住環境ではなかった。だが、建設工事がおこなわれていたとはいえ、筑波には緑が多かった。住宅にも恵まれていた。また、住宅から大学までは車で15分の道のり。先生方、同僚・後輩の人たちと頻繁に議論ができたし、巡検に行くこともできた。音楽会、演劇などの催し物も比較的頻繁に開かれていた。……今思い返してみると、私自身かなりの「生活の質」を享受していたのではなかろうか。それなりに充実した生活を送っていたように思う。

ちょうど1年前、ひさしぶりに筑波大学を訪れる機会に恵まれた。筑波の先輩や後輩が非常勤講師として私を呼んでくれたのだ。当時の筑波での生活からすでに20年余り。新たに建物や道路が建設されており、その周りには民家も増えていた。とりわけ、大学構内の木々が大きく成長しているのが20

年の歳月の経過を物語っていた。しかし、私がいた建物やその前の池は当時とまったく変わっていない。懐かしさのあまり思わずその周辺を歩き始めたのだが、歩いている間に当時の思い出がつつぎに浮かんでは消え、消えてはまた浮かんでいった。最初の予定を大きく超えて30分もぶらぶらしていただろうか。学ぶことが多かった、それなりに充実した生活を送ることのできた筑波時代を改めて思い起こしていた。

筑波大学と地理学と私

町田 親久

(1) 初めての筑波

1977（昭和52）年4月1日、私はバググ一つを持ち筑波の地へやって来ました。彼方に筑波山が望まれ、筑波大学はまだ建築途上の建物が多くあり、これからこの地での生活が始まるのだという新しい気持ちと、宿舎も決まっておらず不安な思いが入り混じった複雑な気持ちであったことを思い出します。そのうちに生活・職場にも慣れていきました。

私が地球科学系へ配属されて、学生時代の教科書や専門書等へ執筆されている山本正三先生、高橋伸夫先生をはじめ有名な先生方に直接お会いし、いっしょに仕事をさせていただくことに、夢のような気持ちであったことを今でも鮮やかに記憶しています。

しかし、先生方は、やさしさと厳しさを持っておられ、これが研究・教育の現実なのかと改めて認識しました。

(2) 大学の印象

「新構想の大学」という理念で設置されたことに興味がありました。研究学園都市の中核として位置づけられ、今までの組織とは異なった「学群・学系・事務区」という新しい名称、また、国際色豊かな研究者・留学生が多く、広い領域での研究・教育の両面にわたって広く交流関係を深めて、国内的・国際的に開かれた大学であることを強く感じました。

施設を見ると、敷地の広さと公園を基調とした景観の中に、それぞれの施設が歩行者専用道路と環状道路などで機能的に結ばれており、これからも「新構想の大学」であることを実感しました。

(3) 地球科学系での出会いと地理学

地球科学系では、人文地理学・地誌学分野の先生方のお手伝いをさせていただきました。印象に残っているのは、研究学園都市における土地利用図の作成です。現地調査をし、図面に転記していき、少しずつ完成させていきました。先生方の細かな積み重ねが一つの図面として完成していく過程を経験させていただき、小さな結果であっても、それを見い出すまでには、数多くの努力の成果であることを痛感しました。

先生方の研究に対する取り組み方は、想像以上に厳しいものであることを改めて知りました。それゆえ、私に依頼又は与えられたあらゆる事項に対して、生半可な気持ちで仕事をしてはいけないと感

じましたし、これが社会人としての心構えであることを学びました。

しかし、その厳しさの反面、私に気づかっただくやさしい先生方の顔がありました。当時、まだ独り身でしたので、食事に招待して家庭の温かさを提供されたり、テニス・卓球など一緒にスポーツを楽しみ、私生活においても色々と相談にのっていただいたりと、非常にうれしく、感謝しています。

地球科学系にお世話になっている間、多くの先生方・人々との出会いがありました。フィリピンからの留学生と親しくなったり、他大学及び諸外国の地理学の先生とお会いでき、また、自分自身学生時代には経験できないこと、つまり教育者側からの経験（地理学の奥深さを勉強）ができたことに喜びを感じています。

（４）私のその後と思い

私は学生時代に地理学を専攻しましたが、実は、行政事務官として公務員となり、筑波大学地球科学系へ配属となりました。教育職・技術職ではなく、文部事務官としての身分でしたが、やはり地理学は私にとって最も好きな分野です。

地球科学系には２年間という短い期間お世話になりました。その後、筑波大学事務局、岡山大学、そして現在、広島大学で文部事務官として、先生方を事務側からの協力者としてご奉仕させていただいています。

学生時代学んだ地理学、筑波大学で学んだ人文地理学と現在の職務は関連がないように思われるでしょうが、私はそうは思ってはいません。人と物との流れ・考え方を広い意味で考えますと、人文地理学というのは懐の深い学問であると思います。現在の広島大学も筑波大学と同様に医学部を除き統合移転がありました。また、広島大学医学部も附属病院の再開発が計画され、それに事務機構の改革と、人文地理学の応用が大いに生かされる場であると同時に、今後も地理学は学び続けようと考えています。

（５）お祝いと感謝

今回、筑波大学開学25周年のお祝いと、筑波大学地球科学系人文地理学・地誌学分野25年間の研究・教育活動の記録「四半世紀」の中に、私の執筆文を掲載させていただくことに感謝いたしますと同時に、筑波大学地球科学系人文地理学・地誌学分野の今後一層の発展をお祈りいたします。

Ⅱ 人文地理学・地誌学分野の記録

Ⅱ－1 専任教職員の年表

1. 地球科学系

年度	地球科学系 人文地理学分野	同 地誌学分野	同 技官・事務官
1974	教 授：尾留川 講 師：高橋	——	石井
1975	教 授：山本 講 師：高橋・石井	教 授：正井 助教授：佐々木	赤羽・小林
1976	教 授：山本 講 師：高橋・石井	教 授：正井 助教授：奥野・佐々木 助 手：高阪	赤羽・小林
1977	教 授：山本 講 師：高橋・石井 助 手：田林	教 授：高野・正井 助教授：奥野・佐々木 講 師：高阪	町田・宮坂・藤井
1978	教 授：山本 助教授：高橋 講 師：石井 助 手：田林	教 授：高野・正井 助教授：奥野・佐々木 講 師：高阪	町田・宮坂・藤井
1979	教 授：山本 助教授：高橋 講 師：石井 助 手：田林	教 授：高野・正井 助教授：奥野・佐々木 講 師：高阪	宮坂・藤井・手塚
1980	教 授：山本 助教授：高橋 講 師：石井 助 手：田林	教 授：正井・奥野 助教授：佐々木 講 師：高阪	宮坂・手塚・市南
1981	教 授：山本 助教授：高橋 講 師：石井・田林	教 授：正井・奥野 助教授：佐々木・斎藤	宮坂・手塚・市南
1982	教 授：山本 助教授：高橋・石井 講 師：田林	教 授：正井・奥野 助教授：佐々木・斎藤 講 師：手塚	宮坂・山下（清）・浅見
1983	教 授：山本 助教授：高橋・石井 講 師：田林・矢ヶ崎	教 授：正井・奥野 助教授：佐々木・斎藤 講 師：手塚	宮坂・浅見・村山
1984	教 授：山本 助教授：高橋・石井 講 師：田林・矢ヶ崎	教 授：奥野・佐々木 助教授：斎藤 講 師：手塚	宮坂・村山・尾藤
1985	教 授：山本 助教授：高橋・石井 講 師：田林・矢ヶ崎	教 授：奥野・佐々木 助教授：斎藤 講 師：手塚	宮坂・尾藤・加賀美

1986	教 授：山本 助教授：高橋・石井 講 師：田林・矢ヶ崎	教 授：奥野・佐々木 助教授：斎藤 講 師：手塚	宮坂・尾藤・井田
1987	教 授：山本 助教授：高橋・石井 講 師：田林・中川	教 授：奥野・佐々木 助教授：斎藤 講 師：手塚	宮坂・井田
1988	教 授：山本 助教授：高橋・田林 講 師：村山・小野寺・中川	教 授：奥野・佐々木 助教授：斎藤 講 師：手塚	宮坂・井田・山下（宗）
1989	教 授：山本・高橋 助教授：田林 講 師：村山・小野寺・中川	教 授：奥野・佐々木 助教授：斎藤 講 師：手塚	宮坂・山下（宗）・山本（充）
1990	教 授：山本・高橋 助教授：田林 講 師：村山・小野寺・中川	教 授：奥野・佐々木 助教授：斎藤 講 師：手塚	宮坂・井上・篠原（秀）
1991	教 授：高橋 助教授：田林 講 師：村山・小野寺・中川	教 授：奥野・佐々木 助教授：斎藤 講 師：手塚	宮坂・篠原（秀）・酒井
1992	教 授：高橋 助教授：田林 講 師：村山・小野寺・中川	教 授：奥野・佐々木・斎藤 講 師：手塚	宮坂・篠原（秀）・須山
1993	教 授：高橋 助教授：田林 講 師：村山・小野寺・中川 助 手：篠原（秀）	教 授：奥野・佐々木・斎藤 講 師：手塚	宮坂・須山・松村
1994	教 授：高橋 助教授：田林 講 師：村山・小野寺・中川 助 手：篠原（秀）	教 授：奥野・佐々木・斎藤 講 師：手塚	宮坂・須山・森本
1995	教 授：高橋 助教授：田林 講 師：村山・中川・篠原（秀）	教 授：奥野・佐々木・斎藤 助教授：手塚 講 師：須山	宮坂・森本
1996	教 授：高橋・田林 講 師：村山・篠原（秀）・森本	教 授：佐々木・斎藤 助教授：手塚 講 師：須山	宮坂・若本・林
1997	教 授：高橋・田林 講 師：村山・森本	教 授：佐々木・斎藤 助教授：手塚 講 師：須山	宮坂・濱里・松井
1998	教 授：高橋・田林 講 師：村山・森本・松井	教 授：斎藤・手塚	宮坂・濱里・川瀬

2. 歴史・人類学系および教育学系

年度	歴史人類学系 歴史地理学分野	歴史人類学系 その他の分野	教育学系 地理教育分野
1974	——	教 授：千葉（民俗学）	——
1975	——	教 授：千葉	——
1976	教 授：菊地	教 授：千葉	——
1977	教 授：菊地	教 授：千葉	——

1978	教 授：菊地	教 授：千葉・ 川喜田（文化人類学）	教 授：朝倉
1979	教 授：菊地 助教授：黒崎	教 授：千葉・川喜田	教 授：朝倉
1980	助教授：黒崎	教 授：川喜田	教 授：朝倉
1981	助教授：黒崎	教 授：川喜田	教 授：朝倉
1982	助教授：黒崎	教 授：川喜田	教 授：朝倉
1983	教 授：黒崎	――	教 授：朝倉
1984	教 授：黒崎	――	教 授：朝倉
1985	教 授：黒崎	――	――
1986	教 授：黒崎 技 官：小野寺	――	――
1987	助教授：石井 技 官：小野寺	――	――
1988	助教授：石井	――	教 授：篠原（昭）
1989	助教授：石井 技 官：椿	――	教 授：篠原（昭）
1990	助教授：石井 技 官：椿・河野	――	教 授：篠原（昭）
1991	助教授：石井 技 官：河野	――	教 授：篠原（昭）
1992	教 授：石井 技 官：河野・岡村	――	教 授：篠原（昭）
1993	教 授：石井 助教授：小口 助 手：河野 技 官：岡村	――	教 授：篠原（昭）
1994	教 授：石井 助教授：小口 技 官：岡村	――	――
1995	教 授：石井 助教授：小口 講 師：岡村 技 官：原田	――	講 師：井田
1996	教 授：石井 助教授：小口 講 師：岡村 技 官：田中	――	講 師：井田
1997	教 授：石井 助教授：小口 講 師：岡村 技 官：田中	――	講 師：井田
1998	教 授：石井 助教授：小口	――	講 師：井田

3. 専任教職員氏名および在任期間リスト（あいうえお順）

赤羽 孝之（1975～76年度）	朝倉隆太郎（1978～84年度）	浅見 良露（1982～83年度）
石井 英也（1974年度～）	井田 仁康（1986～88年度および1995年度～）	
市南 文一（1980～81年度）	井上 孝（1990年度）	岡村 治（1992～97年度）

小口 千明 (1993年度～)	奥野 隆史 (1976～95年度)	小野寺 淳 (1986～94年度)
加賀美雅弘 (1985年度)	川喜田二郎 (1978～82年度)	川瀬 正樹 (1998年度～)
菊地 利夫 (1976～79年度)	黒崎 千晴 (1979～86年度)	高阪 宏行 (1976～80年度)
河野 敬一 (1990～93年度)	小林 浩二 (1975～76年度)	斎藤 功 (1981年度～)
佐々木 博 (1975～97年度)	篠原 秀一 (1990～96年度)	篠原 昭雄 (1988～93年度)
須山 聡 (1992～97年度)	高野 史男 (1977～79年度)	高橋 伸夫 (1974年度～)
田中 達也 (1996～97年度)	田林 明 (1977年度～)	千葉 徳爾 (1974～79年度)
椿 真智子 (1989～90年度)	手塚 章 (1979年度～)	中川 正 (1987～95年度)
濱里 正史 (1997年度～)	原田洋一郎 (1995年度)	林 秀司 (1996年度)
尾藤 章雄 (1984～86年度)	尾留川正平 (1974年度)	藤井 公子 (1977～79年度)
正井 泰夫 (1975～83年度)	町田 親久 (1977～78年度)	松井 圭介 (1997年度～)
松村 公明 (1993年度)	宮坂 和人 (1977年度～)	
村山 祐司 (1983～84年度および1988年度～)		森本 健弘 (1994年度～)
矢ヶ崎典隆 (1983～86年度)	山下 清海 (1982年度)	山下 宗利 (1988～89年度)
山本 正三 (1975～90年度)	山本 充 (1989年度)	若本 啓子 (1996年度)
		酒井多加志 (1991年度)

Ⅱ－２ 招へい外国人教師・研究者

1974年10月～11月	フィリップ・パンシュメル (パリ第一大学教授)
	日本学術振興会・外国人招へい研究者
1980年 9月～1982年 6月	ロイ・ケンファー (シンガポール大学教授)
	筑波大学・外国人教師
1982年 4月～5月	ジャン・ゴットマン (オックスフォード大学教授)
	日本学術振興会・外国人招へい研究者
1984年 9月～1985年 6月	マリオ・ヒラオカ (ミラスビル大学教授)
	筑波大学・外国人教師
1985年 7月～8月	エチエンヌ・ダルマツソ (パリ第七大学教授)
	日本学術振興会・外国人招へい研究者
1988年12月～1989年 1月	ジャン＝ロベール・ピット (パリ・ソルボンヌ大学教授)
	日本学術振興会・外国人招へい研究者
1990年 9月～1991年 6月	南 榮佑 (高麗大学教授)
	筑波大学・外国人教師
1993年 9月～1994年 6月	厳 勝雄 (台湾行政院)
	筑波大学・外国人教師
1997年 9月～1998年 6月	洪 顯哲 (建国大学教授)
	筑波大学・外国人研究者
1999年 2月 7日～28日	ポール・クラヴァル (パリ・ソルボンヌ大学名誉教授)
	筑波大学国際交流計画事業・外国人研究者

Ⅱ－３ 非常勤教員の年表

年度		
1976	地球科学研究科	：角本 良平 (運輸経済研究センター)「人文地理学特講」 清水馨八郎 (千葉大学)「人文地理学特殊講義Ⅰ」 西岡 久雄 (青山学院大学)「人文地理学特殊講義Ⅱ」
	自然学類	：太田 勇 (東洋大学)「地誌学Ⅳ」
	比較文化学類	：黒崎 千晴 (早稲田学院)「歴史地理学」 斎藤 功 (お茶の水女子大学)「自然と歴史」
1977	地球科学研究科	：西川 治 (東京大学)「人文地理学特殊講義Ⅰ」

- 佐藤 甚次郎 (日本女子大学) 「人文地理学特論Ⅱ」
 斎藤 功 (お茶の水女子大学) 「人文地理学特論Ⅱ」
 有末 武夫 (群馬大学) 「人文地理学特論Ⅱ」
 歴史・人類学研究科 : 黒崎 千晴 (早稲田学院) 「歴史地理学特講Ⅰ」
 自然学類 : 菅野 峰明 (埼玉大学) 「立地論」「地理学史方法論」
 比較文化学類 : 菅野 峰明 (埼玉大学) 「人文地理学」「アメリカの習俗と地誌演習」
 人文学類 : 黒崎 千晴 (早稲田学院) 「歴史地理学特講Ⅰ」
 1978 地球科学研究科 : 鈴木 栄一 (青山学院大学) 「統計学」
 板倉 勝高 (東北大学) 「人文地理学特殊講義Ⅰ」
 市川 健夫 (東京学芸大学) 「人文地理学特殊講義Ⅱ」
 歴史・人類学研究科 : 黒崎 千晴 (早稲田学院) 「歴史地理学特講Ⅱ」
 比較文化学類 : 菅野 峰明 (埼玉大学) 「アメリカの習俗と地誌」
 黒崎 千晴 (早稲田学院) 「歴史地理学」
 人文学類 : 黒崎 千晴 (早稲田学院) 「日本歴史地理概説」「歴史地理学特講Ⅱ」
 1979 地球科学研究科 : 森川 洋 (広島大学) 「地誌学特殊講義」
 自然学類 : 金崎 肇 (茨城大学) 「人文地理学特論」
 比較文化学類 : 朝倉隆太郎 (宇都宮大学) 「人文地理学概説」
 太田 勇 (東洋大学) 「日本・アジアの習俗と地誌Ⅰ」
 1980 地球科学研究科 : 鈴木 栄一 (青山学院大学) 「統計学」
 伊藤 達雄 (三重大学) 「地誌学特殊講義Ⅲ」
 比較文化学類 : 黒崎 千晴 (早稲田学院) 「歴史地理学」
 斎藤 功 (お茶の水女子大学) 「アメリカの習俗と地誌」
 リー・チュンミン (ユタ大学) 「日本の地理」「日本・アジアの習俗と地誌Ⅰ」
 ロイ・ケンフー (シンガポール大学) 「日本・アジアの習俗と地誌Ⅱ」「日本・アジアの習俗と地誌Ⅱ演習」
 1981 地球科学研究科 : 合田 昭二 (岐阜大学) 「人文地理学特殊講義Ⅱ」
 自然学類 : 太田 勇 (東洋大学) 「地誌学特論」
 比較文化学類 : ロイ・ケンフー (シンガポール大学) 「アジアの地理と風土」「アジアの地理と風土演習」
 1982 地球科学研究科 : 服部銑二郎 (立正大学) 「地誌学特殊講義Ⅱ」
 自然学類 : 横山 昭市 (愛媛大学) 「地誌学特論」
 田村 正夫 (城西大学) 「人文地理学特論」
 比較文化学類 : ロイ・ケンフー (シンガポール大学) 「アジアの地理と風土」「アジアの地理と風土演習」
 1983 地球科学研究科 : 宮坂 正治 (信州大学) 「人文地理学特殊講義Ⅱ」
 自然学類 : 田村 正夫 (城西大学) 「地誌学特論」
 比較文化学類 : 元木 靖 (埼玉大学) 「地域文化概論」
 菅野 峰明 (埼玉大学) 「欧米の地理と風土Ⅰ」「欧米の地理と風土Ⅰ演習」
 1984 地球科学研究科 : 鈴木 栄一 (青山学院大学) 「統計学」
 菅野 峰明 (埼玉大学) 「地誌学特殊講義Ⅲ」
 自然学類 : 内山 幸久 (立正大学) 「人文地理学特論」
 比較文化学類 : マリオ・ヒラオカ (ミラスビル大学) 「地域文化概論」
 正井 泰夫 (立正大学) 「地域文化概論」
 1985 自然学類 : 内山 幸久 (立正大学) 「人文地理学概説Ⅰ」
 太田 勇 (東洋大学) 「人文地理学概説Ⅱ」
 山下 清海 (秋田大学) 「地誌学特論」
 比較文化学類 : 菅野 峰明 (埼玉大学) 「欧米の地理と風土Ⅰ」「欧米の地理と風土Ⅰ演習」
 元木 靖 (埼玉大学) 「地域文化概論」
 陳 国章 (台湾師範大学) 「アジアの政治と社会Ⅱ」

- マリオ・ヒラオカ（ミラスビル大学）「地域文化概論」
- 1986 地球科学研究科 : 鈴木 栄一（青山学院大学）「統計学Ⅲ」
 松井 貞雄（愛知教育大学）「地誌学特殊講義Ⅱ」
 自然学類 : 櫻井 明久（宇都宮大学）「人文地理学特論」
 比較文化学類 : 櫻井 明久（宇都宮大学）「欧米の地理と風土Ⅱ」
 元木 靖（埼玉大学）「地域文化概論」
- 1987 地球科学研究科 : 大友 篤（宇都宮大学）「人文地理学特殊講義Ⅲ」
 竹内 淳彦（日本工業大学）「地誌学特殊講義Ⅲ」
 歴史・人類学研究科 : 小林健太郎（滋賀大学）「歴史地理学特講Ⅲ」
 坂口 慶治（京都教育大学）「歴史地理学特講Ⅲ」
 自然学類 : 合田 昭二（岐阜大学）「地誌学特論」
 坂口 慶治（京都教育大学）「人文地理学特論」
 比較文化学類 : 菅野 峰明（埼玉大学）「欧米の地理と風土Ⅱ」「欧米の地理と風土Ⅱ 演習」
 元木 靖（埼玉大学）「地域文化概論」
 人文学類 : 菊地 一雅（早稲田大学）「アジア歴史地理学講義」
 田村 正夫（城西大学）「歴史地理学特講Ⅱ」
 中島 義一（駒澤大学）「歴史地理学特講Ⅱ」
- 1988 地球科学研究科 : 長谷川典夫（三重大学）「人文地理学特殊講義Ⅲ」
 自然学類 : 白坂 蕃（東京学芸大学）「人文地理学特論」
 比較文化学類 : 内藤 正典（一橋大学）「地域地理学Ⅱ（アジア）」
 山下 清海（秋田大学）「比較地理学」
 ラマサミ・スバイヤー（筑波大学）「地域地理学Ⅱ特論（南アジアの自然環境論）」
- 1989 地球科学研究科 : 伊藤 達雄（三重大学）「人文地理学特殊講義Ⅱ」
 歴史・人類学研究科 : 足利 健亮（京都大学）「歴史地理学特講Ⅳ」
 長野 寛（駒澤大学）「歴史地理学特講Ⅳ」
 自然学類 : 溝尾 良隆（立教大学）「応用地学Ⅳ」
 村上 雅康（奈良教育大学）「地誌学特論」
 比較文化学類 : 菅野 峰明（埼玉大学）「地域地理学Ⅳ（アメリカ）」「欧米の地理と風土Ⅱ 演習」
 ラマサミ・スバイヤー（筑波大学）「地域地理学Ⅱ特論（南アジアの自然環境論）」
 人文学類 : 溝口 常俊（富山大学）「アジア歴史地理学講義」
 山下 清海（秋田大学）「アジア歴史地理学講義」
- 1990 地球科学研究科 : 篠原 重則（香川大学）「地誌学特殊講義Ⅲ」
 自然学類 : 坂口 慶治（京都教育大学）「人文地理学特論」
 比較文化学類 : 内藤 正典（一橋大学）「地域地理学Ⅱ（アジア）」「アジアの地理と風土演習」
 南 榮佑（高麗大学）「地域地理学Ⅱ（アジア）」「アジアの地理と風土演習」
 立石 友男（日本大学）「地域地理学Ⅲ（ヨーロッパ）」
 小林 浩二（岐阜大学）「比較地理学」
 人文学類 : 山下 清海（秋田大学）「アジア歴史地理学講義」
- 1991 歴史・人類学研究科 : 金田 章裕（京都大学）「歴史地理学特講Ⅳ」
 自然学類 : 淡野 明彦（奈良教育大学）「地誌学特論」
 比較文化学類 : 矢ヶ崎典隆（横浜国立大学）「地域地理学Ⅳ（アメリカ）」「欧米の地理と風土Ⅱ 演習」
 人文学類 : 小口 千明（城西大学）「歴史地理学特講Ⅴ」
 溝口 常俊（富山大学）「歴史地理学特講Ⅴ」
- 1992 地球科学研究科 : 竹内 淳彦（日本工業大学）「人文地理学特殊講義Ⅲ」
 自然学類 : 溝尾 良隆（立教大学）「人文地理学特論」
 比較文化学類 : 山下 清海（秋田大学）「地域地理学Ⅱ（アジア）」
 季 増民（都市研究研究所）「地域地理学Ⅱ（アジア）」
 井田 仁康（上越教育大学）「地域地理学Ⅰ（日本）」
 人文学類 : 秋山 元秀（愛知県立大学）「アジア歴史地理学講義」

- 1993 地球科学研究科 : 杉浦 芳夫 (東京都立大学)「地誌学特殊講義Ⅱ」
 歴史・人類学研究科 : 立石 友男 (日本大学)「歴史地理学特講Ⅳ」
 自然学類 : 五味 武臣 (金沢大学)「地誌学特論」
 比較文化学類 : 大塚 昌利 (立正大学)「地域地理学Ⅰ (日本)」
 季 増民 (都市研究研究所)「文化地理学Ⅰ」
 矢ヶ崎典隆 (横浜国立大学)「地域地理学Ⅳ (アメリカ)」
 「欧米の地理と風土演習」
 人文学類 : 古田 悦造 (東京学芸大学)「歴史地理学特講Ⅴ」
- 1994 地球科学研究科 : 合田 昭二 (岐阜大学)「人文地理学特殊講義Ⅱ」
 比較文化学類 : 佐々木史郎 (宇都宮大学)「地域地理学Ⅱ (アジア)」
 「アジアの地理と風土演習」
 巖 勝雄 (台湾行政院)「地域地理学Ⅱ (アジア)」
 「アジアの地理と風土演習」
 人文学類 : 伊藤 寿和 (日本女子大学)「歴史地理学特講Ⅰ」
 秋山 元秀 (滋賀大学)「アジア歴史地理学講義」
 佐々木史郎 (宇都宮大学)「アジア歴史地理学講義」
- 1995 地球科学研究科 : 林 上 (名古屋大学)「人文地理学特殊講義Ⅲ」
 歴史・人類学研究科 : 溝口 常俊 (富山大学)「歴史地理学特講Ⅴ」
 自然学類 : 伊藤 悟 (金沢大学)「地誌学特論」
 比較文化学類 : 矢ヶ崎典隆 (横浜国立大学)「地域地理学Ⅳ (アメリカ)」
 「欧米の地理と風土演習」
 小野寺 淳 (茨城大学)「地域地理学Ⅰ (日本)」
 人文学類 : 矢ヶ崎典隆 (横浜国立大学)「欧米歴史地理学講義」
 山本 充 (埼玉大学)「欧米歴史地理学講義」
- 1996 地球科学研究科 : 高阪 宏行 (日本大学)「人文地理学研究法」
 大友 篤 (日本女子大学)「統計学Ⅲ」
 教育研究科 : 西脇 保幸 (横浜国立大学)「地理教育論」
 自然学類 : 櫻井 明久 (宇都宮大学)「地誌学Ⅱ」
 比較文化学類 : 季 増民 (椋山女学園大学)「比較文化地理学」
 佐々木史郎 (宇都宮大学)「地域地理学Ⅱ (アジア)」
 山本 充 (埼玉大学)「地域地理学Ⅲ (ヨーロッパ)」
 人文学類 : 秋山 元秀 (滋賀大学)「アジア歴史地理学講義」
 山下 清海 (秋田大学)「アジア歴史地理学講義」
- 1997 地球科学研究科 : 小林 浩二 (岐阜大学)「人文地理学特殊講義Ⅰ」
 歴史・人類学研究科 : 秋山 元秀 (滋賀大学)「歴史地理学特講Ⅴ」
 坂口 慶治 (京都教育大学)「歴史地理学特講Ⅴ」
 教育研究科 : 櫻井 明久 (宇都宮大学)「地理教育論」
 中山 修一 (広島大学)「中等社会科教育学特講」
 自然学類 : 許 衛東 (大阪外国語大学)「地誌学Ⅱ」
 山村 順次 (千葉大学)「人文地理学特論」
 根田 克彦 (奈良教育大学)「人文地理学Ⅰ」
 藤目 節夫 (愛媛大学)「人文地理学Ⅲ A」
 比較文化学類 : 大塚 昌利 (立正大学)「地域地理学Ⅰ (日本)」
 菅野 峰明 (埼玉大学)「地域地理学Ⅳ (アメリカ)」
 人文学類 : 矢ヶ崎典隆 (横浜国立大学)「歴史地理学特講Ⅴ」
 吉田 敏弘 (国学院大学)「歴史地理学Ⅴ」
- 1998 地球科学研究科 : 白坂 蕃 (立教大学)「地誌学特殊講義Ⅱ」
 教育研究科 : 渋谷 文隆 (信州大学)「地理教育論」
 自然学類 : 犬井 正 (獨協大学)「地誌学特論」
 菊地 俊夫 (東京都立大学)「人文地理学特論」
 許 衛東 (大阪外国語大学)「外国地誌」
 比較文化学類 : 山下 清海 (東洋大学)「地域地理学Ⅱ (アジア)」
 金田 章裕 (京都大学)「比較文化地理学」

- サイモン・ポッター（埼玉大学）「地域地理学Ⅲ（ヨーロッパ）」
 洪 顕哲（建国大学）「地域地理学Ⅱ（アジア）」
 人文学類：矢ヶ崎典隆（東京学芸大学）「欧米歴史地理学講義」
 山本 充（埼玉大学）「欧米歴史地理学講義」
 秋山 元秀（滋賀大学）「アジア歴史地理学講義」
 山下 清海（東洋大学）「アジア歴史地理学講義」

Ⅱ－４ 共同利用施設

1. 第一学群G棟304（人文地理学・地誌学実験室）
 自然学類における人文地理学・地誌学関係の学生実習室。人文地理学・地誌学における室内実験用のパソコン、磁気テープ、空中写真、地形図、土地利用図、製図用具などが保管されている。
2. 第一学群G棟305（人文地理学・地誌学実験準備室）
 人文地理学・地誌学における室内実験のための準備を行う。
3. 自然系学系B棟413（資料室）
 国勢調査、住宅統計、商業統計、農林業センサス等の各種統計、アトラス、人文地理学・地誌学関係の博士論文などが保管されている。
4. 自然系学系B棟515（システム解析室）
 地域分析のためのGIS機材が設置されており、ARC/INFO、ARC/View、Imagine、MapInfo等のGISソフトウェア、数値地図、空間データ基盤等のデジタル地図、各種統計データの利用が可能である。
5. 自然系学系B棟308-1（製図室）
 製図用具一式が備えられてある。人文地理学・地誌学関係のカルトグラファー、宮坂和人技官が製図を担当している。
6. 第2学群A棟405（文化地理実習室）
 比較文化学類における文化地理学関係の学生実習室。文化地理学における室内実験用のパソコン、空中写真、地形図、土地利用図、製図用具などが保管されている。地理情報システム（ARC/INFO）が備えられている。
7. 第2学群A棟406（文化地理準備室）
 文化地理学における室内実験のための準備を行う。

Ⅱ－５ 定期刊行物

1. 人文地理学研究 Tsukuba Studies in Human Geography

人文地理学研究は人文地理学分野と地誌学分野の機関誌として1977年3月に第1号が刊行され、1998年3月には22号に達した。東京教育大地理学教室報告が1977年3月に21号で終刊を迎えたものを、人文地理学関係者が引き継ぐかたちで出版された。そのため、当初は表紙の色や活字、装丁は地理学教室報告のものを基本的に踏襲した。その後11号と21号で表紙の色と装丁を変え今日に至っている。毎年1回3月25日に出版している。学会誌のように頁数の制限もなく、自由に研究成果を発表できる場として、日本の地理学界のなかでも一定の評価を得るようになっており、「人文地理」の年間の展望欄や文献目録には、必ず収録されている。第1号の巻頭には以下のよう

に発刊の主旨が述べられている。

「研究者にとって、その研究活動の成果を公表する機関誌を持つことはきわめて重要な意味をもっている。それは研究発表が研究活動そのものであるとともに、成果の公表によってそれぞれの研究活動の状況を世に周知させ、批判をうけることは研究者として一種の義務だからである。「発表なければ研究なし」、すなわち発表されない研究は研究されていないのと同じである、といいたいのである。

われわれはすでに幾つかの学会誌をもっているが、それはきわめて多数の学会員のためのものであり、これをわれわれが利用することにはかなりの制約がある。またわれわれは東京教育大学（東京文理科大学）地理学教室としては数十年にわたって「大塚地理学会論文集」・「地理」・「地理学研究報告」などの機関誌をもって、教室の研究活動の成果を世に問うてきた。今回その教室のすべてをあげて筑波大学地球科学系に移行するに当たり、その中に包含されるわれわれ人文地理学分野に属するものとして、従来と同じように、あるいはスタッフが増加

しただけ従来以上に、研究成果を公表する場が必要となってきた。

そこで各自のささやかな研究費の一部を割いてここにわれわれの機関誌として「人文地理学研究」を創刊することとした。われわれは学界の華やかな舞台の上で踊ろうなどとは思わない。むしろ地味に着実に、そして長く地理学界を支える土台石となろうとするのみである。」

人文地理学研究には1977年の第1号から1998年の第22号までに、合わせて213編の論文が掲載された。それらを長さ分野、対象地域別にまとめたのが第2表から第4表である。論文数が最も少ない号で4編、最も多い号で18編と差があるが、10編前後のものが平均である。1編の論文の長さも、10頁以下のものから40頁を超える長編まで様々であり、学会誌と違って頁制限や形式にこだわらず自由に書くことが可能なことを反映している。相対的に長い論文が多く、30頁以上のものだけで全体の20%近くに達する。

論文の分野は多岐にわたっているが、一つの特徴は農業・農村地理学に関する論文が多いということであり、集落の構造や変容に関するものも含めると71編を数え、全体の3分の1を占める。これに次ぐのが、都市・商業地理学関係のものである。さらに、観光・レクリエーションに関するものや、地理学史、文化地理学に関するもの、近年はGIS関係のものもみられるようになった。執筆者が主として専任の教職員であるので、どのような専門の者が在職していたかによって、論文の分野が大きく左右されている。

論文の対象地域については、一般に日本の論文は対象地域が狭いといわれるが、人文地理学研究の場合もその傾向がみられ、市町村もしくはそれよりも狭い範囲を取り扱ったものが全体の約30%ほどある。しかし、国家や地方レベルの範囲を取り扱った論文も、それぞれ24%と17%とかなり多い。対象地域としては日本国内が129、外国が61であり、地域を対象としていないものが28である。国内の論文では関東・中部地方を対象としたものが圧倒的に多く、近畿地方以西はわずか3編しかなく、そのすべてが九州を対象としている。外国研究は西ヨーロッパと南北アメリカを対象としたものが多く、前者は主としてフランスとドイツの研究であり、後者はアメリカ合衆国とカナダ、ブラジルを取り扱ったものが中心である。

2. 地域調査報告 Area Research Papers

地域調査報告は1979年3月に人文地理学分野によって「霞ヶ浦地域研究報告」という名称で発刊されたのが最初である。霞ヶ浦周辺地域において、大学院生の野外実験の一環として一週間程度の調査期間を単位として、教員と院生がいくつかの班を組織して共同で現地調査を実施し、執筆した。1983年からは地誌学分野が、大学院野外実験の研究報告作成に加わった。人文地理学分野は茨城県内の一つもしくは数市町村の都市域や工業地域・農村・漁村・山村など、具体的に観察できる比較的狭い範囲を対象として研究を進め、その成果を発表してきた。地誌学の分野では県庁所在地程度の規模の地方中心都市を選び、都市とその周辺の農山村での調査・研究を行い、おもに個人単位でその成果を発表している。これらの経緯については、1998年3月に発刊された地域調査報告20号の巻頭の「地域調査報告20号を迎えて」に詳しく述べられている。

1号から20号までに掲載された論文数と調査地域は第5表の通りである。全体の論文数は208編で、総頁数は3,198に達する。4号までは「霞ヶ浦地域研究報告」として人文地理学分野が執筆し、5号から7号までは両分野が共同で作成し、8号以下は交互に両分野が執筆してきた。個人研究の多い地誌学分野の論文数が多いが、一編が10頁前後であり、共同研究の多い人文地理学分野では論文数が少ないが、一編が20～40頁と長い。

3. Science Reports of the Institute of Geoscience, University of Tsukuba, Section A

筑波大学地球科学系で刊行している印刷物で、地理学・水文学関係の教官が主体になって執筆している。また、地球科学研究科に提出された博士論文が掲載されることも多い。1980年3月に第1巻が刊行され、この創刊の辞によると東京教育大学のScience Reports Sec. C（地理学、地質鉱物学）が1977年に終巻となったので、それに代わる印刷物として発刊するとされている。Section Aは人文地理学、地誌学、地形学、気候・気象学、水文学を対象とし、Section Bは地質学を対象としている。Section Aは毎年1巻ずつを刊行し、1998年1月で19巻になった。これまでに78の論文が発表されており、人文地理学・地誌学分野の論文は36を数え、全体の46%を占めている。外国の656機関、国内の248機関に送付している。

4. Annual Report of the Institute of Geoscience, University of Tsukuba

1975年1月に第1号が発刊されたが、内容は地球科学系の組織、教育活動、研究活動、出版物一覧といった純粋な業務報告であった。2号からは業務報告のほかに論文が加わり、むしろ論文が主体の印刷物となり今日に至っている。論文は刷り上がり4頁が基本とされ、Science Reportsと比較すると短いものが多い。このことも

第2表 「人文地理学研究」掲載論文数と長さ

号数 (年次)	総 頁	論文数	長 さ					備 考
			～10	11～20	21～30	31～40	40頁～	
1 (1977)	196	11	1	7	3	—	—	創刊号
2 (1978)	202	9	—	2	7	—	—	
3 (1979)	188	9	2	4	1	1	1	
4 (1980)	195	8	1	3	2	1	1	高野史男教授退官記念号
5 (1981)	237	10	2	4	1	2	1	
6 (1982)	283	10	—	2	4	2	2	
7 (1983)	271	13	2	2	8	1	—	
8 (1984)	293	10	1	1	4	3	1	
9 (1985)	275	11	—	3	6	2	—	
10 (1986)	294	8	—	2	3	2	1	第1号 (1977年)～第10号 (1986年) 総目次
11 (1987)	269	12	—	6	5	1	—	
12 (1988)	201	7	—	2	5	—	—	
13 (1989)	208	9	4	4	—	1	—	
14 (1990)	277	11	—	4	5	2	—	
15 (1991)	351	12	—	4	4	4	—	
16 (1992)	190	9	1	4	3	1	—	山本正三教授退官記念号
17 (1993)	187	7	—	4	1	1	1	
18 (1994)	273	12	—	5	5	2	—	
19 (1995)	238	8	—	3	3	2	—	奥野隆史教授退官記念号
20 (1996)	306	18	1	15	1	—	1	
21 (1997)	134	4	—	1	3	—	—	
22 (1998)	128	5	1	3	1	—	—	第11号 (1987年)～第20号 (1996年) 総目次
合 計	5,196	213	11	82	79	31	10	

第3表 「人文地理学研究」掲載論文の分野

号数 (年次)	土地 利用	農業 農村	水産	経済	工業	都市 商業	サービ ス 業	レクレ ション	交通 流通	人口	社会	文化 教育	歴史	地理 学史	理論 計量	地図 GIS	地域 計画
1 (1977)	2	4	—	—	—	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2 (1978)	—	3	1	2	1	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3 (1979)	—	1	—	—	1	4	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	1
4 (1980)	—	3	—	—	—	3	—	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—
5 (1981)	1	2	—	—	—	4	—	—	—	1	—	—	—	—	2	—	—
6 (1982)	—	5	—	—	—	2	1	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—
7 (1983)	—	5	—	2	—	1	1	—	—	1	—	1	—	—	1	1	—
8 (1984)	—	4	—	—	—	1	1	—	1	1	—	1	—	—	—	—	1
9 (1985)	1	6	—	—	—	1	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	1
10 (1986)	—	4	—	—	—	1	—	1	—	—	1	—	—	1	—	—	—
11 (1987)	1	5	—	—	—	—	—	1	1	—	1	1	—	2	—	—	—
12 (1988)	—	4	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—
13 (1989)	—	3	—	—	—	1	1	—	1	—	—	2	1	1	—	—	—
14 (1990)	—	4	—	—	—	2	—	—	—	1	—	1	1	1	—	—	—
15 (1991)	1	2	1	1	—	—	—	—	—	2	1	1	1	2	—	—	—
16 (1992)	1	1	—	—	—	—	1	2	1	—	—	2	1	—	—	—	—
17 (1993)	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	1
18 (1994)	—	3	1	—	—	3	—	—	—	—	—	1	1	1	—	1	—
19 (1995)	—	3	—	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—
20 (1996)	—	3	—	2	1	2	—	—	4	1	—	—	—	—	—	3	—
21 (1997)	—	1	—	—	—	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22 (1998)	—	2	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—
合 計	8	71	3	7	6	36	6	11	9	8	5	12	5	10	5	6	4

第4表 「人文地理学研究」掲載論文の対象地域

号数（年次）	地域 なし	地域のスケール					対 象 地 域								
		市町村 以 下	地域	府県	地方	国・ 大陸	日本 全体	北海道 東 北	関東	中部	近畿 以西	アジア	ヨ ー ロッパ	南北ア メリカ	その他
1（1977）	1	4	1	1	2	2	1	—	4	3	—	—	1	1	—
2（1978）	—	4	3	1	—	1	1	1	—	7	—	—	—	—	—
3（1979）	1	3	—	—	1	4	3	—	2	1	—	—	2	—	—
4（1980）	1	2	—	—	1	4	1	1	2	—	—	—	3	—	—
5（1981）	3	3	—	1	1	2	—	1	1	1	—	—	2	1	1
6（1982）	—	4	—	1	1	4	3	—	3	1	1	1	1	—	—
7（1983）	2	5	1	2	2	1	—	2	4	2	—	2	—	1	—
8（1984）	—	2	—	1	4	3	2	2	1	1	—	1	—	3	—
9（1985）	—	3	6	—	—	2	2	—	4	2	—	—	—	3	—
10（1986）	2	1	1	1	1	2	2	1	—	1	—	—	—	2	—
11（1987）	1	1	1	1	1	2	2	1	—	1	—	—	—	2	—
12（1988）	1	2	1	1	3	4	3	—	5	—	1	—	1	1	—
13（1989）	3	1	3	1	1	—	—	—	3	2	—	—	—	1	—
14（1990）	1	2	1	—	1	2	—	—	2	—	—	—	1	2	1
15（1991）	1	2	2	—	3	3	2	—	2	1	—	1	—	2	2
16（1992）	1	4	—	—	2	2	1	—	3	2	—	—	1	1	—
17（1993）	—	3	—	—	2	2	—	—	3	—	1	—	2	1	—
18（1994）	1	3	3	—	2	3	2	2	2	1	—	—	3	1	—
19（1995）	1	2	1	—	3	1	1	—	3	—	—	—	2	1	—
20（1997）	2	6	3	—	3	4	2	3	3	4	—	—	1	2	1
21（1996）	—	3	—	—	1	—	—	—	2	—	—	—	1	1	—
22（1998）	1	3	1	—	—	—	—	1	1	1	—	—	—	1	—
合 計	23	63	28	11	37	51	28	15	53	30	3	5	22	29	5

第5表 「地域調査報告」掲載論文数および調査地域

号数 (年次)	総 頁	論文数	担当分野**	調査地域
1 (1979)*	151	7	人文	茨城県玉造町・麻生町・北浦村
2 (1980)*	127	10	人文	茨城県出島村
3 (1981)*	120	7	人文	茨城県出島村
4 (1982)*	146	15	人文	茨城県出島村
5 (1983)	142	12	人文・地誌	茨城県東村, 新潟県新潟地域
6 (1984)	170	12	人文・地誌	茨城県鉾田町, 長野県松本盆地
7 (1985)	184	15	地誌・人文	長野県松本盆地, 茨城県鉾田町
8 (1986)	121	4	人文	茨城県神栖町・波崎町
9 (1987)	125	12	地誌	山形県山形盆地
10 (1988)	226	10	人文	茨城県波崎町
11 (1989)	178	15	地誌	岩手県盛岡地域
12 (1990)	276	8	人文	茨城県南西部 (水海道市ほか)
13 (1991)	203	15	地誌	新潟県新潟地域
14 (1992)	151	8	人文	茨城県つくば市
15 (1993)	152	16	地誌	長野県松本盆地
16 (1994)	127	5	人文	茨城県石岡市・八郷町
17 (1995)	132	12	地誌	長野県松本盆地
18 (1996)	126	6	人文	茨城県結城市
19 (1997)	127	14	地誌	福島県福島盆地
20 (1998)	214	5	人文	茨城県常陸太田市
合 計	3198	208		

*霞ヶ浦地域研究 **人文：人文地理学分野，地誌：地誌学分野

あって、人文地理学・地誌学関係の論文は相対的に少ない。1976年の第2号から1997年の第23号までに全体で376の論文が収録されたが、人文地理学・地誌学関係のものは43で、全体の11.4%を占めるにすぎない。しかし、Annual Report は外国の約1100の機関、国内の483の機関に送付され、それぞれの機関の雑誌と交換しており、論文に対する内外からの問い合わせも多い。1984年の10号と1994年の20号に、それぞれ10号ずつの総目次がまとめられている。

II-6 人文地理談話会

人文地理談話会は人文地理学・地誌学分野の教員と大学院生が中心となって運営している会で、原則として月1回、学内や学外の地理学者および地理学の隣接分野の研究者に講演や話題を提供をしてもらい、討論する場である。本学を訪れた海外の研究者を招待することもある。それぞれの演者が関心をもっている最新の研究動向や、内外の調査報告など内容は多彩である。学群学生、大学院生、教員、県内の中高校教員など30名前後が出席し、お茶と菓子をつまみながら気楽な雰囲気、学界の最先端の話題や情報を得ることができ、時には海外の著名な地理学者と歓談する機会でもある。

この会は東京教育大学の地理学教室の時代から続けられてきた。1954年10月頃に発刊されたと考えられる「人文地理学談話会報告 Vol.1 No.1」によると、1954年4月に東京教育大学の地理学専攻の学部学生と大学院生の有志が集まり、交代で外国論文を紹介することから継続的な会を始め、しだいに「人文地理学それ自体の根本的な事柄を問題とするようになっていった」とされている。印刷物は1号が発刊されたにすぎなかったが、人文地理談話会自体は継続された。3年後の1957年11月1日に新たに「人文地理談話会報第1号」が発刊された。ガリ版刷りの80ページの冊子には、論説と研究、論文抄録、文献目録、昭和32年度卒業論文題目一覧（人文地理関係）が掲載されている。そこに掲載された発刊のことばでは、以下のように述べられている。

「地理学は地域の科学である。それは世界的普遍的視野を要求する。我々は不断に目を海外の地理学の発展にむけなくてはならない。そして不断に世界的視野を養わなければならない。また、地理学は総合科学であるという。その性格はあらゆる関係科学に関する新智識を不可欠とする。しかし今日、広く文献を渉猟し、人文地理学各部門のみならず、関係諸科学にわたって新智識を吸収することは、容易なわざどころか不可能でさえある。それ故共同研究が不可避となるとともに、相互に智恵を、新智識を提出しあい、協同討議し、切磋琢磨しあうことこそ、今日の人文地理学を更に発展せしめる所以のものである。われら人文地理談話会はすでに兩三年来このような主旨のもとに討論をくりかえして来た。ときあたかも国際地理学会議は我々を叱咤してこの会の一層の活躍を要請した。今や更に広く同好の士を結集し、人文地理学の進歩に貢献すべく、その初めの試みとして、ここに会報を発刊することになった。大方の御鞭撻と御指導を請うものである。 山本 正三」

東京教育大学の人文地理学談話会報は1960年4月の6号まで続いた。2号には29人の会員が、6号には58人の会員が掲載されている。その後、印刷物を発刊することなく今日に至っている。会の趣旨は基本的には変わっていないが、しだいに勉強会というよりも講演会という性格が強くなって今日に至っている。学内者には掲示で連絡するほか、学外者約50人に葉書で会の案内をしている。

東京教育大学の人文地理談話会でも、しばしば一日巡検を企画していたが、筑波大学になってから、年度末に大学院地球科学研究科の3・4年生が中心となって、一日巡検を継続的に実施するようになった。第1回は1983年3月であり、当時の大学院生の上野健一氏と菊地俊夫氏が中心となって、企画したのが始まりである。大学のバスを借り、大学院生が一切の世話をし、関東地方各地を巡ることが、今日まで続けられている。毎回40人前後の参加者がある。

人文地理談話会発表題目（過去10年分）

- 1989年5月12日 古田 悦造（東京学芸大学）：近世近江国における魚肥流通と利用
- 1989年9月5日 ピーター・モイスブルガー（ドイツ、ハイデルベルク大学）：教育地理学の課題と焦点
- 1989年10月5日 レオ・バンデンベルク（オランダ、ワイナンド・スターリング・センター）：オランダ都市近郊における土地利用変動
- 1989年11月9日 菊地 俊夫（群馬大学）：ニュージーランド、オークランド都市圏における農業的土地利用の変化とその地域的性格
- 1989年12月21日 山下 宗利（筑波大学地球科学系）：世界都市東京白書

- 1990年1月25日 川口 洋 (筑波大学学術情報センター)：奥会津地域における人口再生産構造 (18-19世紀)
- 1990年2月22日 篠原 秀一 (筑波大学地球科学研究科)：日本の大量水揚漁港を訪ねる — 釧路・八戸・銚子・焼津・境港・長崎 —
- 1990年4月26日 高野 史男 (元筑波大学教授)：韓国済州島 — 地理の実験室 —
- 1990年5月8日 アラン・ジョーゼフ (カナダ, グウェルフ大学)：農村社会における高齢者の移住とサービス
- 1990年11月16日 市川 健夫 (東京学芸大学)：青潮文化とリマン海流文化
- 1991年4月23日 ジム・シモンズ (カナダ, トロント大学)：カナダの都市システム
- 1991年6月13日 伊藤田直史 (都立福生高等学校)：西多摩地域の石灰鉱業
- 1991年9月19日 河野 敬一 (筑波大学歴史・人類学系)：近代化期における中心地の変容 — 長野県東信地域を事例として —
- 1991年10月17日 森永 由紀 (筑波大学地球科学系)：ヒマラヤの自然と人々
- 1991年12月19日 田上 顕 (土浦第一高等学校)：今, 高校の地理教育は — 現状と課題 —
- 1992年1月16日 キャロル・プロローク (アメリカ合衆国, スリッパリー・ロック大学)：トリニダード島におけるヒンズー寺院とエスニック・アイデンティティ
- 1992年2月6日 長野 寛 (駒澤大学)：日本人の山岳聖域観による自然保護の地域的諸相
- 1992年4月22日 大関 泰宏 (福島工業高等専門学校)：都市国家シンガポールの国土と生活
- 1992年11月26日 根田 克彦 (奈良教育大学)：釧路市の商業構造
- 1992年12月17日 須山 聡 (筑波大学地球科学系)：輪島漆器業の生産空間
- 1993年2月18日 トーマス・ワルディチュック (カナダ, ヨーク大学大学院・筑波大学特別研究生) 都市近郊地域の景観に関するカナダと日本の比較研究
- 1993年5月6日 山下 潤 (筑波大学地球科学研究科・ルンド大学大学院)：スウェーデンの高齢者福祉施設
- 1993年6月3日 小口 千明 (筑波大学歴史・人類学系)：大和壳薬業地域における近代医学および洋薬への対応
- 1993年9月16日 中村 康子 (筑波大学地球科学研究科)：地理学研究における地理情報システム (GIS) の利用 — ARC/INFO を援用して —
- 1993年9月30日 伊藤 貴啓 (愛知教育大学)：工業的農業地域の形成 — 愛知県東三河平野の事例を中心に —
- 1993年11月30日 渋谷 鎮明 (神戸大学)：韓国における伝統的村落の変容
- 1994年4月28日 小野寺 淳 (筑波大学地球科学系)：伊勢参宮の文化地理学的研究 — 明石市東二見の伊勢講を中心に —
- 1994年5月15日 島崎 博文 (カナダ, レスブリッジ大学)：カナダの文化地理史 (A cultural/historical geography of Canada)
- 1994年10月6日 岡村 治 (筑波大学歴史・人類学系)：市庭 (いちば) の空間と機能 — 近世初頭の市町の形成について —
- 1994年11月1日 ジャン＝ロベール・ピット (フランス, パリ・ソルボンヌ大学)：世界都市としてのパリ
- 1994年12月15日 巖 勝雄 (台湾経済建設委員会)：台湾の都市
- 1995年2月9日 篠原 秀一・森本 健弘・須山 聡 (筑波大学地球科学系)：地理情報システム (GIS) のかたちとこれから
- 1995年5月18日 井田 仁康 (筑波大学教育学系)：ニュージーランドの観光旅客流動
- 1995年6月22日 ロバート・マッキノン (カナダ, カリブー大学)：カナダ東部の農業変化—危機か再生か
- 1995年9月14日 篠原 秀一 (筑波大学地球科学系)：日本における大量水揚漁港の地域的性格 — 銚子, 境港ほか —
- 1995年10月5日 村山 祐司 (筑波大学地球科学系)：スウェーデンではなぜ人文地理学が盛んか?
- 1995年12月1日 ジャン＝ロベール・ピット (フランス, パリ・ソルボンヌ大学)：世界都市パリはこれからどのように発展するか
- 1996年1月30日 キャロル・プロローク (アメリカ合衆国, スリッパリー・ロック大学)：聖なる場所はどのようにして生まれるのか
- 1996年4月26日 山本 充 (埼玉大学)：統一後旧東西ドイツ国境地域 — 国境の消滅とその影響 —
- 1996年5月17日 ジャック・ケリギー (日仏会館館長)：エジプトの図書館の歴史

- 1996年 6 月27日 石井 久生 (筑波大学現代語・現代文化学系)：ラテンアメリカの都市研究の最近の動向
- 1996年 9 月19日 田林 明 (筑波大学地球科学系)：稲作農村の持続的性格 ―黒部川扇状地古黒部地区の事例―
- 1996年10月31日 高橋 伸夫・手塚 章・村山 祐司 (筑波大学地球科学系)：パリ大都市圏は変わる
- 1996年11月21日 井田 仁康 (筑波大学教育学系)：これからの地理教育
- 1996年12月18日 浦部 浩之 (筑波大学国際政治経済研究科)：チリ・ペルー・ボリビア 3 国間相互依存関係の進化と国境地域の変貌
- 1997年 1 月30日 田中 達也 (筑波大学歴史・人類学系)：山間地域における家の展開と村落 ―上総国夷隅郡三条村を中心に―
- 1997年 2 月21日 菊地 俊夫 (東京都立大学)：北京大都市圏における土地利用変化のドライビングフォース
- 1997年 5 月 1日 村山 朝子 (茨城大学・非常勤)：地理の春 ―スウェーデンの高校と地理教育―
- 1997年 6 月 3日 ト部 勝彦 (日本大学・非常勤)：日本における緑化樹木の需給構造と樹木生産地域
- 1997年 9 月18日 八久保厚志 (日本工業大学・非常勤)：酒造業の地域的展開 ―本格焼酎を中心として―
- 1997年10月17日 山本 正三 (獨協大学)：ブラジル農村の変貌 ―アマゾンおよびブラジル中央部を中心として―
- 1997年11月20日 洪 顕哲 (韓国, 建国大学校; 筑波大学外国人研究者)：鬱陵島の自然環境と住民生活
- 1997年12月12日 山下 清海 (東洋大学)：世界のチャイナタウン
- 1998年 1 月29日 松井 圭介 (筑波大学地球科学系)：つくば市豊里地区における金村別雷神社信仰の展開
- 1998年 2 月23日 菊地 俊夫 (東京都立大学)：シドニー大都市圏における農業的土地利用の変化とその地域的性格
- 1998年 5 月 6日 内山 幸久 (立正大学)：チベットから上海まで ―長江流域の景観―
- 1998年 6 月19日 濱里 正史 (筑波大学地球科学系)：近接性に関する二, 三の考察
- 1998年 9 月11日 石崎 研二 (東京都立大学)：意思決定論の手法を用いた「地域構造」の把握の試み
- 1998年11月13日 ラリー・ボーン (カナダ, トロント大学)：移民と都市成長 ―カナダの事例―
- 1998年12月 2日 横張 真 (筑波大学社会工学系)：日本型の田園都市を考える
- 1999年 1 月21日 高木 彰彦 (茨城大学)：今, 政治地理学が新しい!
- 1999年 2 月10日 ポール・クラヴァル (フランス, パリ・ソルボンヌ大学名誉教授)：新しい文化地理学

人文地理談話会 1 日巡検

- 第 1 回 1983年 3 月 1 日「関東中郊部における産業と生活形態」
筑波大学→飯沼新田→野田 (キッコーマン醬油)→川口安行 (植木)→見沼通船堀→北川辺町→渡瀬遊水池→古河→筑波大学
- 第 2 回 1984年 3 月 6 日「東京東部の景観」
筑波大学→柴又帝釈天→矢切の渡し→江戸川区 (小松菜・花卉・金魚)→浦安市浦安六人河岸 (漁業・埋め立て)→船橋市→松戸市→筑波大学
- 第 3 回 1985年 3 月 8 日「陸前浜街道産業の旅 ―酒造りから原子力まで―」
筑波大学→石岡酒造→茨城県中央食肉公社→日本原子力研究所東海研究所→小平記念館→筑波大学
- 第 4 回 1986年 3 月 9 日「北関東産業の旅 ―利根川水系をめぐって―」
筑波大学→石下町→境町→渡良瀬川遊水池・北川辺町→栃木市→壬生町 (おもちゃの町)→真岡工業団地→二宮町 (いちご栽培)→筑波大学
- 第 5 回 1987年 3 月 9 日「千葉シーサイド巡検」
筑波大学→竜ヶ崎→印旛沼→四街道市 (鹿放ヶ丘開拓)→千葉市 (ポートタワー)→稲毛海浜公園→幕張メッセ予定地→船橋市→市川市 (観光農園)→柏市→筑波大学
- 第 6 回 1988年 3 月 8 日「常陸の水辺と丘を巡る」
筑波大学→神立工業団地→出島半島 (農業, 蓮根, 養鯉)→霞ヶ浦大橋→大洋村 (ミニ別荘)→大洗フェリーターミナル→那珂湊港→常陸太田 (西山荘)→筑波大学
- 第 7 回 1989年 3 月 7 日「東京湾ウォーターフロント巡検」
筑波大学→江戸川区 (都市農業)→葛西海浜公園→新木場→有明テニスの森→中央防波堤内埋立地→船の科学館→大井埠頭→NTT ビル→芝浦開発地域→汐留駅跡地→築地市場→月島・佃島→筑波大学

- 第8回 1990年3月5日「早春の栃木路をたずねて ―フズリナ・原人・ハイテクイチゴ―」
筑波大学→八千代町（露地野菜）→総和町（工業団地）→渡良瀬川遊水池→板倉町（施設園芸）→葛生町（葛生原人）→日鉄鉦業葛生工業所（ドロマイト鉦山）→西方町（イチゴ栽培）→栃木市（古い町並み）→結城市（結城紬）→筑波大学
- 第9回 1991年3月6日「きょうは埼玉にいきます」
筑波大学→草加八潮工業団地→安行（植木）→鳩ヶ谷市→川口市（鋳物，西川口の風俗産業，芝園団地）→浦和市→大宮市（都心，盆栽村）→岩槻市（人形）→岩井市（野菜産地）→筑波大学
- 第10回 1992年3月9日「利根川・水郷地域を巡る」
筑波大学→土浦港→潮来→東村（本新島干拓地）→佐原市（両総用水，伊能忠敬記念館）→神崎→木下→湖北団地→キリンビール取手工場→筑波大学
- 第11回 1993年3月9日「彩の国へようこそ」
筑波大学→東京外郭環状道路→和光市・朝霞市・新座市（緑との共存）→三富新田→所沢市（米軍返還後の新市街地）→武蔵野台地→狭山市（茶業）→扇屋町→入間基地→川越狭山工業団地→小江戸川越→筑波大学
- 第12回 1994年3月4日「下野の産業をめぐる」
筑波大学→二宮町（イチゴ栽培）→上三川町（日産自動車）→宇都宮市（大谷石，都市景観，工業団地）→御料牧場→宇都宮清原工業団地→益子町（益子焼）→筑波大学
- 第13回 1995年3月9日「いざ，両毛。」
筑波大学→鬼怒川・小貝川低地の開発→八千代・結城（農業景観）→足利市（足利学校，繊維工業）→大泉町（ブラジル人街）→サントリー利根川ビール工場→板倉町（雷電神社）→渡良瀬川遊水池→筑波大学
- 第14回 1996年3月14日「江戸川東岸地域をめぐる」
筑波大学→猿島台地→関宿城博物館→キノエネ醤油工場→利根運河→流山電鉄→松戸市（八柱霊園）→小金牧の開拓→柏市（住宅開発，駅前の商業，常磐新線，旧軍用地利用）→筑波大学
- 第15回 1997年3月6日「笠間・水戸，文化の薫り」
筑波大学→筑波山（つくばりんりんロード，観光）→真壁町（石材）→稲田石→笠間市（笠間稲荷，笠間焼）→友部町（菊栽培）→内原町（鯉淵学園）→茨城県庁新庁舎建設地→水戸市（水戸総合卸センター，天狗納豆総本家，水戸駅北口再開発，のだけはら団地）→筑波大学
- 第16回 1998年3月6日「動く千葉を巡る」
筑波大学→牛久市・河内町・新利根町（台地の開拓，城取清掃工場，国営農業水利事業）→東京国際空港→タウンライナー（千葉都市モノレール）→千葉港→美浜住宅団地→稲毛海浜公園→幕張副都心→浦安市（埋め立て）→筑波大学
- 第17回 1999年3月5日「輝く彩の国を巡る」
筑波大学→浦和市（見沼田圃）→鳩ヶ谷市→川口市（市街地再開発）→戸田市（流通センター）→JR 埼京線→大宮市（さいたま新都心）→岩槻市（人形工房）→春日部市→庄和町（水塚）→筑波大学

Ⅲ 人文地理学・地誌学分野の研究活動

Ⅲ－１ 専任教職員（関連分野を含む）の主要研究領域（1998年度現在）

			(主要な研究領域)
1. 地球科学系	高橋 伸夫 教授		日本とヨーロッパを中心とした都市地理学と金融の地理学
	斎藤 功 教授		農業地理学, ブラジルとグレートプレーンズを中心とした南北アメリカ地誌
	田林 明 教授		農業・農村地理学, カナダを中心とする北アメリカ地誌
	手塚 章 教授		フランスを中心とするヨーロッパ地誌, 農村地理学, 近代地理思想史
	村山 祐司 講師		計量・交通地理学, 都市システム論, GIS
	森本 健弘 講師		農村地理学, 土地利用
	松井 圭介 講師		日本を中心とする宗教地理学, 信仰圏の空間構造に関する研究
	宮坂 和人 技官		地図表現・製図技術を中心としたカルトグラフィー
	濱里 正史 技官		近接性研究, 生活環境研究, 医療地理学, 計量地理学
	川瀬 正樹 技官		通勤行動の性差に関する研究, 都市地理学, 行動地理学
2. 歴史・人類学系	石井 英也 教授		日本とヨーロッパ（とくにドイツ）の景観形成史を中心とした歴史地理
3. 教育学系	小口 千明 助教授		日本を中心とした近代歴史地理学, 相対的環境観の研究
	井田 仁康 講師		地理教育における目標論・外国人児童の対日イメージなど地理教育の実践的研究

Ⅲ－２ 現在の教職員の海外での調査研究歴

高橋 伸夫 (1980)	シンガポール・マレーシア・タイ・ビルマの都市調査 (私費)
高橋 伸夫 (1982)	サンパウロ・リオデジャネイロ大都市圏の研究. 筑波大学ラテンアメリカ特別プロジェクト研究
高橋 伸夫 (1983-1985)	メキシコ市の都市発展 ― 都市首位性拡大に関する学際的研究 ―. 科研費・海外学術調査
高橋 伸夫 (1986-1988)	ブラジル南東部の都市発展 ― 複合大都市圏の形成と都市首位性変動の諸要因に関する学際的研究 ―. 科研費・海外学術調査
高橋 伸夫 (1993-1995)	パリ大都市圏の構造変容に関する地理学的研究. 科研費・国際学術研究
高橋 伸夫 (1998-2000)	EU 統合下におけるフランスの空間動態. 科研費・国際学術研究
斎藤 功 (1984)	ブラジル北東部における土地利用の変遷と生態系の変化. 科研費・海外学術調査
斎藤 功 (1986)	ブラジル北東部半乾燥地域における土地利用の変遷と生態系の変化. 科研費・海外学術調査
斎藤 功 (1988-1990)	ブラジル北東部における土地利用・水利用の変遷と生態系の地域の変化. 科研費・国際学術研究
斎藤 功 (1993)	ハイプレーンズにおけるフィードロットの調査 (私費)
斎藤 功 (1995-1997)	ブラジル北東部における農牧的土地利用の強度と地生態系の地域の変化. 科研費・国際学術研究
斎藤 功 (1997-1999)	アメリカ大平原オガララ帯水層地域における灌漑化の進展と持続的環境利用. 科研費・国際学術研究
田林 明 (1979-1980)	五大湖・セントローレンス低地における農業・農村の地理学的分析. ロータリー財団 (研究助成)

- 田林 明 (1984) 西ヨーロッパの文化景観に関する調査 (私費)
- 田林 明 (1985) カナダの農業地域区分に関する研究. カナダ政府 (カナダ研究講座充実計画)
- 田林 明 (1988) カナダにおける農業の発展とタイポロジーに関する研究. 文部省在外研究
- 田林 明 (1994) カナダ・南オンタリオにおける農業の持続的性格. カナダ政府 (カナダ研究出版助成金)
- 田林 明 (1997) オーストラリアにおける持続的農業に関する研究. 科研費・基盤研究 (B) (2)
- 田林 明 (1998) ポルトガルにおける持続的農業に関する研究. 科研費・基盤研究 (C) (2)
- 手塚 章 (1984) 南ヨーロッパおよびモロッコの現地調査 (私費)
- 手塚 章 (1986) ドイツのボン大学において地理学思想史に関する文献調査 (私費)
- 手塚 章 (1993-1995) パリ大都市圏の構造変容に関する地理学的研究. 科研費・国際学術研究
- 手塚 章 (1998-2000) EU 統合下におけるフランスの空間動態. 科研費・国際学術研究
- 手塚 章 (1998) EU 共通農業政策下におけるラングドック地方 (フランス) のブドウ栽培農村の変化. 福武学術文化振興財団 (研究助成)
- 村山 祐司 (1988) 日韓両国における都市システムの比較研究. 科研費・海外学術研究
- 村山 祐司 (1990) カナダの国家的都市システムの形成に関する研究. カナダ政府 (カナダ研究講座充実計画)
- 村山 祐司 (1993-1995) パリ大都市圏の構造変容に関する地理学的研究. 科研費・国際学術研究
- 村山 祐司 (1994-1995) スウェーデンにおける人文地理学の展開. 日本学術振興会・スウェーデン王立科学アカデミー (研究派遣)
- 村山 祐司 (1995-1997) 多民族国家マレーシアの地方都市における「文化生態」に関する総合的研究. 科研費・国際学術研究
- 村山 祐司 (1998) トロントにおけるオフィスの郊外分散. 松下国際財団 (研究助成)
- 村山 祐司 (1998-2000) EU 統合下におけるフランスの空間動態. 科研費・国際学術研究
- 森本 健弘 (1996) オランダ・ヴェストラントにおける園芸農業 (私費)
- 森本 健弘 (1997) オーストラリア・ニューサウスウェールズ州における農村景観の調査. 科研費・一般研究 (B)
- 松井 圭介 (1998) ロシア共和国東部における民族と文化に関する調査 (私費)
- 濱里 正史 (1998) ロシア共和国東部における交通システムに関する調査 (私費)
- 石井 英也 (1983-1984) 西ドイツにおいて人文地理学の研究. A. v. フンボルト財団
- 小口 千明 (1993) 中華民国高雄市周辺における墓地風水の実態 (私費)
- 井田 仁康 (1993-1994) ニュージーランドにおける地理教育の発展過程の研究. 文部省在外研究
- 井田 仁康 (1996) カナダにおける地理教育の進展 (私費)

Ⅲ-3 文部省科学研究費とその他の研究助成金

1. 文部省科学研究費 (研究代表者に限る)

- 1975年, 山本 正三, 巨大都市化に伴う空間生態の変容に関する研究. 総合研究 (A)
- 1976-1977年, 高野 史男, 地方都市の成立および発展の地域的基盤に関する研究. 総合研究 (A)
- 1978年, 奥野 隆史, 中央日本における交通ネットワーク発達のインパクトに関する地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1978年, 田林 明, 日本における農業水利の空間構造. 奨励研究 (A)
- 1979年, 斎藤 功, イチゴ苗の山上げ栽培とイチゴの主産地形成. 一般研究 (C)
- 1980-1981年, 高橋 伸夫, 農山漁村における金融空間の分析に関する研究. 一般研究 (C)
- 1981年, 斎藤 功, ナメコとシイタケ日本における茸栽培の東西性と南北性. 一般研究 (C)
- 1981-1982年, 奥野 隆史, わが国における交通のイノベーションと地域経済の関係. 一般研究 (C)
- 1982年, 田林 明, 寒冷地における稲作技術の地域生態. 奨励研究 (A)
- 1982-1983年, 斎藤 功, 林野利用からみた地域農業構成体の変化. 一般研究 (B)
- 1983年, 手塚 章, 首都圏近郊外縁の蔬菜園芸産地における自立型農業経営の展開とその地域的性格. 奨励研究 (A)
- 1983-1984年, 山本 正三, 自立農業経営の地域類型の形成と農業地域の変化. 一般研究 (B)
- 1984年, 山本 正三, ブラジル北東部における土地利用の変遷と生態系の変化. 科研費・海外学術調査
- 1984年, 高橋 伸夫, わが国における財政金融の地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1984-1985年, 斎藤 功, わが国における山地牧場の展開と利用態様の変化. 一般研究 (C)

- 1985年, 奥野 隆史, 東日本におけるモータリゼーションに伴う地域変容に関する地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1985年, 手塚 章, 関東平野における自立型農家の存在形態に関する統計的分析. 奨励研究 (A)
- 1985-1986年, 佐々木 博, 里山林野のレクリエーション利用形態の研究. 一般研究 (C)
- 1985-1986年, 石井 英也, 関東地方の台地利用における陸田の意義. 一般研究 (C)
- 1986-1987年, 山本 正三, わが国における農村地域における非農業化現象に関する動態的研究. 一般研究 (B)
- 1986-1987年, 高橋 伸夫, わが国におけるコミュニケーション空間に関する地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1986-1987年, 斎藤 功, ブナ帯における山菜の促成栽培に関する風土論的研究. 一般研究 (C)
- 1987年, 村山 祐司, 日本における貨物流動パターンの変化に関する地理学的研究. 奨励研究 (A)
- 1987-1988年, 石井 英也, 関東東北部における限界地立地集落の発展の軌跡. 一般研究 (C)
- 1988年, 斎藤 功, 東京集乳圏 — その拡大・空間構造・諸相 —. 研究成果公開促進費 (出版)
- 1988-1989年, 奥野 隆史, わが国における交通システムと地域システムの関係に関する地理学的研究. 総合研究 (A)
- 1988-1989年, 斎藤 功, 花卉・野菜の山上げ栽培と主産地形成に関する生態地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1989年, 村山 祐司, 日本における人口移動の時空間システム. 奨励研究 (A)
- 1990年, 山本 正三, 日仏における山地環境の比較地理学的研究. 総合研究 (B)
- 1990年, 奥野 隆史, 交通と地域. 研究成果公開促進費 (出版)
- 1990年, 佐々木 博, 首都圏における緑地環境の変化とその影響. 重点領域研究
- 1990年, 田林 明, 扇状地農村の変容と地域構造. 研究成果公開促進費 (出版)
- 1990年, 村山 祐司, 交通流動の空間構造. 研究成果公開促進費 (出版)
- 1990-1991年, 斎藤 功, 野菜 F1品種の空間的拡散に関する計量的・地域生態論的研究. 一般研究 (C)
- 1990-1992年, 田林 明, 中部日本の扇状地における農業的土地利用の時間的・空間的変動に関する地理学的研究. 重点領域研究
- 1990-1992年, 田林 明, 商品作物栽培地域の形成における行動論的要因の地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1990-1992年, 石井 英也, 日本近代化の地域的展開に関する基礎的研究 — 歴史地図の作成に向けて. 総合研究 (A)
- 1991-1992年, 村山 祐司, 国際的都市群システムに関する地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1992年, 斎藤 功, CA 貯蔵の進展と果樹栽培地域の再編成 — カキ栽培を中心に —. 一般研究 (C)
- 1992-1993年, 奥野 隆史, 世界における地理学書誌に関する研究. 一般研究 (C)
- 1992-1993年, 高橋 伸夫, わが国における大都市圏の構造変容に関する地理学的研究. 総合研究 (A)
- 1992-1993年, 高橋 伸夫, 首都圏における財政金融の地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1992-1994年, 村山 祐司, 情報・交通アクセシビリティ向上に伴う行動空間の変容に関する地理学的研究. 重点領域研究
- 1993年, 石井 英也, 秩父地域における景観形成の諸特徴. 一般研究 (C)
- 1993-1994年, 斎藤 功, 小中学校の農繁休暇からみた中央日本の地域性. 一般研究 (B)
- 1993-1994年, 手塚 章, 戦前期日本における独仏地理学思想の受容に関する基礎研究. 一般研究 (C)
- 1993-1995年, 高橋 伸夫, パリ大都市圏の構造変容に関する地理学的研究. 科研費・国際学術研究
- 1993-1995年, 村山 祐司, 日本の都市群と米国の都市群との間の経済的相互依存の強化に関する地理学的研究. 一般研究 (C)
- 1993-1997年, 村山 祐司, 明治・大正期人口統計地図情報. 研究成果促進費 (データベース)
- 1994-1995年, 小口 千明, 日本近代化期における洋法医薬業普及の地域的展開. 一般研究 (C)
- 1994-1996年, 高橋 伸夫, わが国における技術革新に伴う空間組織の変容に関する地理学的研究. 一般研究 (B)
- 1994-1996年, 斎藤 功, 日本農業の耕作方式と再生産過程に関する農村システム論的研究. 総合研究 (A)
- 1994-1996年, 田林 明, 持続的農村の形成とその地域的条件に関する地理学的研究. 基盤研究 (C)
- 1995-1997年, 斎藤 功, ブラジル北東部における農牧的土地利用の強度と地生態系の地域的变化. 科研費・国際学術研究
- 1996-1997年, 斎藤 功, 軽種馬牧場の立地と持続的農業に関する地域論的研究. 基盤研究 (B) (2)
- 1996-1997年, 村山 祐司, アジアにおける国際的都市群システムの発展過程に関する地理学的研究. 基盤研究 (C) (2)
- 1997年, 高橋 伸夫, パリ大都市圏 — その構造変容. 研究成果公開促進費 (出版)

- 1997年, 村山 祐司, 地理情報システム (GIS) を活用した非集計データの時空間分析. 重点領域研究 (2)
- 1997-1998年, 小口 千明, 売薬需要の実態からみた明治期日本人の健康状態とその地域的特質. 基盤研究 (C) (2)
- 1997-2000年, 高橋 伸夫, わが国の金融機能による都市成長分析に関する地理学的研究. 基盤研究 (C) (2)
- 1997-1999年, 田林 明, 持続的農村システム形成における女性の役割に関する地理学的研究. 基盤研究 (C) (2)
- 1998年, 斎藤 功, ノルデステー ブラジル北東部の風土と土地利用一. 研究成果公開促進費 (出版)
- 1998-2000年, 高橋 伸夫, EU 統合下におけるフランスの空間動態. 科研費・国際学術研究
- 1998-2000年, 手塚 章, EU 共通農業政策の改革にともなうフランス農業変化の地域的側面. 基盤研究 (C) (2)

2. その他の研究助成金

- 1976年, 山本 正三, 日本における都市化の地図分析. トヨタ財団 (研究助成)
- 1979年, 高橋 伸夫, 日本における工業地域の変容. フランス・リール大学 (招待講演)
- 1985年, 斎藤 功, 東京集乳圏における酪農地域の空間構造の変化. 福武学術文化振興財団 (研究助成)
- 1987年, 高橋 伸夫, フランスの都市システム研究. 日仏会館
- 1987年, 高橋 伸夫, 日本の地域構造の変容. フランス・マルセイユ・エックス・ザン・プロバンス大学 (招待講演)
- 1987年, 村山 祐司, 日韓両国における都市システムの比較研究. 財団法人日本住宅センター (研究助成)
- 1988年, 山本 正三, 農村における非農業的機能. 福武学術文化振興財団 (研究集会)
- 1988年, 村山 祐司, アメリカ合衆国における交通ネットワークの拡大. アメリカ研究センター
- 1989年, 高橋 伸夫, 日本の都市化. ベルギー地理学会・日本国外務省 (招待講演)
- 1990年, 田林 明, 日本における灌漑システムの統合化に関する地理学的研究. 福武学術文化振興財団 (研究助成)
- 1991年, 高橋 伸夫, 生活空間の都市化過程に関する地理学的研究. 福武学術文化振興財団 (研究助成)
- 1992年, 村山 祐司, 北米における国際的都市システムの形成に関する研究. アメリカ SSRC・国際交流基金日米センター (Abe Fellowship Program)
- 1995年, 佐々木 博, 農村システムの持続性に関する筑波国際会議. 日本学術振興会他
- 1995年, 高橋 伸夫, パリと東京の大都市圏を考える ―人びとのより快適な住み方を求めて―. 日仏笹川財団
- 1995年, 村山 祐司, 東アジアにおけるメガシティ間の社会経済的相互依存の強化に関する地理学的研究. 福武学術文化振興財団 (学術奨励金)
- 1995年, 村山 祐司, 東アジアにおけるメガシティの国際的都市システムの形成に関する研究. ニッセイ基礎研究所 (研究助成)
- 1998年, 手塚 章, EU 共通農業政策下におけるラングドック地方 (フランス) のブドウ栽培農村の変化. 福武学術文化振興財団 (研究助成)
- 1998年, 村山 祐司, 大学の地理学教育における GIS の活用に関する研究. 東京地学協会 (研究・調査助成金)
- 1998年, 村山 祐司, 国際的都市システムの研究. 国際交流基金

Ⅲ-4 国際シンポジウムおよび学術大会の開催

- | | |
|-------------------|---|
| 1981年 4月3日～7日 | 日本地理学会春季学術大会 |
| 1988年10月3日～7日 | 第5回日仏地理学シンポジウム「農村の非農業化に関する日仏の比較地理学的研究」 |
| 1995年 3月29日～4月1日 | 日本地理学会春季学術大会 |
| 1995年 8月19日～26日 | Tsukuba International Conference on the Sustainability of Rural Systems |
| 1995年11月30日～12月4日 | 日仏シンポジウム「パリと東京の大都市圏を考える」 |

Ⅲ-5 主要著作物 (図書)

筑波大学地球科学系, 歴史・人類学系, 教育学系に在職あるいは在職していた人文地理学・地誌学関係の専任教職員の主要な著作物 (図書) を出版年代の古いものから列举した. 紙面の関係で最大で1人について10点を限度とした. 選択の際の優先順位は単著, 共著筆頭, 単編著, 共編著筆頭, それ以外とした. 複数の教職員が関係している場合は, 重複を避けるために筆頭者のところに掲載したが, 筆頭者の著作物が10点を超える場合には,

その他の著者のところに含めた。あいうえお順に配列した。

赤羽 孝之

1. 赤羽孝之・山本 茂編著 (1989):『現代社会の地理学』古今書院
2. 赤羽孝之・西山耕一 (1990):『地方工業の研究:新潟県上越地方を中心として』山越機工出版部
3. 赤羽孝之 (1997):『バテンレースと細幅織物』上越市史編さん委員会

朝倉隆太郎

1. 朝倉隆太郎・榊原康男・斑目文雄編著 (1967):『地理, その教育:指導の課題と成果』葵書房
2. 朝倉隆太郎編 (1972):『中学校指導要領の評価研究:社会科編, 1』明治図書出版
3. 朝倉隆太郎ほか編 (1972):『小学校社会科指導辞典』第一法規出版
4. 朝倉隆太郎編 (1974):『中学校社会科指導細案:地理的分野』明治図書出版
5. 朝倉隆太郎 (1975):『指導のための統計の理解』中教出版
6. 朝倉隆太郎 (1976):『社会科学習能力の発達と育成』明治図書出版
7. 朝倉隆太郎編 (1979):『新社会科指導法事典』明治図書出版
8. 朝倉隆太郎ほか編 (1975-79):『社会科教育学研究 No.1-No.4』明治図書出版
9. 朝倉隆太郎ほか編 (1985):『社会科学習能力の発達と育成』明治図書出版
10. 朝倉隆太郎編集代表編 (1991):『現代社会科教育実践講座 1-21』現代社会科教育実践講座刊行会

浅見 良露

1. 駄田井 正・鶴田善彦・浅見良露 (1999):『地域経済の視点-筑後川流域圏の経済社会と住民生活』九州大学出版会

石井 英也

1. J.ブルック・J.ウェッブ著, 山本正三・石井英也訳 (1987):『人文地理学』二宮書店
2. T.G.ジョーダン著, 山本正三・石井英也訳 (1989):『ヨーロッパ文化:その形成と空間構造』二宮書店
3. 石井英也 (1992):『地域変化とその構造:高度経済成長期の農山漁村』二宮書店
4. 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚 章編 (1997):『人文地理学辞典』朝倉書店

井田 仁康

1. 井田仁康 (1994):『航空旅客流動と空港後背地』大明堂
2. 井田仁康 (1996):『ラブリーニュージーランド:自然と人間の生活』二宮書店
3. 寺本 潔・井田仁康・田部俊充・戸井田克己 (1997):『地理の教え方』古今書院

井上 孝

1. 河邊 宏・広島清志・井上 孝ほか (1991):『発展途上国の人口移動』アジア経済研究所

奥野 隆史

1. B.J.L.ベリー著, 西岡久雄・鈴木安昭・奥野隆史訳 (1972):『小売業・サービス業の立地:市場センターと小売流通』大明堂
2. L.J.キング著, 奥野隆史・西岡久雄訳 (1974):『地域の統計的分析』大明堂
3. 石水照雄・奥野隆史編 (1974):『計量地理学』共立出版
4. 奥野隆史・高森 寛 (1976):『点と線の世界:ネットワーク分析』三共出版
5. 奥野隆史 (1977):『計量地理学の基礎』大明堂
6. E.J.テーフ・H.L.ゴージェ著, 奥野隆史訳 (1980):『地域交通論:その空間モデル』大明堂
7. 奥野隆史 (1985):『地理学関係文献目録総覧:自然・人文・社会 1880~1982』原書房
8. 奥野隆史 (1991):『交通と地域』大明堂
9. B.J.L.ベリーほか著, 奥野隆史・鈴木安昭・西岡久雄訳 (1992):『小売立地の理論と応用』大明堂
10. 奥野隆史編著 (1996):『都市と交通の空間分析』大明堂

小野寺 淳

1. 小野寺淳 (1991):『近世河川絵図の研究』古今書院

加賀美雅弘

1. 加賀美雅弘 (1991):『気象で読む身体』講談社
2. 加賀美雅弘 (1997):『ハプスブルク帝国を旅する』講談社

川喜田二郎

1. 川喜田二郎 (1967):『発想法：創造性開発のために』中央公論社
2. 川喜田二郎 (1968):『チームワーク：組織の中で自己を実現する』光文社
3. 川喜田二郎 (1970):『問題解決学：KJ 法ワークブック』講談社
4. 川喜田二郎 (1973):『野外科学の方法：思考と探検』中央公論社
5. 川喜田二郎 (1974):『可能性の探検：地球学の構想』講談社
6. 川喜田二郎 (1986):『KJ 法：混沌をして語らしめる』中央公論社
7. 川喜田二郎 (1987):『素朴と文明』講談社
8. 川喜田二郎 (1992):『鳥葬の国：秘境ヒマラヤ探検記』講談社
9. 川喜田二郎 (1993):『創造と伝統：人間の深奥と民主主義の根元を探る』祥伝社
10. 川喜田二郎 (1995-97):『川喜田二郎著作集 1－13』中央公論社

菊地 利夫

1. 菊地利夫 (1958):『新田開発上巻, 下巻』古今書院
2. 菊地利夫 (1960):『地理学習の原理と方法』金子書房
3. 菊地利夫 (1966):『新田開発』至文堂
4. 菊地利夫編 (1970):『講座 社会科地誌学習の改造 1－3』明治図書出版
5. 菊地利夫 (1976):『房総半島の地域診断』大明堂
6. 菊地利夫 (1976):『高校地理教育の原理と方法』古今書院
7. 菊地利夫 (1977):『歴史地理学方法論』大明堂
8. 菊地利夫 (1982):『房総半島』大明堂
9. 菊地利夫 (1984):『日本歴史地理学概説』古今書院
10. 菊地利夫 (1986):『続新田開発』古今書院

黒崎 千晴

1. 竹内常行・黒崎千晴 (1957):『新制人文地理』教育出版
2. 黒崎千晴・小口千明 (1991):『地図でみる県の移り変り』昭和礼文社

高阪 宏行

1. 高阪宏行 (1984):『地域経済分析：空間的効率性と平等性』高文堂出版社
2. 菅野峰明・安仁屋政武・高阪宏行 (1987):『地理学講座 2：地理情報の分析手法』古今書院
3. 高阪宏行 (1994):『行政とビジネスのための地理情報システム』古今書院
4. 高阪宏行・岡部篤行編 (1996):『GIS ソースブック：データ・ソフトウェア・応用事例』古今書院

小林 浩二

1. 小林浩二 (1986):『西ヨーロッパの自然と農業：農村景観を中心に』大明堂
2. 小林浩二 (1990):『変貌する西ドイツの都市と農村』古今書院
3. 小林浩二 (1992):『都市と農村の共存』大明堂
4. 小林浩二 (1992):『激動の統合ドイツ：都市と農村の変化と課題』古今書院
5. 小林浩二 (1993):『統合ドイツの光と陰』二宮書店
6. 小林浩二編著 (1996):『ドイツが変わる東欧が変わる』二宮書店
7. 小林浩二 (1998):『21世紀のドイツ：旧東ドイツの都市と農村の再生と発展』大明堂

斎藤 功

1. H. F. グレゴール著, 山本正三・朝野洋一・斎藤 功訳 (1973): 『農業地理学: その課題と展望』大明堂
2. 市川健夫・山本正三・斎藤 功編著 (1984): 『日本のブナ帯文化』朝倉書店
3. 市川健夫・斎藤 功 (1985): 『再考日本の森林文化』日本放送出版協会
4. W. A. ダンドー著, 山本正三・斎藤 功訳 (1985): 『地球を襲う飢饉: その歴史と将来展望』大明堂
5. 斎藤 功 (1989): 『東京集乳圏: その拡大・空間構造・諸相』古今書院
6. 斎藤 功・野上道男・三上岳彦編 (1990): 『環境と生態』古今書院
7. 斎藤 功・松本栄次・矢ヶ崎典隆編 (1999): 『ノルデステ: ブラジル北東部の風土と土地利用』大明堂

佐々木 博

1. L. D. スタンプ著, 佐々木 博訳 (1972): 『応用地理学』二宮書店
2. G. グラウエルトウ著, 佐々木 博・石井英也・桜井明久訳 (1980): 『アルプス: 自然と文化』二宮書店
3. 佐々木 博 (1977): 『現代のドイツ: 風土・民族・産業』二宮書店
4. W. デーケ著, 佐々木 博ほか訳 (1981): 『ルール工業地域』二宮書店
5. ベルント・アンドレ著, 佐々木 博訳 (1983): 『農業立地の展望: 立地ストレスにある農業地域』二宮書店
6. 佐々木 博 (1986): 『ヨーロッパの文化景観: 風土・農村・都市』二宮書店
7. 佐々木 博 (1995): 『EUの地理学』二宮書店
8. Sasaki, H., Saito, I., Tabayashi, A. and Morimoto, T. eds. (1996): *Geographical Perspectives on Sustainable Rural Systems - Proceedings of the Tsukuba International Conference on the Sustainability of Rural Systems -*. Kaisei Publication, Tokyo.
9. 佐々木 博 (1995): 『観光と地域』二宮書店

篠原 昭雄

1. 篠原昭雄編 (1983): 『社会科地理的分野の達成度評価』明治図書出版
2. 篠原昭雄 (1984): 『地理教育の本質と展開』明治図書出版
3. 町田 貞・篠原昭雄編 (1984): 『社会科地理教育講座 1 - 3』明治図書出版
4. 篠原昭雄 (1989): 『新旧学習指導要領の対比と考察, 中学校社会科』明治図書出版

高野 史男

1. 伊藤郷平・高野史男編 (1971): 『社会の発展と地理学』大明堂
2. 田辺健一・高野史男・二神 弘編著 (1977): 『都心再開発』古今書院
3. 高野史男・山本正三・正井泰夫編 (1978): 『日本の生活風土 I・II』朝倉書店
4. 高野史男・山本正三・正井泰夫・太田 勇・高橋伸夫編 (1979): 『世界の大都市上・下』大明堂
5. 高野史男編著 (1980): 『都市形成の地理的基盤』大明堂
6. 高野史男 (1995): 『済州島』中央公論社

高橋 伸夫

1. 高橋伸夫 (1981): 『フランスの都市』二宮書店
2. 高橋伸夫 (1983): 『金融の地域構造』大明堂
3. 中村和郎・高橋伸夫編 (1988): 『地理学講座 1: 地理学への招待』古今書院
4. 高橋伸夫・溝尾良隆編 (1989): 『地理学講座 6: 実践と応用』古今書院
5. 高橋伸夫編著 (1990): 『日本の生活空間』古今書院
6. 高橋伸夫・山下脩二・菅野峰明・手塚 章・山下清海著 (1993): 『世界地図を読む: 図説世界地理』大明堂
7. 高橋伸夫・谷内 達編 (1994): 『日本の三大都市圏』古今書院
8. 高橋伸夫・田林 明・小野寺淳・中川 正 (1996): 『文化地理学入門』東洋書林
9. 高橋伸夫・菅野峰明・村山祐司・伊藤 悟 (1997): 『新しい都市地理学』東洋書林
10. 高橋伸夫・手塚 章・ジャン＝ロベール・ピット編 (1998): 『パリ大都市圏: その構造変容』東洋書林

田林 明

1. E.アイザック著, 山本正三・田林 明・桜井明久訳 (1985):『栽培植物と家畜の起源』大明堂
2. 田林 明 (1990):『農業水利の空間構造』大明堂
3. 田林 明 (1991):『扇状地農村の変容と地域構造:富山県黒部川扇状地農村に関する地理学的研究』古今書院
4. ロジャー・ドイル編, 高橋伸夫・田林 明監訳 (1995):『アメリカ合衆国テーマ別地図』東洋書林
5. A.C.アンドリース・J.W.フォンセン編著, 高橋伸夫・菅野峰明・田林 明監訳 (1997):『現代アメリカ社会地図』古今書院

千葉 徳爾

1. 千葉徳爾 (1956):『はげ山の研究』農林協会
2. 千葉徳爾 (1969):『狩猟伝承研究』風間書房
3. 千葉徳爾 (1975):『続狩猟伝承研究』風間書房
4. 千葉徳爾 (1976):『地域と伝承』大明堂
5. 千葉徳爾 (1977):『地域と民俗文化』大明堂
6. 千葉徳爾 (1980):『民俗と地域形成』風間書房
7. 千葉徳爾 (1983):『新・地名の研究』古今書院
8. 千葉徳爾 (1986):『近世の山間集落』名著出版
9. 千葉徳爾 (1990):『文化地理学入門:文化研究の遠近法』大明堂
10. 千葉徳爾 (1995):『負けいくさの構造:日本人の戦争観』平凡社

手塚 章

1. ビェール・モンベーク著, 山本正三・手塚 章訳 (1981):『ブラジル, 改訂新版』白水社
2. ポール・クラヴァル著, 山本正三・高橋伸夫・手塚 章訳 (1984):『新しい地理学』白水社
3. K.-A.ベスラー著, 手塚 章訳 (1988):『政治地理学入門』古今書院
4. 中村和郎・手塚 章・石井英也 (1991):『地理学講座4:地域と景観』古今書院
5. 手塚 章 (1991):『地理学の古典』古今書院
6. 手塚 章 (1997):『続地理学の古典:フンボルトの世界』古今書院
7. ジャン＝ロベール・ピット著, 高橋伸夫・手塚 章訳 (1998):『フランス文化と風景』上・下巻 東洋書林

中川 正

1. 中川 正 (1997):『ルイジアナの墓地:死の景観地理学』古今書院

尾藤 章雄

1. 尾藤章雄 (1996):『都市の地域イメージ:地理空間と認知空間のテクスチャ』大明堂

尾留川正平

1. 尾留川正平ほか (1939):『総合郷土研究 ―秋田県―』政治教育協会
2. 尾留川正平 (1948):『世界の農牧業と農村生活』日黒書店
3. 尾留川正平 (1950):『食糧の生産と消費』金星堂
4. 尾留川正平 (1955):『経済地理』朝倉書店
5. 尾留川正平編 (1966):『地理学研究法』朝倉書店
6. 青野壽郎・尾留川正平編 (1965-75):『日本地誌全21巻』二宮書店
7. 尾留川正平・市川正巳・吉野正敏・山本正三・正井泰夫・奥野隆史編 (1972-76):『現代地理調査法Ⅰ-Ⅳ』朝倉書店
8. 尾留川正平・山本正三編 (1978):『沿岸集落の生態:南伊豆における沿岸集落の地理学的研究』二宮書店
9. 尾留川正平 (1979):『農業地域形成の研究』二宮書店
10. 尾留川正平 (1981):『砂丘の開拓と土地利用 ―付. デルタと高距限界地帯の開発―』二宮書店

正井 泰夫

1. 正井泰夫 (1972): 『日米都市の比較研究』 古今書院
2. 正井泰夫 (1972): 『東京の生活地図』 時事通信社
3. 正井泰夫 (1985): 『アメリカとカナダの風土: 日本的視点』 二宮書店
4. 正井泰夫 (1986): 『都市地図の旅』 原書房
5. 竹内啓一・正井泰夫編 (1986): 『地理学を学ぶ』 原書房
6. 正井泰夫 (1987): 『城下町東京: 江戸と東京の対話』 原書房
7. R.G.パリー・C.R.パーキンス編著, 正井泰夫監訳 (1990): 『世界地図情報事典』 二宮書店
8. 正井泰夫 (1991): 『グローバル地誌: 大西洋圏と太平洋圏』 二宮書店
9. 谷岡武雄・浮田典良・正井泰夫編 (1994): 『世界地誌の研究と教育』 大明堂
10. マイケル・ブラッドショー著, 正井泰夫・澤田裕之訳 (1997): 『アメリカの風土と地域計画』 大明堂

村山 祐司

1. D.グリッグ著, 山本正三・内山幸久・村山祐司訳 (1986): 『農業地理学入門』 原書房
2. 村山祐司 (1991): 『交通流動の空間構造』 古今書院
3. K.ジョーンズ・J.シモンズ著, 藤田直晴・村山祐司監訳 (1992): 『商業環境と立地戦略』 大明堂
4. D.グリッグ著, 山本正三・村山祐司訳 (1994): 『新版第三世界の食料問題』 農林統計協会
5. D.グリッグ著, 山本正三・内山幸久・犬井 正・村山祐司訳 (1997): 『西洋農業の変貌』 農林統計協会
6. 村山祐司 (1998): 『増補改訂 地域分析: 地域の見方・読み方・調べ方』 古今書院
7. 中村和郎・寄藤 昂・村山祐司編 (1998): 『地理情報システムを学ぶ』 古今書院

矢ヶ崎典隆

1. 矢ヶ崎典隆 (1993): 『移民農業: カリフォルニアの日本人移民社会』 古今書院
2. P.ハゲット監修, 矢ヶ崎典隆訳 (1997): 『アメリカ合衆国Ⅱ』 朝倉書店

山下 清海

1. 山下清海 (1987): 『東南アジアのチャイナタウン』 古今書院
2. 山下清海 (1988): 『シンガポールの華人社会』 大明堂

山下 宗利

1. 山下宗利 (1999): 『東京都心部の空間利用』 古今書院

山本 正三

1. 山本正三 (1973): 『茶業地域の研究』 大明堂
2. オリヴィエ・ドルフュス著, 山本正三・高橋伸夫訳 (1975): 『地理空間』 白水社
3. 山本正三・田中真吾・太田 勇編 (1979): 『世界の自然環境』 大明堂
4. P.E.ジェームス著, 山本正三・菅野峰明訳 (1979): 『ラテンアメリカ1-3』 二宮書店
5. ミッシェル・ロッシュフォール著, 山本正三訳 (1979): 『南アメリカの地理』 白水社
6. 山本正三・北林吉弘・田林 明編 (1987): 『日本の農村空間 — 変貌する日本農村の地域構造 —』 古今書院
7. 山本正三編著 (1991): 『首都圏の空間構造』 二宮書店
8. J.F.ハート著, 山本正三・桜井明久・菊地俊夫訳 (1992): 『農村景観を読む』 大明堂
9. 山本正三編 (1995): 『産業経済地理, 世界』 朝倉書店
10. 山本正三・千歳壽一・溝尾良隆編 (1997): 『現代日本の地域変化』 古今書院

山本 充

1. 山本 充 (1997): 『山地の土地資源利用』 大明堂

IV 人文地理学・地誌学分野の教育活動

IV-1 開設授業科目と担当者

1. 自然学類

人文地理学・地誌学の専門的科目は、第1期生が三年次に進級した1976年度から開講された。1974・1975年度には他分野と共通の基礎的科目のみ開講された。

(年度)	(科目名)	(担当者)
1976年度		
地誌学Ⅰ	正井 泰夫	
地誌学Ⅱ	高野 史男	
地誌学Ⅲ	山本 正三	
地誌学Ⅳ	太田 勇	
計量地理学	奥野 隆史	
計量地理学演習	奥野 隆史	
経済地理学Ⅰ	高橋 伸夫	
経済地理学Ⅱ	奥野 隆史	
経済地理学Ⅲ	佐々木 博	
経済地理学演習	高橋 伸夫・奥野 隆史・佐々木 博	
1977年度		
地理学史方法論	菅野 峰明	
立地論	奥野 隆史・菅野 峰明	
社会地理学Ⅰ	奥野 隆史	
社会地理学Ⅱ	高橋 伸夫	
社会地理学Ⅲ	佐々木 博	
社会地理学演習	高橋 伸夫・奥野 隆史・佐々木 博	
文化地理学Ⅰ	高野 史男	
文化地理学Ⅱ	石井 英也	
文化地理学Ⅲ	正井 泰夫	
文化地理学演習	高野 史男・石井 英也・正井 泰夫	
地誌学（アジア）	高野 史男	
地誌学（アメリカ）	正井 泰夫	
地誌学（ヨーロッパ）	佐々木 博	
人文地理学演習Ⅰ	佐々木 博・高橋 伸夫 ほか	
人文地理学演習Ⅱ	高野 史男・奥野 隆史 ほか	
人文地理学野外実験A	奥野 隆史	

人文地理学野外実験B 高野 史男

1978年度

地域概論	山本 正三・高野 史男・正井 泰夫
経済地理学	奥野 隆史・高橋 伸夫・山本 正三
計量地理学	高阪 宏行・奥野 隆史
人文地理学実験	高野 史男・山本 正三・奥野 隆史・高橋 伸夫
人文地理学演習	高野 史男・山本 正三・奥野 隆史・高橋 伸夫
人文地理学野外実験A	高橋 伸夫
外国地誌Ⅰ	市川 正巳
外国地誌Ⅱ	吉野 正敏
外国地誌Ⅲ	奥野 隆史

1979年度

地球科学基礎論A-2	高橋 伸夫・奥野 隆史
地球科学基礎論実験Ⅲ	石井 英也・高阪 宏行
人文地理学Ⅰ	山本 正三・高橋 伸夫・石井 英也
地誌学Ⅰ	高野 史男・奥野 隆史・高阪 宏行
人文地理学Ⅰ演習	石井 英也・高橋 伸夫・山本 正三
地誌学Ⅰ演習	高野 史男・奥野 隆史・高阪 宏行
人文地理学演習	山本 正三・高橋 伸夫・石井 英也
地誌学演習	高野 史男・奥野 隆史・高阪 宏行
人文地理学実験	高野 史男・山本 正三・高阪 宏行
人文地理学野外実験	山本 正三・石井 英也
地誌学野外実験	高野 史男・高阪 宏行
人文地理学特論	金崎 肇
外国地誌Ⅰ（アジア）	高野 史男・関口 武・太田 勇
外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ）	古藤田一雄・佐々木 博
外国地誌Ⅲ（アメリカ）	松本 栄次・菅野 峰明・正井 泰夫

1980年度

地球科学基礎論A-2	山本 正三・奥野 隆史
地球科学基礎論実験Ⅲ	石井 英也・高阪 宏行
人文地理学Ⅱ	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也
地誌学Ⅱ	奥野 隆史・高阪 宏行
人文地理学Ⅱ 演習	石井 英也・高橋 伸夫・ 山本 正三
地誌学Ⅱ 演習	奥野 隆史・高阪 宏行
人文地理学演習	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也
地誌学演習	奥野 隆史・高阪 宏行
人文地理学実験	高阪 宏行・石井 英也
人文地理学野外実験	高橋 伸夫・石井 英也
地誌学野外実験	奥野 隆史・高阪 宏行
人文地理学特論	松本 正美
外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ）	松本 栄次
外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ）	高山 茂美
外国地誌Ⅵ（ソ連）	市川 正巳

1981年度

人文地理学概説Ⅰ	山本 正三・石井 英也
人文地理学概説Ⅱ	奥野 隆史
人文地理学Ⅰ	石井 英也・斎藤 功・ 高橋 伸夫
地誌学Ⅰ	奥野 隆史・山本 正三
人文地理学Ⅰ 演習	石井 英也・斎藤 功・ 高橋 伸夫
地誌学Ⅰ 演習	奥野 隆史・佐々木 博・ 山本 正三
人文地理学演習	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也
地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功
人文地理学実験	高橋 伸夫・田林 明
人文地理学野外実験	山本 正三・田林 明
地誌学野外実験	斎藤 功ほか
地誌学特論	太田 勇
外国地誌Ⅰ（アジア）	樫根 勇
外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ）	高橋 伸夫
外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ）	奥野 隆史

1982年度

人文地理学概説Ⅰ	山本 正三・石井 英也
人文地理学概説Ⅱ	高橋 伸夫
人文地理学Ⅱ	斎藤 功・高橋 伸夫・ 奥野 隆史

地誌学Ⅱ	奥野 隆史ほか
人文地理学Ⅱ 演習	斎藤 功・高橋 伸夫 ほか
地誌学Ⅱ 演習	奥野 隆史ほか
人文地理学演習	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也
地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功 ほか
人文地理学実験	田林 明・石井 英也・ 高橋 伸夫
人文地理学野外実験	高橋 伸夫
地誌学野外実験	奥野 隆史・田林 明
人文地理学特論	田村 正夫
地誌学特論	横山 昭市
外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ）	松本 栄次
外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ）	高山 茂美
外国地誌Ⅵ（中国）	吉野 正敏

1983年度

人文地理学概説Ⅰ	山本 正三・手塚 章
人文地理学概説Ⅱ	高橋 伸夫
人文地理学Ⅰ	石井 英也・斎藤 功・ 高橋 伸夫
地誌学Ⅰ	手塚 章・奥野 隆史
人文地理学Ⅰ 演習	石井 英也・斎藤 功・ 高橋 伸夫
地誌学Ⅰ 演習	手塚 章・奥野 隆史
人文地理学演習	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也
地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章
人文地理学実験	高橋 伸夫・斎藤 功
人文地理学野外実験	山本 正三・田林 明
地誌学野外実験	斎藤 功・手塚 章
地誌学特論	田村 正夫
外国地誌Ⅰ（アジア）	安成 哲三
外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ）	高橋 伸夫
外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ）	奥野 隆史

1984年度

人文地理学概説Ⅰ	山本 正三・石井 英也
人文地理学概説Ⅱ	高橋 伸夫
人文地理学Ⅱ	斎藤 功・高橋 伸夫・ 田林 明
地誌学Ⅱ	手塚 章・奥野 隆史
人文地理学Ⅱ 演習	斎藤 功・高橋 伸夫・

地誌学Ⅱ演習 田林 明
 人文地理学演習 手塚 章・奥野 隆史
 地誌学演習 山本 正三・高橋 伸夫
 手塚 章
 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章
 人文地理学実験 高橋 伸夫・斎藤 功
 人文地理学野外実験 高橋 伸夫・矢ヶ崎典隆
 地誌学野外実験 奥野 隆史・田林 明
 人文地理学特論 内山 幸久
 外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ）
 松本 栄次
 外国地誌Ⅴ（アフリカ・オセアニア・ソ連）
 河村 武
 外国地誌Ⅵ（アングロアメリカ）
 安仁屋政武

1985年度

人文地理学概説Ⅰ 山本 正三・石井 英也
 人文地理学概説Ⅱ 高橋 伸夫
 人文地理学概説Ⅰ 内山 幸久
 人文地理学概説Ⅱ 太田 勇
 人文地理学Ⅰ 高橋 伸夫・斎藤 功・
 石井 英也
 地誌学Ⅰ 奥野 隆史・手塚 章
 人文地理学Ⅰ演習 高橋 伸夫・斎藤 功・
 石井 英也
 地誌学Ⅰ演習 奥野 隆史・手塚 章
 人文地理学演習 山本 正三・高橋 伸夫
 地誌学演習 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章
 人文地理学実験 高橋 伸夫・斎藤 功
 人文地理学野外実験 山本 正三・矢ヶ崎典隆
 地誌学野外実験 斎藤 功・手塚 章
 地誌学特論 山下 清海
 外国地誌Ⅰ（アジア） 斎藤 功
 外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ） 高橋 伸夫
 外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ）
 奥野 隆史

1986年度

人文地理学概説Ⅰ 田林 明・石井 英也
 人文地理学概説Ⅱ 高橋 伸夫
 人文地理学Ⅱ 斎藤 功・高橋 伸夫・
 田林 明
 地誌学Ⅱ 手塚 章・奥野 隆史
 人文地理学Ⅱ演習 斎藤 功・高橋 伸夫・
 田林 明
 地誌学Ⅱ演習 手塚 章・奥野 隆史
 人文地理学演習 山本 正三・高橋 伸夫

地誌学演習 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章
 人文地理学実験 高橋 伸夫・斎藤 功
 人文地理学野外実験 高橋 伸夫・矢ヶ崎典隆
 地誌学野外実験 奥野 隆史・田林 明
 人文地理学特論 桜井 明久
 外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ）
 西沢 利栄
 外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ・ソ連）
 手塚 章
 外国地誌Ⅵ（アングロアメリカ）
 高山 茂美

1987年度

人文地理学概説Ⅰ 田林 明・斎藤 功
 人文地理学概説Ⅱ 高橋 伸夫
 人文地理学Ⅰ 高橋 伸夫・奥野 隆史・
 斎藤 功
 地誌学Ⅰ 奥野 隆史・手塚 章
 人文地理学Ⅰ演習 斎藤 功・高橋 伸夫・
 山本 正三
 地誌学Ⅰ演習 奥野 隆史・手塚 章
 人文地理学演習 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明
 地誌学演習 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章
 人文地理学実験 高橋 伸夫・斎藤 功
 人文地理学野外実験 山本 正三・田林 明
 地誌学野外実験 斎藤 功・手塚 章
 人文地理学特論 坂口 慶治
 地誌学特論 合田 昭二
 外国地誌Ⅰ（アジア） 榎根 勇
 外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ） 佐々木 博
 外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ）
 田林 明

1988年度

人文地理学概説Ⅰ 斎藤 功・手塚 章
 人文地理学概説Ⅱ 高橋 伸夫
 人文地理学Ⅱ 斎藤 功・高橋 伸夫・
 田林 明
 地誌学Ⅱ 奥野 隆史・村山 祐司
 人文地理学Ⅱ演習 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明
 地誌学Ⅱ演習 奥野 隆史ほか
 人文地理学演習Ⅱ 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明・中川 正
 地誌学演習Ⅱ 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章

人文地理学・地誌学実験 斎藤 功・手塚 章
 人文地理学野外実験B 斎藤 功ほか
 地誌学野外実験A 奥野 隆史・手塚 章
 人文地理学特論 白坂 蕃
 外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ）
 山本 正三
 外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ・ソ連）
 河村 武
 外国地誌Ⅵ（アングロアメリカ）
 田瀬 則雄

1989年度

人文地理学Ⅰ 手塚 章
 人文地理学Ⅱ 小野寺 淳
 人文地理学ⅢA 高橋 伸夫・斎藤 功・
 奥野 隆史
 人文地理学ⅢA演習 高橋 伸夫・斎藤 功・
 奥野 隆史
 人文地理学演習A 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明
 人文地理学・地誌学実験 斎藤 功・高橋 伸夫・
 手塚 章・村山 祐司・
 中川 正
 人文地理学野外実験A 山本 正三・村山 祐司
 地誌学Ⅰ 山本 正三・中川 正
 地誌学Ⅱ 田林 明
 地誌学ⅢA 奥野 隆史・村山 祐司
 地誌学ⅢA演習 奥野 隆史・村山 祐司
 地誌学演習A 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章・村山 祐司
 地誌学野外実験B 斎藤 功・手塚 章
 地誌学特論 村上 雅康
 外国地誌Ⅰ（アジア） 吉野 正敏
 外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ） 佐々木 博
 外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ）
 村山 祐司

1990年度

地球科学序説 奥野 隆史
 人文地理学Ⅰ 手塚 章
 人文地理学Ⅱ 小野寺 淳
 人文地理学ⅢB 斎藤 功・高橋 伸夫・
 奥野 隆史
 人文地理学ⅢB演習 山本 正三・高橋 伸夫・
 中川 正
 人文地理学演習B 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明
 人文地理学・地誌学実験 斎藤 功・高橋 伸夫・
 手塚 章・村山 祐司・

中川 正
 人文地理学野外実験B 高橋 伸夫・中川 正
 ほか
 人文地理学特論 坂口 慶治
 地誌学Ⅰ 田林 明・山本 正三
 地誌学Ⅱ 中川 正
 地誌学ⅢB 奥野 隆史・村山 祐司
 地誌学ⅢB演習 奥野 隆史・村山 祐司
 地誌学演習B 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章・村山 祐司
 地誌学野外実験A 奥野 隆史・村山 祐司
 外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ）
 松本 栄次
 外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ・ソ連）
 松岡 憲知
 外国地誌Ⅵ（アングロアメリカ）
 安仁屋政武

1991年度

地球科学序説 奥野 隆史
 人文地理学Ⅰ 田林 明
 人文地理学Ⅱ 小野寺 淳
 人文地理学ⅢA 斎藤 功・高橋 伸夫・
 奥野 隆史
 人文地理学ⅢA演習 高橋 伸夫・斎藤 功・
 奥野 隆史
 人文地理学演習A 高橋 伸夫・田林 明・
 村山 祐司
 人文地理学・地誌学実験 斎藤 功・手塚 章・
 村山 祐司・中川 正
 人文地理学野外実験A 田林 明・手塚 章
 地誌学Ⅰ 手塚 章
 地誌学Ⅱ 中川 正
 地誌学ⅢA 奥野 隆史・村山 祐司
 地誌学ⅢA演習 奥野 隆史・村山 祐司
 地誌学演習A 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章
 地誌学野外実験B 斎藤 功・小野寺 淳
 地誌学特論 淡野 明彦
 外国地誌Ⅰ（アジア） 南 榮佑
 外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ） 佐々木 博
 外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ）
 村山 祐司

1992年度

地球科学序説 奥野 隆史
 人文地理学Ⅰ 田林 明
 人文地理学Ⅱ 高橋 伸夫
 人文地理学ⅢB 斎藤 功・高橋 伸夫・

人文地理学Ⅲ B 演習	奥野 隆史 斎藤 功・高橋 伸夫・
人文地理学演習 B	奥野 隆史 高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学・地誌学実験	斎藤 功・手塚 章・ 村山 祐司・中川 正
人文地理学野外実験 B	高橋 伸夫・中川 正
人文地理学特論	溝尾 良隆
地誌学Ⅰ	小野寺 淳
地誌学Ⅱ	手塚 章
地誌学Ⅲ B	奥野 隆史・村山 祐司
地誌学Ⅲ B 演習	奥野 隆史・村山 祐司
地誌学演習 B	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章
地誌学野外実験 A	奥野 隆史・村山 祐司
外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ）	中川 正
外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ・ソ連）	手塚 章
外国地誌Ⅵ（アングロアメリカ）	嶋田 純

1993年度

地球科学序説	高橋 伸夫
人文地理学Ⅰ	田林 明
人文地理学Ⅱ	高橋 伸夫
人文地理学Ⅲ A	奥野 隆史・高橋 伸夫・ 季 増民
人文地理学Ⅲ A 演習	斎藤 功・高橋 伸夫・ 奥野 隆史
人文地理学演習 A	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学・地誌学実験	斎藤 功・手塚 章・ 村山 祐司・中川 正
人文地理学野外実験 A	田林 明・村山 祐司
地誌学Ⅰ	手塚 章
地誌学Ⅱ	村山 祐司
地誌学Ⅲ A	村山 祐司・奥野 隆史
地誌学Ⅲ A 演習	村山 祐司・奥野 隆史
地誌学演習 A	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章
地誌学野外実験 B	斎藤 功・手塚 章
地誌学特論	五味 武臣
外国地誌Ⅰ（アジア）	朴 恵淑
外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ）	佐々木 博
外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ）	村山 祐司

1994年度

地球科学序説	高橋 伸夫
人文地理学Ⅰ	田林 明
人文地理学Ⅱ	高橋 伸夫
人文地理学Ⅲ B	奥野 隆史・高橋 伸夫・ 斎藤 功
人文地理学Ⅲ B 演習	奥野 隆史・高橋 伸夫・ 斎藤 功
人文地理学演習 B	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学・地誌学実験	手塚 章・村山 祐司・ 中川 正
人文地理学野外実験 B	高橋 伸夫・中川 正
地誌学Ⅰ	手塚 章
地誌学Ⅱ	中川 正
地誌学Ⅲ B	村山 祐司・奥野 隆史
地誌学Ⅲ B 演習	村山 祐司・奥野 隆史
地誌学演習 B	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章
地誌学野外実験 A	奥野 隆史・手塚 章
地誌学特論	巖 勝雄
外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ）	斎藤 功
外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ・ソ連）	池田 宏
外国地誌Ⅵ（アングロアメリカ）	田瀬 則雄

1995年度

地球科学序説	高橋 伸夫
人文地理学Ⅰ	田林 明
人文地理学Ⅱ	高橋 伸夫
人文地理学Ⅲ A	斎藤 功・高橋 伸夫・ 奥野 隆史
人文地理学Ⅲ A 演習	斎藤 功・高橋 伸夫・ 奥野 隆史
人文地理学演習 A	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学・地誌学実験	手塚 章・村山 祐司・ 中川 正
人文地理学野外実験 A	田林 明・村山 祐司
人文地理学特論	巖 勝雄
地誌学Ⅰ	手塚 章
地誌学Ⅱ	村山 祐司
地誌学Ⅲ A	奥野 隆史・村山 祐司
地誌学Ⅲ A 演習	奥野 隆史・村山 祐司
地誌学演習 A	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章
地誌学野外実験 B	斎藤 功・手塚 章

地誌学特論 伊藤 悟
 外国地誌Ⅰ（アジア） 甲斐 憲次
 外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ） 高橋 伸夫
 外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ） 村山 祐司

1996年度

人文地理学Ⅰ 田林 明
 人文地理学Ⅱ 高橋 伸夫
 人文地理学Ⅲ B 斎藤 功・高橋 伸夫・須山 聡
 人文地理学Ⅲ B 演習 高橋 伸夫・斎藤 功・須山 聡
 人文地理学演習 B 高橋 伸夫・田林 明・村山 祐司
 人文地理学・地誌学実験 手塚 章・村山 祐司・須山 聡
 人文地理学野外実験 B 高橋 伸夫・篠原 秀一
 地誌学Ⅰ 手塚 章
 地誌学Ⅱ 櫻井 明久・村山 祐司
 地誌学Ⅲ B 村山 祐司・須山 聡
 地誌学Ⅲ B 演習 須山 聡・村山 祐司
 地誌学演習 B 斎藤 功・手塚 章・須山 聡
 地誌学野外実験 A 手塚 章・須山 聡
 外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ） 松本 栄次
 外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ・その他） 松岡 憲知
 外国地誌Ⅵ（アングロアメリカ） 杉田 倫明

1997年度

人文地理学Ⅰ 田林 明・根田 克彦
 人文地理学Ⅱ 高橋 伸夫
 人文地理学Ⅲ A 田林 明・高橋 伸夫・村山 祐司
 人文地理学Ⅲ A 演習 田林 明・高橋 伸夫・藤目 節夫
 人文地理学演習 A 高橋 伸夫・田林 明・村山 祐司
 人文地理学・地誌学実験 手塚 章・村山 祐司・須山 聡
 人文地理学野外実験 A 田林 明・森本 健弘
 人文地理学特論 山村 順次
 地誌学Ⅰ 須山 聡・手塚 章
 地誌学Ⅱ 許 衛東
 地誌学Ⅲ A 手塚 章・斎藤 功・須山 聡

地誌学Ⅲ A 演習 手塚 章・須山 聡・斎藤 功
 地誌学演習 A 斎藤 功・須山 聡・手塚 章
 地誌学野外実験 B 斎藤 功・須山 聡
 外国地誌Ⅰ（アジア） 鈴木 力英
 外国地誌Ⅱ（ヨーロッパ） 佐々木 博
 外国地誌Ⅲ（アングロアメリカ） 安仁屋政武

1998年度

人文地理学Ⅰ 田林 明・村山 祐司
 人文地理学Ⅱ 高橋 伸夫
 人文地理学Ⅲ 田林 明・高橋 伸夫・村山 祐司
 人文地理学Ⅲ 演習 田林 明・高橋 伸夫・村山 祐司
 人文地理学演習 B 高橋 伸夫・村山 祐司
 人文地理学・地誌学実験 手塚 章・村山 祐司
 人文地理学野外実験 B 高橋 伸夫・森本 健弘
 人文地理学特論 菊地 俊夫
 地誌学Ⅰ 手塚 章
 地誌学Ⅱ 斎藤 功
 地誌学Ⅲ 手塚 章・斎藤 功
 地誌学Ⅲ 演習 手塚 章・斎藤 功
 地誌学演習 B 斎藤 功・手塚 章
 地誌学野外実験 A 手塚 章ほか
 地誌学特論 犬井 正
 外国地誌Ⅳ（ラテンアメリカ） 斎藤 功
 外国地誌Ⅴ（オセアニア・アフリカ・その他） 許 衛東
 外国地誌Ⅵ（アングロアメリカ） 田中 博

2. 比較文化学類

1975年度

人文地理学 佐々木 博
 自然地理学 河村 武
 地理学基礎実習 佐々木 博・石井 英也
 自然環境論 石井 英也・高橋 伸夫・山本 正三
 地域研究基礎論 正井 泰夫

1976年度

歴史地理学 黒崎 千晴
 自然地理学 河村 武
 自然環境論Ⅰ 石井 英也
 自然環境論Ⅱ 高橋 伸夫

自然環境論Ⅲ	山本 正三
地域文化基礎論Ⅰ	正井 泰夫
地域文化基礎論Ⅱ	佐々木 博
地域文化基礎論Ⅲ	石井 英也
自然と歴史	高橋浩一郎・斎藤 功
地域文化論Ⅰ	正井 泰夫
地域文化論Ⅱ	高野 史男
地域文化論Ⅲ	山本 正三
比較地域文化実験実習	千葉 徳爾・松本 栄次・ 石井 英也
比較地域文化野外実習Ⅰ	佐々木 博・石井 英也

1977年度

人文地理学	菅野 峰明
自然地理学	高山 茂美
歴史地理学	菊地 利夫
自然環境論Ⅱ	高山 茂美
自然環境論Ⅲ	高山 茂美
比較地域文化実験実習	千葉 徳爾・松本 栄次・ 石井 英也
都市農村論Ⅰ	奥野 隆史
都市農村論Ⅱ	高橋 伸夫
都市農村論Ⅲ	佐々木 博
比較地理学Ⅰ	高野 史男
比較地理学Ⅱ	正井 泰夫
比較地理学Ⅲ	石井 英也
日本・アジアの習俗と地誌Ⅰ	高野 史男
日本・アジアの習俗と地誌演習Ⅰ	奥野 隆史
ヨーロッパの習俗と地誌Ⅰ	佐々木 博
ヨーロッパの習俗と地誌演習Ⅰ	高橋 伸夫・石井 英也
アメリカの習俗と地誌Ⅰ	正井 泰夫
アメリカの習俗と地誌演習Ⅰ	菅野 峰明
比較地域文化野外実習Ⅰ-1	正井 泰夫・石井 英也
比較地域文化野外実習Ⅰ-2	菊地 利夫・石井 英也
比較地域文化野外実習Ⅱ-1	佐々木 博・石井 英也
比較地域文化野外実習Ⅱ-2	千葉 徳爾・佐々木 博

1978年度

自然環境論	河村 武・高山 茂美・ 山本 正三
-------	----------------------

歴史地理学	黒崎 千晴
地域概論	山本 正三・正井 泰夫・ 高野 史男
地域文化実験実習 [比較文化実験実習]	千葉 徳爾・松本 栄次・ 石井 英也
日本・アジア習俗と地誌Ⅰ	高野 史男
日本・アジア習俗と地誌演習Ⅰ	高野 史男
ヨーロッパ習俗と地誌Ⅰ	佐々木 博
ヨーロッパ習俗と地誌演習Ⅰ	石井 英也
アメリカの習俗と地誌Ⅰ	菅野 峰明
アメリカの習俗と地誌演習Ⅰ	正井 泰夫
地域文化野外実習Ⅰ-1 [比較文化野外実習Ⅰ-1]	正井 泰夫・石井 英也
地域文化野外実習Ⅱ-2 [比較文化野外実習Ⅱ-2]	千葉 徳爾・菊地 利夫

1979年度

人文地理学概説	朝倉隆太郎
自然地理学概説	河村 武・池田 宏・ 樫根 勇
歴史地理学	黒崎 千晴
地域文化論	奥野 隆史・高野 史男・ 高阪 宏行
地域文化実験実習 [比較文化実験実習]	高野 史男・田中 正・ 佐々木 博・高阪 宏行
文化地理学	石井 英也・高橋 伸夫・ 山本 正三
地域文化研究演習Ⅰ	高野 史男・正井 泰夫・ 佐々木 博
日本の地理	正井 泰夫ほか
日本・アジアの習俗と地誌Ⅱ	高野 史男・関口 武・ 太田 勇
日本・アジアの習俗と地誌演習Ⅱ	高野 史男・正井 泰夫・ 佐々木 博
ヨーロッパの習俗と地誌Ⅱ	佐々木 博・古藤田一雄
ヨーロッパの習俗と地誌演習Ⅱ	高野 史男・佐々木 博・ 正井 泰夫
アメリカの習俗と地誌Ⅱ	松本 栄次・菅野 峰明・ 正井 泰夫

アメリカの習俗と地誌演習Ⅱ

高野 史男・正井 泰夫・
佐々木 博

地域文化野外実習Ⅰ-2 [比較文化野外実習Ⅰ-2]

高野 史男・佐々木 博

地域文化野外実習Ⅱ-1 [比較文化野外実習Ⅱ-1]

菊地 利夫・千葉 徳爾

1980年度

自然環境論

高山 茂美・河村 武
ほか

歴史地理学

黒崎 千晴

地域分析論

奥野 隆史・高阪 宏行
ほか

地域文化実験実習 [比較文化実験実習]

松本 栄次・石井 英也
ほか

経済地理学

山本 正三・高橋 伸夫・
石井 英也

地域文化研究演習Ⅰ

山本 正三・石井 英也
ほか

日本の地理

正井 泰夫・
リー・チュンミュン

日本・アジアの習俗と地誌Ⅰ

リー・チュンミュン

日本・アジアの習俗と地誌Ⅱ

ロイ・ケンファー

日本・アジアの習俗と地誌演習Ⅱ

ロイ・ケンファー

ヨーロッパの習俗と地誌Ⅰ

佐々木 博

ヨーロッパの習俗と地誌演習Ⅰ

佐々木 博

アメリカの習俗と地誌Ⅰ

奥野 隆史ほか

アメリカの習俗と地誌演習Ⅰ

奥野 隆史

比較文化野外実習Ⅰ-1

石井 英也ほか

地域文化野外実習Ⅰ-1

石井 英也ほか

1981年度

地理学概説

西澤 利栄・田林 明・
高橋 伸夫

地域文化論

奥野 隆史・高阪 宏行・
山本 正三

地域文化実験実習

田中 正・石井 英也・
田林 明

文化地理学

石井 英也・高橋 伸夫・
斎藤 功

地域文化研究Ⅰ

山本 正三・奥野 隆史・

日本の地理と風土

日本の地理と風土演習

アジアの地理と風土

アジアの地理と風土演習

欧・米の地理と風土Ⅰ

欧・米の地理と風土演習Ⅰ

地域文化野外実習Ⅱ

1982年度

地理学概説

地域分析論

地域文化実験実習

経済地理学

地域文化研究Ⅰ

日本の地理と風土

日本の地理と風土演習

アジアの地理と風土

アジアの地理と風土演習Ⅰ

欧・米の地理と風土Ⅱ

欧・米の地理と風土演習Ⅱ

地域文化野外実習Ⅰ

1983年度

地理学概説

地域文化概説

地域分析論

地域文化実験実習

文化地理学

地域文化研究Ⅰ

佐々木 博・石井 英也・
田林 明

奥野 隆史・山本 正三・
斎藤 功

奥野 隆史・山本 正三・
斎藤 功

ロイ・ケンファー

ロイ・ケンファー

田林 明・正井 泰夫・
松本 栄次

田林 明・正井 泰夫・
松本 栄次

佐々木 博・田林 明

松本 栄次・山本 正三・
田林 明

奥野 隆史ほか

石井 英也・田林 明
斎藤 功・高橋 伸夫・
奥野 隆史

山本 正三・奥野 隆史・
佐々木 博・石井 英也・
田林 明

田林 明
田林 明・石井 英也

ロイ・ケンファー

ロイ・ケンファー

石井 英也・佐々木 博
ほか

石井 英也・佐々木 博
ほか

石井 英也・山本 正三

松本 栄次・田林 明・
山本 正三

佐々木 博・山本 正三・
元木 靖

手塚 章・奥野 隆史・
山本 正三

田林 明・松本 栄次・
石井 英也

石井 英也・斎藤 功・
高橋 伸夫

奥野 隆史・山本 正三・

佐々木 博・石井 英也・
 田林 明
 日本の地理と風土 田林 明・奥野 隆史
 日本の地理と風土演習 田林 明・奥野 隆史
 欧・米の地理と風土Ⅰ 正井 泰夫・菅野 峰明
 欧・米の地理と風土演習Ⅰ

地域文化野外実習Ⅱ 正井 泰夫・菅野 峰明
 佐々木 博・石井 英也

1984年度

地理学概説 松本 栄次・矢ヶ崎典隆・
 マリオ平岡
 地域文化概論 佐々木 博・マリオ平岡・
 正井 泰夫
 地域分析論 手塚 章・奥野 隆史
 地域文化実験実習 田林 明・松本 栄次・
 矢ヶ崎典隆・石井 英也
 経済地理学 斎藤 功・高橋 伸夫・
 田林 明
 地域文化演習Ⅰ 奥野 隆史・山本 正三・
 佐々木 博・石井 英也・
 田林 明・矢ヶ崎典隆
 日本の地理と風土 田林 明・矢ヶ崎典隆
 日本の地理と風土演習 田林 明・矢ヶ崎典隆
 アジアの地理と風土 新藤 静夫・斎藤 功・
 奥野 隆史
 アジアの地理と風土演習 矢ヶ崎典隆・斎藤 功・
 奥野 隆史
 欧・米の地理と風土Ⅱ 高橋 伸夫・佐々木 博・
 石井 英也
 欧・米の地理と風土演習Ⅱ 高橋 伸夫・佐々木 博・
 石井 英也
 地域文化野外実習Ⅰ 山本 正三・石井 英也・
 マリオ平岡

1985年度

地理学概説 松本 栄次・矢ヶ崎典隆・
 田林 明
 地域文化概論 佐々木 博・マリオ平岡・
 元木 靖
 地域文化論 手塚 章・奥野 隆史
 地域文化実験実習 田林 明・松本 栄次・
 矢ヶ崎典隆・石井 英也
 文化地理学 石井 英也・斎藤 功・
 高橋 伸夫
 地域文化研究Ⅰ 山本 正三・奥野 隆史・
 佐々木 博・石井 英也・
 田林 明・矢ヶ崎典隆

日本の地理と風土 田林 明・奥野 隆史
 日本の地理と風土演習 田林 明・奥野 隆史
 欧・米の地理と風土Ⅰ 矢ヶ崎典隆・マリオ平岡・
 菅野 峰明

欧・米の地理と風土演習Ⅰ 矢ヶ崎典隆・マリオ平岡・
 菅野 峰明
 地域文化野外実習Ⅱ 佐々木 博・田林 明
 アジアの政治と社会Ⅱ 陳 國章

1986年度

地理学概説 松本 栄次・矢ヶ崎典隆
 地域文化概論 佐々木 博・元木 靖・
 山本 正三
 地域分析論 手塚 章・奥野 隆史
 地域文化実験実習 田林 明・松本 栄次・
 矢ヶ崎典隆・石井 英也
 経済地理学 斎藤 功・高橋 伸夫・
 田林 明
 地域文化演習Ⅰ 奥野 隆史・佐々木 博・
 石井 英也・田林 明・
 矢ヶ崎典隆
 日本の地理と風土 奥野 隆史・田林 明・
 斎藤 功
 日本の地理と風土演習 奥野 隆史・田林 明・
 斎藤 功
 アジアの地理と風土 新藤 静夫・奥野 隆史・
 C.バンダメイヤー
 アジアの地理と風土演習 矢ヶ崎典隆・
 C.バンダメイヤー
 欧・米の地理と風土Ⅰ 高橋 伸夫・桜井 明久・
 石井 英也
 欧・米の地理と風土演習Ⅰ 高橋 伸夫・佐々木 博・
 石井 英也
 地域文化野外実習Ⅰ 田林 明・矢ヶ崎典隆

1987年度

地理学概説 松本 栄次・山本 正三・
 田林 明
 地域文化概論 佐々木 博・元木 靖・
 山本 正三
 地域文化論 手塚 章・奥野 隆史
 地域文化実験実習 田林 明・松本 栄次・
 斎藤 功・奥野 隆史・
 高橋 伸夫
 地域文化研究Ⅰ 奥野 隆史・佐々木 博・
 高橋 伸夫・田林 明
 日本の地理と風土 田林 明・斎藤 功・

日本の地理と風土演習	奥野 隆史 田林 明・斎藤 功・	田林 明・小野寺 淳・ 中川 正
欧・米の地理と風土Ⅱ	奥野 隆史 松本 栄次・菅野 峰明・ 高橋 伸夫	文化地理学研究 山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫・田林 明・ 小野寺 淳・中川 正
欧・米の地理と風土演習Ⅱ	松本 栄次・菅野 峰明・ 高橋 伸夫	比較地理学 田林 明・山本 正三・ 高橋 伸夫
地域文化野外実習Ⅱ	佐々木 博	地域地理学Ⅰ（日本）[日本の地理と風土] 小野寺 淳・佐々木 博・ 田林 明
1988年度		日本の地理と風土演習 小野寺 淳・佐々木 博・ 田林 明
文化地理学概説	山本 正三・中川 正・ 田林 明	地域地理学Ⅳ（アメリカ）[欧・米の地理と風土Ⅱ] 中川 正・田林 明・ 菅野 峰明
文化地理学Ⅰ	斎藤 功・高橋 伸夫・ 田林 明	欧・米の地理と風土演習Ⅱ 中川 正・田林 明・ 菅野 峰明
文化地理学Ⅱ	奥野 隆史・村山 祐司	アジアの地理と風土演習 斎藤 功・手塚 章・ 奥野 隆史
自然環境論	吉野 正敏・松本 栄次	地域地理学Ⅱ特論（南アジアの自然環境論） ラマサミ・スパイヤー
文化地理学実験実習	高橋 伸夫・松本 栄次・ 田林 明・中川 正・ 小野寺 淳	比較文化野外演習Ⅲ 佐々木 博・小野寺 淳
文化地理学演習	山本 正三・奥野 隆史・ 佐々木 博・高橋 伸夫・ 田林 明・中川 正・ 小野寺 淳	1990年度
比較地理学	佐々木 博・山下 清海・ 小野寺 淳	文化地理学概説A 小野寺 淳
地域地理学Ⅱ（アジア）[アジアの地理と風土]	斎藤 功・奥野 隆史・ 内藤 正典	文化地理学概説B 中川 正・田林 明
アジアの地理と風土演習	斎藤 功・奥野 隆史・ 田林 明	文化地理学Ⅰ 斎藤 功・高橋 伸夫・ 奥野 隆史
地域地理学Ⅲ（ヨーロッパ）[欧・米の地理と風土Ⅰ]	佐々木 博・手塚 章・ 高橋 伸夫	文化地理学Ⅱ 奥野 隆史・村山 祐司
欧・米の地理と風土演習Ⅰ	佐々木 博・手塚 章・ 高橋 伸夫	自然環境論 松本 栄次・河村 武
地域地理学Ⅱ特論（南アジアの自然環境論）	ラマサミ・スパイヤー	文化地理学実験実習 高橋 伸夫・池田 宏・ 田林 明・小野寺 淳・ 中川 正
比較文化野外演習Ⅰ	高橋 伸夫・中川 正	文化地理学演習 山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫・田林 明・ 小野寺 淳・中川 正
1989年度		比較地理学 高橋 伸夫・小野寺 淳・ 田林 明・小林 浩二
文化地理学概説A	山本 正三	地域地理学Ⅱ（アジア）[アジアの地理と風土] 内藤 正典・南 榮佑 ほか
文化地理学概説B	中川 正・田林 明	アジアの地理と風土演習 内藤 正典・南 榮佑 ほか
文化地理学Ⅰ	高橋 伸夫・斎藤 功・ 奥野 隆史	地域地理学Ⅲ（ヨーロッパ）[欧・米の地理と風土Ⅰ] 手塚 章・佐々木 博・ 高橋 伸夫・立石 友男
文化地理学Ⅱ	奥野 隆史・村山 祐司	欧・米の地理と風土演習Ⅰ 手塚 章・佐々木 博・
自然環境論	松本 栄次・吉野 正敏	
文化地理学実験実習	高橋 伸夫・池田 宏・	

比較文化野外演習Ⅰ	高橋 伸夫 田林 明・小野寺 淳	地域地理学Ⅲ（ヨーロッパ）[欧・米の地理と風土Ⅰ] 手塚 章・高橋 伸夫・ 佐々木 博
1991年度		欧・米の地理と風土演習Ⅰ
文化地理学概説A	小野寺 淳	手塚 章・高橋 伸夫・
文化地理学概説B	中川 正	佐々木 博
文化地理学Ⅰ	斎藤 功・高橋 伸夫・ 奥野 隆史	比較文化野外演習Ⅰ
文化地理学Ⅱ	奥野 隆史・村山 祐司	田林 明・小野寺 淳
自然環境論	松本 栄次・河村 武	
文化地理学実験実習	小野寺 淳・田林 明	
文化地理学研究	佐々木 博・高橋 伸夫・ 田林 明・小野寺 淳・ 中川 正	
比較地理学	田林 明・佐々木 博・ 高橋 伸夫	
地域地理学Ⅰ（日本）[日本の地理と風土]	小野寺 淳・佐々木 博・ 田林 明	
日本の地理と風土演習	小野寺 淳・佐々木 博・ 田林 明	
地域地理学Ⅳ（アメリカ）[欧・米の地理と風土Ⅱ]	中川 正・斎藤 功・ 矢ヶ崎典隆	
欧・米の地理と風土演習Ⅱ	中川 正・斎藤 功・ 矢ヶ崎典隆	
比較文化野外演習Ⅲ	佐々木 博・中川 正	
1992年度		地域地理学Ⅰ（日本）[日本の地理と風土]
文化地理学概説A	小野寺 淳	小野寺 淳・大塚 昌利・ 田林 明
文化地理学概説B	中川 正	日本の地理と風土演習
文化地理学Ⅰ	高橋 伸夫・斎藤 功・ 奥野 隆史	小野寺 淳・佐々木 博・ 田林 明
文化地理学Ⅱ	奥野 隆史・村山 祐司	地域地理学Ⅳ（アメリカ）[欧・米の地理と風土Ⅱ]
自然環境論	河村 武・松本 栄次	斎藤 功・中川 正・ 矢ヶ崎典隆
文化地理学実験実習	小野寺 淳・田林 明	欧・米の地理と風土演習Ⅱ
文化地理学演習	佐々木 博・高橋 伸夫・ 田林 明・小野寺 淳・ 中川 正	斎藤 功・中川 正・ 矢ヶ崎典隆
比較地理学	佐々木 博・小野寺 淳・ 田林 明	比較文化野外演習Ⅲ
地域地理学Ⅰ（日本）[日本の地理と風土]	井田 仁康	佐々木 博・小野寺 淳
地域地理学Ⅱ（アジア）[アジアの地理と風土]	奥野 隆史・季 増民・ 山下 清海	
アジアの地理と風土演習	田林 明・小野寺 淳・ 斎藤 功	
		1994年度
		文化地理学概説A
		小野寺 淳
		文化地理学概説B
		中川 正
		文化地理学Ⅰ
		奥野 隆史・高橋 伸夫・ 斎藤 功
		地域分析論
		村山 祐司・奥野 隆史
		自然環境論
		松本 栄次
		文化地理学実験実習
		小野寺 淳・田林 明
		文化地理学演習
		佐々木 博・高橋 伸夫・ 田林 明・小野寺 淳・ 中川 正・篠原 秀一
		比較地理学
		佐々木 博・小野寺 淳・ 田林 明
		地域地理学Ⅱ（アジア）[アジアの地理と風土]
		小野寺 淳・巖 勝雄・

アジアの地理と風土演習	佐々木史郎 田林 明・巖 勝雄・ 佐々木史郎
地域地理学Ⅲ（欧米）[欧・米の地理と風土]	佐々木 博・手塚 章・ 高橋 伸夫
欧・米の地理と風土演習	佐々木 博・手塚 章
比較文化野外演習Ⅰ	田林 明・小野寺 淳・ 篠原 秀一

1995年度

文化地理学概説A	中川 正
文化地理学概説B	中川 正・篠原 秀一
文化地理学Ⅱ	斎藤 功・高橋 伸夫・ 奥野 隆史
地域分析論	奥野 隆史・村山 祐司
自然環境論	松本 栄次
文化地理学実験実習	田林 明・篠原 秀一
文化地理学研究	佐々木 博・田林 明・ 高橋 伸夫・篠原 秀一・ 中川 正
比較地理学	佐々木 博・篠原 秀一・ 田林 明
地域地理学Ⅰ（日本）[日本の地理と風土]	田林 明・篠原 秀一・ 小野寺 淳
日本の地理と風土演習	田林 明・篠原 秀一・ 佐々木 博
地域地理学Ⅲ（欧米）[欧・米の地理と風土]	斎藤 功・中川 正・ 矢ヶ崎典隆
欧・米の地理と風土演習	斎藤 功・中川 正・ 矢ヶ崎典隆
比較文化野外演習Ⅲ	佐々木 博・中川 正

1996年度

文化地理学概説A	篠原 秀一
文化地理学概説B	森本 健弘・篠原 秀一
文化地理学入門演習	篠原 秀一・森本 健弘
経済地理学	斎藤 功・高橋 伸夫・ 須山 聡
地域分析論	村山 祐司・須山 聡
自然環境論	松本 栄次
比較文化地理学	佐々木 博・篠原 秀一・ 季 増民
地域地理学Ⅱ（アジア）[アジアの地理と風土]	篠原 秀一・斎藤 功・ 佐々木史郎
地域地理学Ⅲ（ヨーロッパ）	

文化地理学実験実習

文化地理学野外演習Ⅰ

文化地理学研究演習

1997年度

文化地理学概説A	森本 健弘
文化地理学概説B	森本 健弘
文化地理学入門演習	森本 健弘
社会地理学	田林 明・高橋 伸夫・ 村山 祐司
地域分析論	手塚 章・斎藤 功・ 須山 聡
自然環境論	松本 栄次
文化地理学研究	佐々木 博・田林 明・ 高橋 伸夫・森本 健弘
地域地理学Ⅰ（日本）	森本 健弘・大塚 昌利・ 佐々木 博
地域地理学Ⅳ（アメリカ）	田林 明・斎藤 功・ 菅野 峰明
文化地理学実験実習	森本 健弘・田林 明
文化地理学野外演習Ⅱ	佐々木 博・森本 健弘
比較文化地理学演習	佐々木 博・田林 明

1998年度

文化地理学概説A	森本 健弘
文化地理学概説B	森本 健弘・田林 明・ 松井 圭介
文化地理学入門演習	森本 健弘・松井 圭介
社会地理学	田林 明・高橋 伸夫・ 村山 祐司
地域分析論	手塚 章・斎藤 功
自然環境論	松本 栄次
比較文化地理学	田林 明・松井 圭介・ 金田 章裕
地域地理学Ⅱ（アジア）[アジアの地理と風土]	洪 顕哲・斎藤 功・ 山下 清海
地域地理学Ⅲ（ヨーロッパ）	手塚 章・高橋 伸夫・ ポッター, S. R.
文化地理学実験実習	田林 明・松井 圭介・ 森本 健弘
文化地理学野外演習Ⅰ	田林 明・松井 圭介
文化地理学研究演習	田林 明・高橋 伸夫・

森本 健弘・松井 圭介

3. 地球科学研究科

1975年度

人文地理学研究法	正井 泰夫
人文地理学演習	山本 正三・佐々木 博
人文地理学野外実験 (Ⅰ)	山本 正三・佐々木 博
人文地理学特論	佐々木 博
地誌学研究法	高野 史男
地誌学演習	高野 史男・奥野 隆史
地誌学野外実験 (Ⅰ)	高野 史男・奥野 隆史
地誌学特論	奥野 隆史

1976年度

人文地理学研究法	高野 史男・山本 正三・ 正井 泰夫
人文地理学演習	高野 史男・山本 正三・ 正井 泰夫・奥野 隆史・ 佐々木 博・高橋 伸夫
人文地理学特殊講義Ⅰ	西岡 久雄
人文地理学特殊講義Ⅱ	角本 良平
人文地理学特殊講義Ⅲ	清水馨八郎
人文地理学特論Ⅰ	奥野 隆史・佐々木 博・ 高橋 伸夫
人文地理学野外実験Ⅰ	高野 史男・山本 正三・ 奥野 隆史
人文地理学野外実験Ⅱ	山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫
地理学・水文学特別研究	高野 史男・山本 正三・ 正井 泰夫・奥野 隆史・ 佐々木 博・高橋 伸夫

1977年度

人文地理学研究法	高野 史男・正井 泰夫
人文地理学演習Ⅰ	高野 史男・正井 泰夫・ 奥野 隆史
人文地理学演習Ⅱ	佐々木 博・高橋 伸夫
人文地理学特殊講義Ⅰ	西川 治
人文地理学特論Ⅰ	奥野 隆史・佐々木 博・ 高橋 伸夫
人文地理学特論Ⅱ	斎藤 功ほか
人文地理学野外実験Ⅰ	高野 史男・正井 泰夫・ 奥野 隆史
人文地理学野外実験Ⅱ	山本 正三・高橋 伸夫
地理学・水文学特別研究C	高野 史男・正井 泰夫・ 奥野 隆史・佐々木 博・ 高橋 伸夫

1978年度

人文地理学研究法	高野 史男・山本 正三・ 正井 泰夫
人文地理学演習Ⅰ	高野 史男・正井 泰夫・ 奥野 隆史
人文地理学演習Ⅱ	山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫
人文地理学特論Ⅰ	奥野 隆史・佐々木 博・ 高橋 伸夫
人文地理学野外実験Ⅰ	高野 史男・正井 泰夫・ 奥野 隆史
人文地理学野外実験Ⅱ	山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫
地理学・水文学特別研究C	高野 史男・山本 正三・ 正井 泰夫・奥野 隆史・ 佐々木 博・高橋 伸夫 奥野 隆史
統計学	

1979年度

人文地理学研究法	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也
人文地理学演習	山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫・石井 英也
人文地理学特殊講義Ⅰ	佐々木 博
人文地理学特殊講義Ⅱ	西岡 久雄
人文地理学野外実験	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也
地誌学演習	高野 史男・正井 泰夫・ 奥野 隆史
地誌学研究法	高野 史男・奥野 隆史 ほか
地誌学特殊講義Ⅰ	正井 泰夫
地誌学特殊講義Ⅱ	森川 洋
地誌学野外実験	高野 史男・奥野 隆史 ほか
地理学・水文学特別研究C	高野 史男・山本 正三・ 奥野 隆史・高橋 伸夫 ほか

1980年度

人文地理学研究法	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也
人文地理学演習	山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫・石井 英也
人文地理学特殊講義Ⅰ	佐々木 博
人文地理学野外実験	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也

地誌学研究法	奥野 隆史・高阪 宏行	地誌学野外実験	奥野 隆史・斎藤 功 ほか
地誌学演習	奥野 隆史・ リー・チュンミュン	地理学・水文学特別研究C	山本 正三・正井 泰夫・ 奥野 隆史・高橋 伸夫・ 斎藤 功・石井 英也
地誌学特殊講義Ⅰ	正井 泰夫	統計学	奥野 隆史
地誌学特殊講義Ⅱ	リー・チュンミュン		
地誌学特殊講義Ⅲ	伊藤 達雄		
地誌学野外実験	奥野 隆史ほか		
地理学・水文学特別研究C	山本 正三・奥野 隆史・ 高橋 伸夫・石井 英也 ほか	1983年度	
統計学	奥野 隆史	人文地理学研究法	高橋 伸夫・石井 英也・ 田林 明
1981年度		人文地理学演習	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也・田林 明
人文地理学研究法	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也	人文地理学特殊講義Ⅰ	朝倉隆太郎
人文地理学演習	山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫・石井 英也 ほか	人文地理学特殊講義Ⅱ	宮坂 正治
人文地理学特殊講義Ⅰ	佐々木 博	人文地理学野外実験	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也・田林 明
人文地理学特殊講義Ⅱ	合田 昭二	地誌学研究法	奥野 隆史・山本 正三・ 斎藤 功
人文地理学特殊講義Ⅲ	ロイ・ケンフー	地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功・ 佐々木 博
人文地理学野外実験	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也ほか	地誌学特殊講義Ⅰ	正井 泰夫
地誌学研究法	奥野 隆史・斎藤 功 ほか	地誌学野外実験	奥野 隆史・斎藤 功・ 佐々木 博
地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功 ほか	地理学・水文学特別研究C	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也・田林 明
地誌学特殊講義Ⅰ	正井 泰夫	地理学・水文学特別研究D	正井 泰夫・奥野 隆史・ 佐々木 博・斎藤 功
地誌学野外実験	奥野 隆史・斎藤 功 ほか		
地理学・水文学特別研究C	山本 正三・奥野 隆史・ 高橋 伸夫・石井 英也 斎藤 功ほか	1984年度	
1982年度		人文地理学研究法	高橋 伸夫・石井 英也・ 田林 明
人文地理学研究法	高橋 伸夫・石井 英也	人文地理学演習	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也・田林 明・ マリオ平岡
人文地理学演習	山本 正三・佐々木 博・ 高橋 伸夫・石井 英也	人文地理学特殊講義Ⅰ	佐々木 博
人文地理学特殊講義Ⅰ	佐々木 博	人文地理学野外実験	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也・田林 明・ マリオ平岡
人文地理学特殊講義Ⅲ	ロイ・ケンフー	地誌学研究法	奥野 隆史・山本 正三・ 斎藤 功
人文地理学野外実験	山本 正三・高橋 伸夫・ 石井 英也	地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功・ 佐々木 博
地誌学研究法	山本 正三・佐々木 博・ 斎藤 功	地誌学特殊講義Ⅰ	山本 正三
地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功 ほか	地誌学特殊講義Ⅱ	マリオ平岡
地誌学特殊講義Ⅰ	正井 泰夫	地誌学特殊講義Ⅲ	菅野 峰明
		地誌学野外実験	奥野 隆史・斎藤 功・

佐々木 博
 地理学・水文学特別研究C
 山本 正三・高橋 伸夫・
 石井 英也・田林 明
 地理学・水文学特別研究D
 正井 泰夫・奥野 隆史・
 佐々木 博・斎藤 功
 統計学Ⅰ
 奥野 隆史

1985年度

人文地理学研究法 高橋 伸夫・石井 英也・
 田林 明
 人文地理学演習 山本 正三・高橋 伸夫・
 マリオ平岡・石井 英也・
 田林 明
 人文地理学特殊講義Ⅰ 佐々木 博
 人文地理学野外実験 山本 正三・高橋 伸夫・
 マリオ平岡・石井 英也・
 田林 明
 地誌学研究法 奥野 隆史・斎藤 功・
 山本 正三
 地誌学演習 奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功
 地誌学野外実験 奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功
 地理学・水文学特別研究C
 山本 正三・佐々木 博・
 マリオ平岡
 地理学・水文学特別研究D
 奥野 隆史・斎藤 功・
 高橋 伸夫・石井 英也・
 田林 明

1986年度

人文地理学研究法 高橋 伸夫・石井 英也・
 田林 明
 人文地理学演習 山本 正三・高橋 伸夫・
 石井 英也・田林 明
 人文地理学特殊講義Ⅰ 佐々木 博
 人文地理学特殊講義Ⅲ C.バンダメイヤー
 人文地理学野外実験 山本 正三・高橋 伸夫・
 石井 英也・田林 明
 地誌学研究法 奥野 隆史・斎藤 功・
 山本 正三
 地誌学演習 奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功
 地誌学特殊講義Ⅱ 松井 貞雄
 地誌学野外実験 奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功

地理学・水文学特別研究C

山本 正三・高橋 伸夫・
 石井 英也・田林 明

地理学・水文学特別研究D

奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功
 統計学Ⅰ
 奥野 隆史

1987年度

人文地理学研究法 田林 明・高橋 伸夫・
 手塚 章
 人文地理学演習 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明
 人文地理学特殊講義Ⅰ 佐々木 博
 人文地理学特殊講義Ⅱ C.バンダメイヤー
 人文地理学特殊講義Ⅲ 大友 篤
 人文地理学野外実験 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明
 地誌学研究法 山本 正三・奥野 隆史・
 斎藤 功
 地誌学演習 奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功・手塚 章
 地誌学特殊講義Ⅲ 竹内 淳彦
 地誌学野外実験 奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功・手塚 章

地理学・水文学特別研究C

山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明

地理学・水文学特別研究D

奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功・手塚 章

1988年度

人文地理学研究法 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明
 人文地理学演習 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明・佐々木 博
 人文地理学特殊講義Ⅰ 佐々木 博
 人文地理学野外実験 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明
 地誌学演習 奥野 隆史・斎藤 功・
 手塚 章
 地誌学研究法 奥野 隆史・手塚 章・
 斎藤 功
 地誌学野外実験 奥野 隆史・佐々木 博・
 斎藤 功・手塚 章
 地理学・水文学特別研究C
 山本 正三・高橋 伸夫・
 田林 明・佐々木 博

地理学・水文学特別研究D

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

統計学Ⅰ

奥野 隆史

1989年度

人文地理学研究法

山本 正三・高橋 伸夫・
田林 明

人文地理学演習

山本 正三・高橋 伸夫・
田林 明・佐々木 博

人文地理学特殊講義Ⅰ

佐々木 博

人文地理学特殊講義Ⅱ

伊藤 達雄

人文地理学野外実験

山本 正三・高橋 伸夫・
田林 明

地誌学研究法

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

地誌学演習

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

地誌学野外実験

奥野 隆史・佐々木 博・
斎藤 功・手塚 章

地理学・水文学特別研究C

山本 正三・高橋 伸夫・
田林 明・佐々木 博

地理学・水文学特別研究D

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

1990年度

人文地理学研究法

山本 正三・高橋 伸夫・
田林 明

人文地理学演習

山本 正三・高橋 伸夫・
田林 明・佐々木 博

人文地理学特殊講義Ⅰ

佐々木 博

人文地理学野外実験

山本 正三・高橋 伸夫・
田林 明

地誌学研究法

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

地誌学演習

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

地誌学特殊講義Ⅲ

篠原 重則

地誌学野外実験

奥野 隆史・佐々木 博・
斎藤 功・手塚 章

地理学・水文学特別研究C

山本 正三・高橋 伸夫・
田林 明・佐々木 博

地理学・水文学特別研究D

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

統計学Ⅰ

奥野 隆史

1991年度

人文地理学研究法

高橋 伸夫・田林 明・
村山 祐司

人文地理学演習

高橋 伸夫・田林 明・
佐々木 博・村山 祐司

人文地理学野外実験

高橋 伸夫・田林 明・
村山 祐司

人文地理学特殊講義Ⅰ

佐々木 博

地誌学研究法

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

地誌学演習

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

地誌学野外実験

奥野 隆史・佐々木 博・
斎藤 功・手塚 章

地理学・水文学特別研究C

高橋 伸夫・田林 明・
村山 祐司・佐々木 博

地理学・水文学特別研究D

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

1992年度

統計学Ⅱ

奥野 隆史

人文地理学研究法

高橋 伸夫・田林 明・
村山 祐司

人文地理学演習

高橋 伸夫・田林 明・
佐々木 博・村山 祐司

人文地理学野外実験

高橋 伸夫・田林 明・
村山 祐司

人文地理学特殊講義Ⅰ

佐々木 博

人文地理学特殊講義Ⅲ

竹内 淳彦

地誌学研究法

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

地誌学演習

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

地誌学野外実験

奥野 隆史・佐々木 博・
斎藤 功・手塚 章

地理学・水文学特別研究C

高橋 伸夫・田林 明・
佐々木 博・村山 祐司

地理学・水文学特別研究D

奥野 隆史・斎藤 功・
手塚 章

1993年度

人文地理学研究法

高橋 伸夫・田林 明・
村山 祐司

人文地理学演習

高橋 伸夫・佐々木 博・
田林 明・村山 祐司

人文地理学野外実験	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司	人文地理学特殊講義Ⅲ 地誌学研究法	林 上 奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章
人文地理学特殊講義Ⅰ 地誌学研究法	佐々木 博 奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章	地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章
地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章	地誌学野外実験	奥野 隆史・斎藤 功・ 佐々木 博・手塚 章・ 巖 勝雄
地誌学野外実験	奥野 隆史・佐々木 博・ 斎藤 功・手塚 章	地誌学特殊講義Ⅲ 地理学・水文学特別研究C	巖 勝雄
地誌学特殊講義Ⅱ 地理学・水文学特別研究C	杉浦 芳夫 高橋 伸夫・佐々木 博・ 田林 明・村山 祐司	地理学・水文学特別研究D	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章
地理学・水文学特別研究D	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章		
1994年度		1996年度	
統計学Ⅱ	奥野 隆史	統計学Ⅲ	村山 祐司
人文地理学研究法	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司	人文地理学研究法	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学演習	高橋 伸夫・佐々木 博・ 田林 明・村山 祐司	人文地理学演習	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学野外実験	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司	人文地理学野外実験	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学特殊講義Ⅰ	佐々木 博	人文地理学特殊講義Ⅲ 地誌学研究法	高阪 宏行 佐々木 博・斎藤 功・ 手塚 章
人文地理学特殊講義Ⅱ	合田 昭二	地誌学演習	佐々木 博・斎藤 功・ 手塚 章
人文地理学特殊講義Ⅲ 地誌学研究法	巖 勝雄 奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章	地誌学野外実験	佐々木 博・斎藤 功・ 手塚 章
地誌学演習	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章	地理学・水文学特別研究C	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
地誌学野外実験	奥野 隆史・斎藤 功・ 佐々木 博・手塚 章	地理学・水文学特別研究D	佐々木 博・斎藤 功・ 手塚 章
地理学・水文学特別研究C	高橋 伸夫・佐々木 博・ 田林 明・村山 祐司		
地理学・水文学特別研究D	奥野 隆史・斎藤 功・ 手塚 章	1997年度	
1995年度		人文地理学研究法	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学研究法	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司	人文地理学演習	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学演習	高橋 伸夫・佐々木 博・ 田林 明・村山 祐司	人文地理学野外実験	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司
人文地理学野外実験	高橋 伸夫・田林 明・ 村山 祐司・巖 勝雄	人文地理学特殊講義Ⅰ 地誌学研究法	小林 浩二 斎藤 功・佐々木 博・ 手塚 章
人文地理学特殊講義Ⅰ	佐々木 博	地誌学演習	斎藤 功・佐々木 博・

地誌学野外実験	手塚 章	
	斎藤 功・佐々木 博・	
	手塚 章	
地理学・水文学特別研究C	高橋 伸夫・田林 明・	
	村山 祐司	
地理学・水文学特別研究D	斎藤 功・佐々木 博・	
	手塚 章	

1998年度

統計学Ⅲ	村山 祐司	
人文地理学研究法	高橋 伸夫・田林 明・	
	村山 祐司	
人文地理学演習	高橋 伸夫・田林 明・	
	村山 祐司	
人文地理学野外実験	高橋 伸夫・田林 明・	
	村山 祐司	
地誌学研究法	斎藤 功・手塚 章	
地誌学演習	斎藤 功・手塚 章	
地誌学野外実験	斎藤 功・手塚 章	
地誌学特殊講義Ⅰ	白坂 蕃	
地理学・水文学特別研究C	高橋 伸夫・田林 明・	
	村山 祐司	
地理学・水文学特別研究D	斎藤 功・手塚 章	

4. 地域研究研究科

1975年度

地域研究論	正井 泰夫
アメリカの地域性と風土	正井 泰夫
ラテン・アメリカの環境と資源	市川 正己
東アジアの地域性と風土	佐々木 博
東アジアの環境と資源	吉野 正敏
ヨーロッパの地域性と風土	佐々木 博

1976年度

地域研究論	佐々木 博
アメリカの地域性と風土	正井 泰夫
地域調査法(1)	正井 泰夫・
	W.フリュヒター
ラテン・アメリカの地域性と風土	山本 正三
ラテン・アメリカの環境と資源	市川 正己・松本 栄次
東アジアの地域性と風土	W.フリュヒター

東アジアの環境と資源	吉野 正敏
東南アジアの地域性と風土	正井 泰夫
地域調査法(2)	佐々木 博・
	W.フリュヒター
ヨーロッパの地域性と風土	佐々木 博・
	W.フリュヒター
日本の地域性と風土	正井 泰夫・
	W.フリュヒター

1977年度

地域研究論	正井 泰夫
アメリカの地域性と風土	正井 泰夫・奥野 隆史
カナダ研究演習(2)	Ross
カナダの地域性と風土	正井 泰夫
カナダの環境と資源	榎根 勇
ラテン・アメリカの環境と資源	市川 正己・松本 栄次
ヨーロッパ研究演習(2)	佐々木 博
ヨーロッパの地域性と風土	佐々木 博
東アジアの地域性と風土	陳 国章
東アジアの環境と資源	陳 国章
東南アジアの地域性と風土	高野 史男
日本の地域性と風土	佐々木 博・高橋 伸夫
地域調査法(1)	佐々木 博
歴史地理の諸問題	菊地 利夫

1978年度

地域研究論	正井 泰夫ほか
カナダ研究概論	Ross
カナダ研究演習(1)	Ross
カナダの地域性と風土	Ross
カナダ研究特論(1)	正井 泰夫
ラテン・アメリカの地域性と風土	松本 栄次・山本 正三
ヨーロッパ研究概論(2)	佐々木 博ほか
ヨーロッパの地域性と風土	佐々木 博
東アジアの地域性と風土	吉野 正敏
東南アジアの地域性と風土	高野 史男
日本研究概論(1)	正井 泰夫ほか
日本の地域性と風土	石井 英也
日本の環境と資源	松本 栄次
地域調査法(1)	正井 泰夫・Gale
歴史地理の諸問題	菊地 利夫

1979年度

地域研究論	正井 泰夫ほか
アメリカ研究概論（2）	正井 泰夫ほか
アメリカの環境と資源	Gale
カナダの文化と社会	正井 泰夫ほか
ラテン・アメリカの地域性と風土	松本 栄次・山本 正三
ヨーロッパ研究概論（2）	佐々木 博
ヨーロッパの環境と資源	佐々木 博
東アジアの地域性と風土	吉野 正敏
地域調査法（1）	正井 泰夫
歴史地理の諸問題	菊地 利夫

1980年度

地域研究論	正井 泰夫・佐々木 博 ほか
アメリカの地域性と風土	Lee・正井 泰夫
アメリカの環境と資源	Lee
カナダの地域性と風土	大竹 一彦
カナダの文化と社会	正井 泰夫
ラテン・アメリカの地域性と風土	山本 正三・松本 栄次
ヨーロッパ研究概論（2）	佐々木 博
ヨーロッパ研究演習（2）	佐々木 博
東アジアの地域性と風土	Lee
日本の地域性と風土	佐々木 博
地域調査法（1）	正井 泰夫・佐々木 博・ Lee

1981年度

比較文化論	川喜田二郎
地域研究論	正井 泰夫
アメリカの地域性と風土	正井 泰夫
カナダの地域性と風土	正井 泰夫
ラテン・アメリカの地域性と風土	山本 正三・松本 栄次
ヨーロッパ研究演習（2）	佐々木 博
ヨーロッパの環境と資源	佐々木 博
東アジアの地域性と風土	正井 泰夫
東南アジアの地域性と風土	ロイ・ケンファー
日本の地域性と風土	佐々木 博
地域調査法（1）	正井 泰夫・佐々木 博

1982年度

地域研究論	正井 泰夫
アメリカの地域性と風土	正井 泰夫
カナダの地域性と風土	正井 泰夫
ラテン・アメリカの地域性と風土	

松本 栄次

ヨーロッパ研究演習（2）	佐々木 博
ヨーロッパの地域性と風土	

佐々木 博

東アジアの環境と資源	正井 泰夫
東南アジアの地域性と風土	

ロイ・ケンファー

日本の地域性と風土	佐々木 博
地域調査法（1）	正井 泰夫・佐々木 博

1983年度

地域研究論	正井 泰夫ほか
カナダの地域性と風土	正井 泰夫
ラテン・アメリカの地域性と風土	

松本 栄次

ヨーロッパ研究演習（2）	佐々木 博
ヨーロッパの地域性と風土	

佐々木 博

東アジアの地域性と風土	正井 泰夫
日本の地域性と風土	正井 泰夫
地域調査法（1）	正井 泰夫・佐々木 博

1984年度

ラテン・アメリカの地域性と風土	
	マリオ平岡
ラテン・アメリカの環境と資源	
	宮坂 四郎
ヨーロッパ研究演習（2）	佐々木 博
ヨーロッパの地域性と風土	

佐々木 博

日本の地域性と風土	佐々木 博
地域調査法（1）	佐々木 博

1985年度

地域研究論	佐々木 博
カナダの資源と風土	田林 明
ラテン・アメリカの地域性と風土	
	マリオ平岡
ラテン・アメリカの環境と資源	
	宮坂 四郎
ヨーロッパの地域性と風土	

佐々木 博

日本の地域性と風土	斎藤 功
地域調査法（1）	佐々木 博・田林 明

1986年度

地域研究論	佐々木 博
アメリカの地域性と風土	矢ヶ崎典隆
ラテン・アメリカの地域性と風土	

松本 栄次
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（１） 佐々木 博

1987年度

地域研究論 佐々木 博
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（１） 佐々木 博

1988年度

地域研究論 佐々木 博
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（２） 佐々木 博

1989年度

地域研究論 佐々木 博
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパ研究概論（２） 佐々木 博
地域調査法（１） 佐々木 博

1990年度

地域研究論 佐々木 博
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（２） 佐々木 博

1991年度

地域研究論 佐々木 博
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（１） 佐々木 博

1992年度

地域研究論 佐々木 博
アメリカ研究演習（１） 中川 正ほか
アメリカの地域性と風土 中川 正
ラテン・アメリカの地域性と風土

松本 栄次
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（２） 佐々木 博・中川 正

1993年度

地域研究論 佐々木 博
アメリカ研究演習（２） 中川 正ほか
アメリカの地域性と風土 中川 正
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパ研究演習（３） 佐々木 博
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（１） 佐々木 博・中川 正

1994年度

地域研究論（１） 佐々木 博
アメリカ研究演習（１） 中川 正ほか
アメリカの地域性と風土 中川 正
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパ研究演習（１） 佐々木 博
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（２） 佐々木 博・中川 正

1995年度

地域研究論（１） 佐々木 博
アメリカ研究演習（２） 中川 正ほか
アメリカの地域性と風土 中川 正
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパ研究演習（３） 佐々木 博
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（１） 佐々木 博・中川 正

1996年度

地域研究論（１） 佐々木 博
カナダの地域性と風土 村山 祐司
ラテン・アメリカの地域性と風土
松本 栄次
ヨーロッパ研究演習（１） 佐々木 博
ヨーロッパの地域性と風土
佐々木 博
地域調査法（２） 佐々木 博・村山 祐司

1997年度

地域研究論（１） 佐々木 博・村山 祐司
 カナダの地域性と風土 村山 祐司
 ラテン・アメリカの地域性と風土 松本 栄次
 ヨーロッパ研究概論（２） 佐々木 博
 ヨーロッパ研究演習（２） 佐々木 博
 ヨーロッパの地域性と風土 手塚 章
 地域調査法（１） 佐々木 博・村山 祐司

1998年度

地域研究論（１） 村山 祐司・手塚 章
 カナダの地域性と風土 村山 祐司
 ラテン・アメリカの地域性と風土 松本 栄次
 ヨーロッパ研究演習（３） 手塚 章
 ヨーロッパの地域性と風土 手塚 章
 地域調査法（２） 手塚 章・村山 祐司

5. 教育研究科（教科教育専攻社会科教育コース地理的分野）

1979年度

社会科教育学 朝倉隆太郎
 地理教育論 朝倉隆太郎
 地理学演習 関口 武
 地理学野外実験 高野 史男

1980年度

社会科教育学 朝倉隆太郎
 地理教育論 朝倉隆太郎
 地理学特講 関口 武
 地域調査法 正井 泰夫
 地理学野外実験 山本 正三
 地理教育研究法 山本 正三・正井 泰夫・朝倉隆太郎・関口 武

1981年度

社会科教育学 朝倉隆太郎
 地理教育論 朝倉隆太郎
 人文地理学特講 佐々木 博
 地理学演習 正井 泰夫
 地理学野外実験 山本 正三
 地理教育研究法 佐々木 博・山本 正三・正井 泰夫・朝倉隆太郎

1982年度

社会科教育学 朝倉隆太郎

地理教育論
 地理学特講
 地理学野外実験
 自然地理学特講
 地誌学特講
 地域調査法
 地理教育研究法

1983年度

社会科教育学
 地理教育論
 地理学演習
 地理学野外実験
 自然地理学特講
 人文地理学特講
 地理教育研究法

1984年度

社会科教育学
 地理教育論
 地理学特講
 地理学野外実験
 自然地理学特講
 人文地理学特講
 地誌学特講
 地域調査法
 地理教育研究法

1985年度

地理学特講
 地理学演習
 地理学野外実験

自然地理学特講
 人文地理学特講
 地域調査法
 地理教育研究法

1986年度

地理学特講
 地理学演習

朝倉隆太郎
 正井 泰夫
 山本 正三・石井 英也
 小野 有五・河村 武
 佐々木 博
 正井 泰夫・佐々木 博
 朝倉隆太郎・山本 正三・正井 泰夫・佐々木 博

朝倉隆太郎
 朝倉隆太郎
 正井 泰夫
 山本 正三・石井 英也
 西澤 利栄・猪郷 久義
 佐々木 博
 朝倉隆太郎・山本 正三・正井 泰夫・西澤 利栄・佐々木 博

朝倉隆太郎
 朝倉隆太郎
 池田 宏・手塚 章
 山本 正三・石井 英也・西澤 利栄・手塚 章
 西澤 利栄・池田 宏
 佐々木 博
 西澤 利栄
 西澤 利栄・山本 正三・朝倉隆太郎・山本 正三・正井 泰夫・西澤 利栄・佐々木 博

池田 宏・手塚 章
 西澤 利栄
 山本 正三・石井 英也・西澤 利栄・手塚 章・池田 宏
 西澤 利栄・池田 宏
 佐々木 博
 西澤 利栄・山本 正三・山本 正三・西澤 利栄・佐々木 博

池田 宏・手塚 章
 西澤 利栄

地理学野外実験	山本 正三・石井 英也・ 西澤 利栄・手塚 章・ 池田 宏	地誌学特講 地域調査法 地理教育研究法	西澤 利栄 西澤 利栄・山本 正三 篠原 昭雄・西澤 利栄・ 山本 正三・石井 英也・ 手塚 章
自然地理学特講	西澤 利栄・池田 宏		
人文地理学特講	佐々木 博		
地誌学特講	C. バンダメイヤー		
地域調査法	西澤 利栄・山本 正三	1990年度	
地理教育研究法	山本 正三・西澤 利栄・ 佐々木 博	地理教育論 「現代社会」教育特論 地理学特講 地理学野外実験	篠原 昭雄 篠原 昭雄ほか 池田 宏・手塚 章 山本 正三・西澤 利栄・ 石井 英也・池田 宏・ 手塚 章 西澤 利栄・池田 宏 佐々木 博 西澤 利栄 西澤 利栄・山本 正三 篠原 昭雄・西澤 利栄・ 山本 正三・池田 宏・ 手塚 章
1987年度		自然地理学特講 人文地理学特講 地誌学特講 地域調査法 地理教育研究法	
地理教育論	篠原 昭雄		
国際理解教育論	篠原 昭雄		
地理学特講	池田 宏・手塚 章		
地理学演習	西澤 利栄		
地理学野外実験	山本 正三・石井 英也・ 西澤 利栄・手塚 章・ 池田 宏		
自然地理学特講	西澤 利栄・池田 宏		
人文地理学特講	佐々木 博		
地誌学特講	C. バンダメイヤー		
地域調査法	西澤 利栄・山本 正三	1991年度	
地理教育研究法	西澤 利栄・山本 正三・ 石井 英也・手塚 章	地理教育論 「現代社会」教育特論 地理学特講 地理学野外実験	篠原 昭雄ほか 篠原 昭雄 池田 宏・手塚 章 西澤 利栄・石井 英也・ 池田 宏・手塚 章 西澤 利栄・池田 宏 佐々木 博 西澤 利栄ほか 篠原 昭雄・西澤 利栄・ 池田 宏・手塚 章 篠原 昭雄 篠原 昭雄
1988年度		自然地理学特講 人文地理学特講 地域調査法 地理教育研究法Ⅰ 地理教育研究法Ⅱ 地理教育演習	
地理教育論	篠原 昭雄		
国際理解教育論	篠原 昭雄		
地理学特講	池田 宏・手塚 章		
地理学野外実験	山本 正三・西澤 利栄・ 石井 英也・池田 宏・ 手塚 章		
自然地理学特講	西澤 利栄・池田 宏		
人文地理学特講	佐々木 博		
地誌学特講	西澤 利栄		
地域調査法	西澤 利栄・山本 正三		
地理教育研究法	篠原 昭雄・西澤 利栄・ 山本 正三・石井 英也・ 手塚 章		
1989年度		1992年度	
地理教育論	篠原 昭雄	地理教育論	篠原 昭雄
「現代社会」教育特論	篠原 昭雄	中等社会科教育学特論	篠原 昭雄ほか
地理学特講	池田 宏・手塚 章	地理学特講	池田 宏・手塚 章
地理学野外実験	山本 正三・西澤 利栄・ 石井 英也・池田 宏・ 手塚 章	地理学野外実験	池田 宏・斎藤 功
自然地理学特講	西澤 利栄・池田 宏	自然地理学特講	池田 宏
人文地理学特講	佐々木 博	人文地理学特講	佐々木 博
		地理教育研究法Ⅰ	篠原 昭雄・池田 宏・ 斎藤 功
1993年度		1993年度	
地理教育論	篠原 昭雄	地理教育論	篠原 昭雄
中等社会科教育学特講	篠原 昭雄ほか	中等社会科教育学特講	篠原 昭雄ほか
地理学演習	鈴木 裕一・手塚 章	地理学演習	鈴木 裕一・手塚 章

地理学野外実験 池田 宏・斎藤 功
 自然地理学特講 松本 栄次・鈴木 裕一
 人文地理学特講 佐々木 博
 地域調査法 池田 宏・斎藤 功
 地理教育研究法Ⅰ 篠原 昭雄・松本 栄次・斎藤 功

1994年度

地理学特講 鈴木 裕一・手塚 章
 地理学野外実験 池田 宏・斎藤 功・鈴木 裕一・松本 栄次
 自然地理学特講 松本 栄次・鈴木 裕一
 地誌学特講 斎藤 功・田林 明
 地域調査法 池田 宏・斎藤 功・鈴木 裕一
 地理教育研究法Ⅰ 松本 栄次・斎藤 功ほか

1995年度

地理教育論 井田 仁康
 中等社会科教育学特講 井田 仁康ほか
 地理学演習 手塚 章・井田 仁康
 地理学野外実験 斎藤 功・池田 宏・田林 明・鈴木 裕一
 自然地理学特講 鈴木 裕一
 人文地理学特講 斎藤 功・田林 明・井田 仁康
 地域調査法 池田 宏・田林 明・鈴木 裕一
 地理教育研究法Ⅰ 斎藤 功・池田 宏・田林 明・松本 栄次・手塚 章・鈴木 裕一・井田 仁康

1996年度

地理歴史科教育学 井田 仁康ほか
 中等社会科教育学特講 井田 仁康ほか
 地理学特講 井田 仁康・手塚 章
 地理学野外実験 斎藤 功・池田 宏・田林 明・鈴木 裕一・井田 仁康
 自然地理学特講 鈴木 裕一
 地誌学特講 斎藤 功・田林 明・井田 仁康
 地域調査法 池田 宏・田林 明・鈴木 裕一

地理教育論 井田 仁康・西脇 保幸
 地理教育研究法Ⅰ 斎藤 功・池田 宏・田林 明・松本 栄次・手塚 章・鈴木 裕一・井田 仁康

1997年度

地理歴史科教育学 井田 仁康ほか
 中等社会科教育学特講 井田 仁康ほか
 地理学演習 井田 仁康・斎藤 功・手塚 章
 地理教育論 櫻井 明久・井田 仁康
 地理学野外実験 池田 宏・田林 明・手塚 章・鈴木 裕一・井田 仁康
 自然地理学特講 鈴木 裕一
 人文地理学特講 田林 明・手塚 章・井田 仁康
 地域調査法 池田 宏・田林 明・鈴木 裕一
 地理教育研究法Ⅰ 斎藤 功・池田 宏・田林 明・松本 栄次・手塚 章・鈴木 裕一・井田 仁康
 地理教育研究法Ⅱ 田林 明
 地理教育演習 田林 明

1998年度

地理歴史科教育学 井田 仁康ほか
 中等社会科教育学特講 井田 仁康ほか
 地理学特講 斎藤 功・森本 健弘・井田 仁康
 地理教育論 渋谷 文隆・井田 仁康
 地理学野外実験 斎藤 功・池田 宏・田林 明・井田 仁康・森本 健弘
 自然地理学特講 鈴木 裕一
 地誌学特講 井田 仁康・斎藤 功・田林 明
 地域調査法 池田 宏・田林 明・森本 健弘
 地理教育研究法Ⅰ 斎藤 功・池田 宏・田林 明・松本 栄次・森本 健弘・井田 仁康
 地理教育研究法Ⅱ 田林 明
 地理教育演習 田林 明

Ⅳ－２ 卒業論文および進路の一覧

１．自然学類

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1977	安藤 伸子	新潟県見附市および栃尾市における農家の就業構造	東京成徳学園→新潟県教員
	高地 敬	地域の組織からみた地域の性格 ― 茨城県新治郡桜村妻木地区を事例として ―	
	代田 和年	土浦市中城通り商店街における商店業種の推移よりみた地域の変化	群馬県教員
	村木 徳一	交通事故の地理学的研究 ― 土浦市を例として ―	日本道路公団
	和田 雅之	居住地域周辺のメンタルマップ形成について ― 大学生を事例として ―	地球科学研究科→自営業
1978	井関 俊輔	新潟県内人口移動の因子生態	環境科学研究科
	伊藤 悟	茨城県北部における自動車交通流の分析	地球科学研究科→金沢大学
	梅内 康博	北海道における交通流動と都市特性の関係およびその変化	教育研究科→桐蔭学園
	数野 昭仁	新潟市における公害問題	山梨県庁
	菊地 俊夫	アメリカ合衆国における都市地理学および都市研究の展望	地球科学研究科→東京都立大学
	木本 輝生	ソ連邦における経済地域の概念	藤和不動産
	栗又 衛	茨城県南東部における藩政村の地理的性格	茨城県教員
	杉野 光明	長野県における機能・結節地域	環境科学研究科→自営業
	吉田 康徳	茨城県における労働力移動とその経年的変化	教育研究科→埼玉県教員
1979	石川 直美	九州地方における都市の発展に関する研究	医学研究所→主婦
	石沢 宏	観光農園の地理学的考察 ― 茨城県千代田村と山梨県一宮町を例として ―	環境科学研究科→東京荒川区役所
	越智 偉	茨城県県南・県西地域における道路網の変容	藤井学園高校→塾経営
	後安 学	土浦市における駐車場の分布と成立要因	すかいらーく本店→自営業
	笹谷 康之	筑波研究学園都市における景観の類型化と選好に関する研究	環境科学研究科→地域開発研→立命館大学
	篠原 敏章	茨城県出島村における人口変動の地域性	東急不動産
	山崎栄一郎	人口の社会的・経済的要因からみた岡山県の地域類型	東京放送
1980	石原 孝一	関東地方における都市の成長に関する研究	マルマン
	大関 泰宏	都市内人口移動の空間的拡散分析	地球科学研究科→文部省
	角海 紀雄	栃木県かんびょう生産地域における農業経営 ― 上三川町下多功下坪地区の事例 ―	教育研究科→栃木県教員
	佐々木 啓	盛岡市における喫茶店の立地および営業形態に関する研究	岩手県教員

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1980	繁樹 義一	土浦市における医療圏の構造	藤井学園高校→愛媛県教員
	藤本 正俊	東京都千代田区における高層建築物の垂直的機能分化	日本交通公社
1981	青木 弘之	主婦による日々の生活移動の特性 — 栃木県壬生町壬生地区を事例として —	環境科学研究科→長銀システム開発
	阿南 崇	長野県菅平における通年営業民宿の発展	教育研究科→慶応義塾高校
	石掛 英俊	茨城県における機能地域構造に関する研究	
	井田 仁康	日本における国内航空旅客流動とその発生要因	地球科学研究科→筑波大学
	小柳 尚	横浜市における因子生態の研究	福島県庁→中央大学
	高沢 美子	栃木県東部におけるゴルフ場の利用圏	オリエンタルモーターズ→主婦
	古田 辰也	南房総における花卉栽培地域の動向 — カーネーション栽培を事例として —	独協埼玉高校
1982	加藤 虎雄	養殖業の導入に伴う宇和海漁業の変貌	海外青年協力隊→学研
	福井 和弘	茨城県旭村におけるメロン産地の形成と発展	岐阜県教員
	丸山 浩明	浅間山麓南西斜面における農業の空間構造	地球科学研究科→金沢大学
	宮本 明	石下町における在来工業と近代工業の存立基盤	茨城県教員
	山下 宗利	大阪市都心部における土地利用の垂直的機能分化に関する研究	地球科学研究科→佐賀大学
	山本 照男	茨城県牛久町における宅地開発の進展と住宅団地の特性	損害保険料率算定会
	山本 充	奥会津の山村館岩村における生活形態の変化 — 水引集落を中心として —	地球科学研究科→埼玉大学
1983	天野 真哉	広島県五日市町における集団住宅地入居者に関する分析	教育研究科→広島県教員
	安藤 俊彦	郡山市中心部における小売・サービス業の立地に関する地理学的考察	さが美→自営業
	小林 岳人	神奈川県におけるバス旅客の交通圏	教育研究科→千葉県教員
	鈴木 常泰	茨城県豊里町における消費者買物行動に関する地理学的研究	茨城県庁
	宮原 弘匡	東京都江戸川区における緑地空間の変遷と分布特性	教育研究科→長野県教員
	八野 雅弘	丹後・加悦町の絹織物業の地域的展開	兵庫県庁
1984	遠藤 広幸	米沢市における和牛飼養の地域的展開	
	近藤 寛	神奈川県における原動機付自転車の普及過程	第一勧業銀行
	八尾 直樹	郊外型レストランの地理学的研究 — 千葉県松戸市を事例として —	アメリカンファミリー生命

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1985	穴澤 孝雄	土地利用形態からみた土浦学園線沿線地域の地理学的研究	香川県庁
	廣瀬 康豊	加入電話の分布に関する地理学的研究	丸井→福武書店
	森本 健弘	茨城県八千代町の陸田の転換に伴う農業経営の変化	地球科学研究科→筑波大学
	山澤 正	横浜駅前地区における地下空間の地理学的研究	住宅・都市整備公団
	山下 潤	地理学における人文主義的アプローチに関する展望	地球科学研究科→長崎大学
	許 衛東	中国・海南島南東部の丘陵地における熱帯作物栽培の地理学的研究	大阪外国語大学
1986	市川 盛和	横浜市神奈川区大口商店街の内部構造	桐蔭学園高校
	伊藤 英樹	横浜市における緑地の分布と変容に関する地理学的研究	藤和不動産
	今井 理恵	筑波研究学園都市における主婦の生活行動 — 並木・上大角豆地区を事例として —	群馬県教員
	呉羽 正昭	長野県高山村における観光地域の地理学的研究	地球科学研究科→愛媛大学
	小林 陽子	茨城県における教育機会の地域的差異	教育研究科→大妻多摩高校
	森 まり子	東北地方における女性労働力の産業構成に関する地理学的研究	日本商工会議所
1987	植木 勲	新潟県松代町における出稼ぎの地理学的研究	新潟県教員
	金子 早苗	都市化に伴う荒川下流高水敷の利用の変遷と現状	埼玉県教員
	桜井 隆之	茨城県八郷町における果樹栽培の地域的特性	土浦日大高校
	佐藤かつ江	茨城県利根町の宅地開発にともなう農業経営の変化	オリエンタルモータース
	塚越 美江	京葉臨海埋立地における土地利用構造	群馬県教員
	三橋 浩志	茨城県真壁町における石材加工業の生産構造	教育研究科→日本総合研究所
1988	井 理史	京都市における鉄道端末交通からみた京都市の駅勢圏構造	京都市役所
	稲葉 晴伸	静岡県浜松市における住宅地の発展過程	静岡県庁
	植木 玲一	茨城県における酒造業の地域的展開	川越東高校
	篠崎 佳之	栃木県小山市におけるモータリゼーションに伴う中心市街地の変容	栃木都市計画センター
	長 佐知子	茨城県における高等学校への通学構造	教育研究科→海外青年協力隊
	永谷 真一	世帯の社会的属性と買物行動の関係	科学教育研究会
	芳賀 博文	東京都中心部における高層ビルの立地特性	地球科学研究科
	林 秀司	福岡県立花町におけるキウイフルーツ栽培の普及過程	地球科学研究科→九州大学

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1988	平野 聡	コンテナリゼーションを通じた横浜港の地理学的研究	環境科学研究科
	水越 卓治	バス交通ネットワークからみた東京東部における結節体系	聖徳学園高校
	山本 一彦	パーソントリップ流動からみた茨城県日立市の地域構造	環境科学研究科→北海道開発コンサルタント
	山本 高史	山梨県竜王町における住宅地化の地理学的研究	山梨県庁
1989	瀬尾英一郎	東京都における市街地再開発事業の展開とその地域的性格	ホンダ技研→
	高山 岳久	関東地方における交通事故の地理学的研究	東京電力
	高橋 英夫	新東京国際空港開設に伴う隣接地域の変容 — 新空港自動車道周辺を中心に —	東京電力
	田中 直人	福井県若狭湾沿岸地域における観光地域の形成	バイオニア
	濱里 正史	沖縄県における離島間定期交通の地理学的研究	地球科学研究科→筑波大学
	堀内 俊樹	工場の進出に伴う辰野町の農村地域の変貌	辰野信用金庫
1990	飯田 博之	小売店の郊外への出店形態に関する地理学的研究 — 浜松市の事例 —	静岡県教員
	尾崎 正仁	山梨県芦安村における転出者の属性とその移動要因	教育研究科→山梨県教員
	鹿嶋 洋	IC工業の生産体制と空間構造 — 大分県・東芝大分グループの事例 —	地球科学研究科→三重大学
	川田 徹	日本における輸送機関別にみた地域的貨物流動パターン	山形市役所
	小池 健一	東京大都市圏周辺部における土地利用構造 — 埼玉県志木市の事例 —	ファイナルリサーチ
	側島 康子	茨城県つくば市大字栗原における農業的土地利用の変化	地球科学研究科→東京学芸大学
	田村 美香	北海道別海町野付地区における資源管理型漁業の地理学的研究	北海道放送
1991	飯田 太	大手スーパーの自社配送センターの立地と配送に関する地理学的研究 — 関東地方の事例 —	千葉県教員
	淡河 嫩子	横浜港の公共埠頭における輸入青果物の流動	富士銀行
	谷本 美穂	ファミリーレストランの立地動向	NEC
	本間有希子	横手市における市街地の発達過程	愛国学園附属高校
	正清 純子	児童の世界認識に関する地理学的研究	オーグス総研
	松重 恵介	竜ヶ崎ニュータウン北竜台地区居住者の住居移動	計量計画研究所

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1991	吉田 賢司	青森空港における航空貨物に関する地理学的研究	環境管理センター
	吉田 英彦	ハンターマウンテンスキーボウル塩原の立地と その特徴	STT 開発
1992	新井 智善	日本における新電話通信ネットワークのシミュレーション分析	QUICK & ENICOM システムズ
	金井 克悟	新宿駅周辺地区における地下空間の特徴	藤和不動産
	小口 正之	茨城県石岡市における埋葬の分布からみた地域特性	常陽銀行
	田島 寛之	神奈川県相模原市におけるパーソントリップ流動と地域の社会的・経済的属性との相互関連性	小田急電鉄
	広田 藤太	鎌倉駅東口商店街の内部構造	日本旅行
	藤田 聖二	京都府における郵便輸送ネットワークの形成	日本道路公団
	渡辺 純	大都市圏周辺部におけるコンビニエンスストアの立地に関する考察 — 茨城県つくば市・埼玉県春日部市を事例として —	富士通 BSC
	西本 勇	ヨルダンにおける農業生産と農産物の輸出入	広商事
1993	相川 泰行	鹿島港における飼料コンビナートの形成	日立市役所
	稲垣 亘弘	茨城県つくば市および土浦市における大学生の距離・方向認知	K 工房
	岩田 健司	群馬県草津町における観光地の変容	国土計画
	江口 勇次	国会における内閣総理大臣演説の政治地理学的考察, 1947~91年	
	大橋 重夫	滋賀県大中の湖干拓地における協業体農業	公共計画研究所
	荻田 匡嗣	明治期以降の三重県における中心地システムの変容	
	小塚 良子	日本における食嗜好の地域性	つくばソフトウェアリング
	佐々木喜一郎	東京大都市圏における犯罪発生の分布パターンとその発生要因	東洋情報システム
	菅 陽子	広島市におけるコンビニエンスストアの立地に関する一考察	地域研究研究科
	塚本順一郎	千葉県鎌ヶ谷市における住宅地の形成	千葉県庁
	鳥取美千恵	ヨーロッパとアジアの国歌にみられる地域的差異	薬事日報社
	中川 勝弘	徳島県上板地方における和三盆糖生産地域の研究	
	仁平 尊明	茨城県友部町における花き園芸の存立基盤	地球科学研究科

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1993	福井 朋美	北海道における官公署立地からみた都市の階層構造	教育研究科→北海道教員
	藤原 則夫	東京都心部における外国金融機関の立地特性	第一生命保険相互会社
	本間 剛	大都市圏における新聞配布に関する地理学的研究	朝日テクノ
	丸山 泰弘	新潟県柏崎刈羽原子力発電所の立地に伴う地域の変容	武蔵工業大学附属信州工業高校
	森口 聡美	柏駅東口商業地域の内部構造とその変容	茨城県庁
	安田 育子	東京23区における可燃ごみ・分別ごみの収集圏	横浜市役所
	田中 宏樹	産業別通勤流動の推定と通勤流動集中問題に対する改善策の検討 ―京浜大都市圏について―	日本通運
	長尾 欣亮	日本におけるサッカーからみた地域差に関する一考察	西武百貨店
1994	桑原 知子	つくば市における大学生の生活行動	帝国書院
	小林 篤史	関東地方における公共図書館の地域的差異	中央出版
	櫻井 誠	東京都および茨城県における外国人居住者の地域的分布	地球科学研究科→アルク
	城地 俊任	世界的都市群システムの形成に関する地理学的研究 ―航空交通を指標として―	サイゼリア
	中村 匡輝	わが国における結核発生の地域的差異とその変容	教育研究科→明治学園高
	平井 誠	中国地方における市町村間人口移動の構造	地球科学研究科
	山本 良介	世田谷区二子玉川の再開発の進展	サークル K・ジャパン
	大田 久人	茨城県つくば市における産直農家の農業経営	
	佐藤 覚	駅構内の看板広告からみた小田原の地域像	郵政省
	初澤 克洋	千葉県白子町・中里地区におけるテニス民宿地域の形成	ビーシステム
1995	神坂 卓志	関東地方におけるスーパーマーケットの立地展開	英会話学校講師
	滝 隆一郎	横須賀市中心商業地域の内部構造	日産火災海上保険
	宇川 裕一	茨城県里美村七反・岡見集落における生産活動と社会組織	三井物産林業
	高橋 勝	地方航空の国際化に関する地理学的研究	インテック
	高木 善行	裏磐梯におけるスキー観光地域の形成	
	田中 豪一	土浦市における居住環境の空間構造	教育研究科→茨城県教員
	松本 恵	明治・大正期における東京西部の土地利用に関する考察	
	山崎 統	柏市における小学校通学区域の変遷と地域差	新潟県教員

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1995	吉岡 未来	永井荷風「すみだ川」における景観と場所のイメージ	
	川村 昭彦	農地転用による土地利用と土地所有の変容過程 — 岩手県盛岡市近郊を事例として —	環境科学研究科→帝国書院
1996	新井 良平	日本における民間放送テレビ局の番組ネットワークからみた情報の地域構造	三井ホーム
	今村 倫子	食品を通してみる場所イメージに関する研究 — 茨城県つくば市を事例として —	昭文社
	神山慎一郎	日系企業のマレーシア進出における立地展開	第一勧業銀行
	黒川 伸也	鹿角市における観光資源の活用	トヨタカローラ秋田
	佐藤 大祐	伊豆半島松崎町雲見における集落の持続的性格	地球科学研究科
	鹿野 広己	上場企業の企業行動にみる金融の地域特性	ディ・エス・ケイ
	高井健太郎	東京大都市圏における人口移動の地域構造	環境科学研究科→浜松市役所
	田島 教次	相模原市における商店街の業種構成とその変化	
	田中 耕市	自動車交通アクセシビリティ変化の評価モデルに関する研究 — 東北地方を事例として —	地球科学研究科
	牧野 眞司	近年の岡崎市における地価分布からみた地域構造の変化	玉野総合コンサルタント
	渡辺 秀之	奈良市住民の居住地選好に関する研究	帝国書院
	竹田真由美	茨城県ひたちなか市におけるコンビニエンスストアの立地展開	
1997	大平 真	茨城県美浦村における住民の就業特性	イノアックコーポレーション
	佐々木龍高	秋田市における大型店舗の立地と商業地域構造	秋田銀行
	志村 信幸	東京大都市圏における大学生の生活行動	地球科学研究科
	山下亜紀郎	金沢市中心地区の居住地域構造	地球科学研究科
	桜井 康一	宮城県利府町におけるナシ栽培の展開と維持要因	日本交通公社
	白木 信彦	離島における農業経営の特性 — 東京都小笠原村父島を事例として —	昭文社
	照井 進	岩手県石鳥谷町におけるりんどう栽培の展開	川徳
	小長 和宏	九州における国際観光の地域的展開	大分県教員
	樋口 正樹	旅行パンフレットからみた場所のイメージ差異	富士通ソーシャルシステムエンジニアリング
	小原 幸人	東京大都市圏における劇場利用の地区別性格に関する研究	
	後藤 芳春	国内航空ネットワークの変化	
	首頭 一広	オフィス機能の郊外分散に関する地理学的研究	富士通情報通信システムズ

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1997	岩田 邦宏	カナダにおける日系企業の立地変化	プライスウォーターハウス コンサルタント
	小半 晃己	松戸市に居住する高齢者の居住環境に対する意識	北海道庁
	日向 大樹	近接性からみた山形市における生活環境分析	羽黒町農協
	美濃部 篤	宅配便システムに関する地理学的研究	地球科学研究科
	川村 直貴	日本における音楽の選好の地域差と空間的拡散の研究	図研
	九頭見 晃	茨城県における通勤圏の地理学的研究	第一生命保険相互会社
	曾山 智弘	京浜地域におけるソフトウェア産業の立地展開	リードレックス
	千原 泉子	文学作品の地理学的解釈の試み ― 宮本輝「蜚川」の舞台・富山を事例にして―	自営業
1998	五十嵐 剛	東京都における楽器小売店の立地に関する地理学的研究	
	岩成 潤	関東・東北地方における日刊紙購読の地域的差異	
	大江 直輔	関東地方における認知地図の相対的歪みとその傾向 ― 筑波大学生の認知地図分析から ―	環境科学研究科
	大住慎一郎	中国における自動車産業の発展	中央出版
	小松 誠幸	日本における人口移動の時空間構造	
	佐々木 緑	過疎化山村における住民の生活行動 ― 岩手県玉山村藪川地区を事例として ―	地球科学研究科
	佐藤 竜太	日本における乗用車販売台数の地域的傾向	東京海上システム開発
	中島 卓朗	関東地方における通勤流動パターンの変容	
	植原 一雅	衣料品小売店の特性からみた広域中心都市の差異	
	畑山 貴宏	つくば市における青果物の販売と流通	環境科学研究科
	福田 和雄	東京大都市圏における郊外核の特性	地球科学研究科
	三木 健志	日本における高校野球に関する地理学的考察	
	村上 博彦	岩手県における若者の方言使用に関する一考察	

2. 比較文化学類

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1978	大八木智一	ドイツ連邦共和国における人口集積の地域的展開	地球科学研究科→三菱総合研究所
	柿沼 俊雄	新座市における市街地化と農家の対応形態 ― とくに「線引き」との関連で ―	埼玉県庁
	北須賀逸雄	旧軍用資産の転用による工業地域の形成過程	愛媛県教員

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1978	小池 隆俊	材料・用途からみたわが国の家屋型の分布パターン	日本放送協会
	小宮 正美	宇都宮市およびその周辺部にみられる石造建築物の立地過程 — 民家の文化地理学的考察 —	帝国書院
	矢沢 要輔	長野県における通勤・通学圏の研究	長野県教員
	山野辺雅久	茨城県における栗栽培地域の研究 — 千代田村を例として —	福島県庁
1979	市橋 幸夫	フィリッピンにおける「緑の革命」についての考察	警視庁
	妹岡 郁枝	離島問題と離島振興政策	日本道路
	上田 雅子	The Cultural Point of View in American Geography	地域研究研究科→富山県教員
	尾崎 浩司	土浦市における市街地の景観的地域分化	富士通
	加賀美雅弘	医学地理学の確立とその方法論的考察	地球科学研究科→東京学芸大教育学部
	柏 雄司	「陸田」の地域的展開に関する一考察 — 豊里町の場合 —	茨城県教員
	門脇 直人	わが国における宿泊観光地域の拡大に関する一考察	近畿日本ツーリスト
	菅野 光裕	シンガポールにおける輸出指向工業化	福島県教員
	栗原 茂夫	九十九里浜における民宿地域の形成と変容	日本交通公社
	清水 高史	東京区部における緑地空間の変容に関する一考察	埼玉県教員
	鈴木 正子	勝沼町における観光果樹地域の形成	前川製作所
	田井中秀公	常磐線沿線の都市化の進展 — 松戸市と取手市の住宅地開発を例として —	三越
	中川 正	家庭電力消費に関する地理学的研究	地球科学研究科→三重大学人文学部
	根本 勉	茨城県における食肉加工資本の進出と養豚業の地域的変容	千葉県教員
	松永 陽子	佐久地方の電気機械工業における労働力の地域的展開	教育研究科→主婦
1980	小林 滋	東京区部における「ミニ開発」に関する一考察	教育研究科→慶応大学付属高校
	西村 謙治	函館市銀座における「火防線建築」の機能変化	写研
	村越 弘	那須野ヶ原における酪農の発展とその要因について	栃木県教員
	森川 祐司	真壁石材業の地域的展開	ミサワホーム

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1981	植嶋 卓巳	関東地方における農業の空間構造 — メッシュデータによる土地生産性の分析 —	国際協力事業団
	川原 牧子	水田酪農地域の形成 — 茨城県東村本新島開発の事例 —	東京都教員
	原沢 正彦	鐺川流域におけるコンニャク芋栽培の地域的展開	埼玉銀行
	星 紳一	消費者買物行動の空間的パターン — 茨城県茎崎村を事例として —	横河ヒューレットパッカード
	依田 誠	甲府バイパスにおける商業地区の成立と機能	三菱商事
	脇坂 晴久	宮城県亘理町における水稲作の展開	宮城県教員
	渡辺 敦子	東京都台東区における人口構造の変化	教育研究科→東京都教員
1982	中口 毅博	静岡県市街地における商業・サービス業の分布と地域構造	社会調査研究所→埼玉大(非)
	服部 誠	山村における親類結合の変貌に関する一考察 — 岐阜県上石津町時山の事例 —	愛知県教員
	林 俊樹	千葉県袖ヶ浦町における市街地化にともなう農家の対応	ジェネラルプランニング
1983	篠原 秀一	臨海集落の地域性に関する一考察 — 三浦半島西岸長井の事例 —	地球科学研究科→秋田大学教育学部
	高橋 広道	北海道における農業地域の特性に関する一考察 — 帯広市の場合 —	藤和不動産
	椿 真智子	駿州清水を中心とする和糖生産の歴史地理学的研究	歴史人類学研究科→東京学芸大教育学部
	長谷川 恵	都市再開発が都市構造に与えた影響 — 新潟市万代シティを例として —	オリエンタルモータース→(株)CRC 総合研究所
1984	秋本 弘章	関東地方の農業地域構造	埼玉県教員→東京学芸大学付属高校
	安部 憲文	米子市街地における小売業・サービス業の分布とその変化	教育研究科→長野県教員
	多田 弘敏	長野県小布施地方における栗加工業	長野県教員
	細川きよ美	福井市における住宅地域の形成	福井県立病院→主婦
	望月久美子	山梨県勝沼町におけるワインの消費構造	山梨県教員→主婦
1985	小笠原恵美子	ブラジル・アマゾンの開発	フジテレビ
	行徳 尚文	観光地化現象にともなう地域社会の変貌 — 式根島を例として —	日本交通公社
	小林 和夫	ブナ帯山村における生業と利用空間の変貌過程 — 秋田県鳥海町百宅の事例 —	教育研究科→日本ネグロス・キャンペーン
	島田 洋子	カナダ・カルガリー市の形成と構造	日本交通公社

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1985	常見 佳代	スペインにおける国内人口移動とその地域的特徴	社会工学研究所
	牧野 健宏	生活環境特性と居住者の属性からみた名古屋市の居住地域構造	国際協力サービスセンター →神奈川県教員
	松岡 道子	備讃瀬戸走り島における生業形態とその存立基盤	日本交通公社
1986	石井 久生	メキシコ市の都市発展と不法占拠地区	地域研究研究科→共立女子大
	杉野 智仁	桜村における小売商業地域の形成	名古屋鉄道
	須山 聡	丘陵地農村における就業構造の変遷 — 富山県氷見市久米地区の事例 —	地球科学研究科→駒澤大学
	東野 直行	群馬県草津温泉集落の地域構造とその形成要因	日本放送協会
	長沼由希子	アメリカ合衆国東部大都市におけるジェントリフィケーション	リクルート
	西尾 幸代	鬼怒川中流域における土地改良の進展 — 飯沼川沿岸地域と八間堀川沿岸地域を比較して —	筑波大学研究生→主婦
	福原 由紀	ブラジル北東部・ペルナンブーコ州における農業的土地利用の地域的パターン	インテルジャパン
1987	秋丸 直美	ファミリーレストランの地理学的研究 — 横浜市を事例として —	茨城県庁
	浦部 浩之	農村部における新聞配布・講読に関する地理学的研究 — 茨城県八郷町の事例 —	地域研究研究科→国際政治学研究科
	小川 雄二	千葉県手賀沼周辺地域における農業的土地利用の変化	千葉県庁
	今田 隆徳	出島村における農業水利の地域構造	山形県教員
	近藤 健	アメリカ合衆国南西部諸都市におけるヒスパニックの分布とその要因に関する研究	ソニブラトラベル
	山口 慶子	インドネシアにおける森林減少の構造	国際文化教育センター
	橘 健一	ネパール農村地域における生活形態と土地利用 — カスキ地区ベグナス村を事例として —	環境科学研究科→
1988	相澤 直幹	都市化地域における生活組織と生活行動 — 千葉県市川市の事例 —	千葉県教員
	天谷 健一	宇都宮市における商業地域構造	足利銀行
	石井 光彦	香川県丸亀平野における農村変容の類型に関する研究	東京海上火災
	佐々木康宏	秋田県における清酒流通構造の地理学的研究	秋田銀行
	平 誠司	ペルーにおける漁港の地域的特性	地域研究研究科→いのちの ことば社
	平川 陽子	日本からブラジルへの出移民に関する研究	東京カレン

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1988	吉村 忠晴	浜松市における住民行動からみた地域構造の解明	地球科学研究科→国立福島高専
	脇 礼子	神奈川県平塚市における中心商店街の地理学的研究	教育研究科→主婦
1989	出水田智子	つくば市洞下集落の景観構造	環境科学研究科→社会工学研究科
	小崎 哲生	静岡県韮山町におけるいちご栽培地域の形成に関する地理学的研究	静岡県教員
	甲斐 譲二	常磐自動車道の開通に伴う地域の変容 — 土浦北インターチェンジ周辺地域を事例として —	教育研究科→宮崎県教員
	兼城 賢修	沖縄県恩納村における観光地域の形成	具志川記念病院
	木村 京子	エスニック・コミュニティとしての中国人社会 — アメリカ合衆国の場合 —	栃木県教員
	中司百合子	茨城県つくば市における芝産地の成立と展開	エトワール海渡
1990	池田 孝子	萩市における町並み観光地の形成と変容	高島屋
	稲田 哲也	日本における衆議院選挙結果の空間的分布とその社会・経済的背景	教育研究科→第一航業(株)
	岡田 佳久	宇都宮市におけるバス交通の特性に関する地理学的研究	日本エアシステム
	川島 裕子	宇都宮市における商業地域の変容	ジャスコ
	斉藤 哲志	ソウル市における大学周辺商業地区の地理学的考察 — 梨花女子大学・慶熙大学周辺地区を事例として —	松下電器
	宗田 真理	カナダにおける首位都市転換とその要因 — モントリオールからトロントへ —	日産自動車
	高島 武士	散居村における生活組織の地理学的研究 — 富山県砺波市鷹栖地区を事例として —	富山県教員
	高橋 譲	アメリカ大リーグに関する地理学的研究	ワールド→吉原製油
	中島 正民	オーストラリアにおける日本人の観光形態	自営業
	中野 正人	愛知県西三河地方における定期市の地理学的研究	愛知県教員
	野島 浩司	横浜市緑区における高齢者人口に関する研究	横浜市役所
	山根 法久	アメリカ住宅社会史 — アメリカ的生活様式の形成 —	フジテレビ
1991	江藤 佳織	越後湯沢におけるスキー場開発に伴う地域の変容 — 岩原スキー場の事例 —	住友ビザカード
	大谷 章史	わが国における第二次世界大戦後の航空交通に関する地理学的研究	野村システムサービス
	大場 有子	近代盛り場・浅草の変遷	教育研究科→昭文社データリサーチ

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1991	佐藤 嘉彦	茨城県総和町の工業化に伴う周辺地域の変容	秋田県教員
	酒井貴己子	天竜川中流域における山村の変貌	静岡県私立高教員
	澤 達大	アルゼンチン・輸出経済期におけるブエノスアイレス市の都市形成と卓越性について	日本女子大学付属高校
	武田裕美子	イスラムの都市空間	歴史・人類学研究科→
	渡辺 正和	シベリア開発の地理学的研究	地球科学研究科→富山県庁職員
	和田 崇	上海郊外における郷鎮工業の発展と農村の変容	広島県教員→地域交流センター
1992	糸山 敏和	メキシコ市の環境問題 — 大気汚染を中心に —	環境科学研究科→
	木田 直秀	福井市における郊外商業地の性格	エコー
	近藤 佳美	ハヶ岳南麓清里高原における観光地の形成	泉郷→
	内藤美千代	都市生活における公園緑地の地域的機能 — 東京都葛飾区を事例として —	中央住宅
	中村 綾美	東京大都市圏における埋立地の機能 — 千葉県浦安市海浜地区を事例として —	滋賀県教員
	濱邊 千歳	白秋文学における場所イメージの研究 — 故郷柳川の風景	電源開発
	松本 恵美	輪島市海士町における沿岸漁業の存立基盤	日本交通公社
	見村 和嗣	茨城県江戸崎町における中心商店街の変容	九州電力
	中野 文	ロンドンにおける王立公園の役割 — キュー王立公園地域の変容を通して —	住友銀行
1993	折式田由紀	福岡市天神地下街の地理学的研究	教育研究科→大妻女子大附属高
	草原 輝	ドイツ連邦共和国における鉄道交通体系に関する研究	地球科学研究科
	中川 健	山梨県清里における観光地イメージの形成	教育研究科→聖徳学園高
	長崎 清美	首都圏における観光果樹地域の形成 — 千葉県松戸市を事例として —	常総学院高校
	橋本 真人	都市再開発に伴う伝統的地域社会の変容 — 長野県松本市中心商店街を事例として —	博報堂
	森上 智子	益田市における商業地域景観の比較地理学的研究	教育研究科→島根県教員
	山岸 美樹	伝統的機業地域の変容 — 桐生市と足利市の比較地理学的研究 —	ケー・シー・エス
1994	尾崎 佳子	静岡県富士宮市における養鱒地域の形成	富士ロジテック
	菊 裕之	観光都市伊東の地域変容	(中退)
	岸田 真	人口高齢化の空間パターンとその考察	大日本コンサルタント

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1994	切江真奈美	五島列島におけるキリスト教集落の構造	福岡県庁
	武村 佳子	御宿町におけるリゾート開発に関する研究	プレス・オールタナティブ→
	寄宗 千恵	祇園祭から見た土浦市の地域性	トータルシステムデザイン
	十川 洋	つくば市における産地直送野菜に関する研究 —「新鮮・安全・味の神話」—	魚住農園→ポラン広場の宅配
	増田慎太郎	山梨県山中湖村における住民の生活行動	ヨークマート
1995	上野 香奈	東京都心部の人口構造と地域コミュニティに関する研究 — 東京都千代田区神田和泉町を事例として —	主婦
	香月 勝行	現代社会における言語の空間的パターン —「新方言」と流行語に関する考察—	福岡電通
	坂下 恵	富山県氷見市における農村女性の就業変化 — 上余川地区を事例として —	塾講師
	志賀 和英	教育の社会地理学的研究 — 福島県いわき市を事例として —	いわき市役所
	高橋 実央	花巻市における宮沢賢治に関わる地域振興	花巻市財団職員
	中山 陽子	つくば市の廃棄景観 — 不法投棄から見た地域住民の帰属意識 —	中国地図出版
	西田 貴麿	日本人が追い求めた富士 — 全国に分布する富士山の分析から —	測量業自営
	西村 克彦	地域呼称に関するイメージの研究 — 地名「つくば」の記号論 —	普門エンタープライズ
	深見 七重	失われた場所を求めて — 原爆投下時の広島における人間行動 —	農芸塾
	藤永 豪	北京市中心部における都市的基盤の形成	地球科学研究科
1996	市毛 淳	日本におけるゴルフ場の立地と地域的展開	大日本印刷
	岩間 信之	茨城県ひたちなか市における商業の変容	地球科学研究科
	片山 雅之	湿地地帯における稲作経営の変容 — 茨城県新利根町の例 —	中国銀行
	小松 直子	横浜中華街における「街づくり」	教育研究科
	渋谷 俊浩	文学作品に見る新宿の場所イメージの研究	(株)昭和
	田島 由紀	臨海副都心構想にみる都市空間の未来像 — “未来都市” はどのように描かれたか	熊本県庁
	宮澤真由美	善光寺門前町における街並み景観の保全と地域特性	長野市役所
	森田 周吾	新興住宅地の居住者が求める住環境の変容 — 奈良県西大和ニュータウンを事例として —	阪急交通社
	渡辺さえか	神奈川県鎌倉市における緑地保全に関する住民活動	

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1997	伊藤 祥子	企業戦略に見る新潟県の酒造業の方向性	沖縄振興開発金融公庫
	小谷亜由美	地域メディアにおける地域情報 — 地域紙上の「つくば」のイメージ	ミリオン
	中村 昭史	長野県小布施町における町並み修景運動の展開	地球科学研究科
	西海 英樹	茨城県北浦町要地区における大規模葉たばこ栽培の地域的性格	
	橋本 有加	浜松市における日系ブラジル人関連産業に関する研究	ヤマハ発動機
	横田美佐子	千葉ニュータウンにおける居住者空間	茨城県庁
	渡辺 円香	わが国における漬物の地域性	エイチ・アイ・エス
1998	小松 正利	秋葉原 JR 駅周辺地域における都市空間利用の特性	セゾン情報システムズ
	洪瀬 雅彦	J リーグクラブの事業活動に伴う地域変容 — 鹿島アントラーズ FC の事例 —	経営・政策科学研究科
	守谷 敦史	観葉植物流通の地域的展開 — つくば市と生産地の結合 —	インテリジェント・ウェイブ

3. 人文学類

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1977	小野寺 淳	近世人口移動の一形態 — 北関東農村荒廃と浄土真宗移民によるその復興 —	歴史・人類学研究科→茨城大学
1978	宇野 文夫	漁業の近代化と半農半漁村の対応 — 南伊豆の事例 —	私立高校
	山本 淳子	近世加賀藩領新川郡における浦の社会経済構造	主婦
1979	白井 豊	河道変遷に対する住民の対応 — 長野県犀川の事例 —	千葉県立中央博物館
	外山 恭子	市場集落における村落形成 — 秩父郡大宮郷を中心として —	埼玉県教員→主婦（旧姓町田）
	百瀬 明宏	近世庄内藩における歴史的な地域構造	千葉県教員
1980	細野 孝史	那珂川流域村落における商品経済の展開 — 近世中期から明治20年代までを中心に —	栃木県教員
1981	川口 洋	通婚圏規制因子に関する一考察 — 摂津国武庫郡上瓦林村の事例を中心として —	歴史・人類学研究科→帝塚山大学
	渡辺 秀美	明治前期における中心地の階層的配置 — 栃木県を事例として —	本田技研
1982	中西僚太郎	近世後期～明治前期における畿内農村人口の変動 — 綿作・綿工業との関係を中心として —	歴史・人類学研究科→千葉大学
	西野 真夫	新川木綿衰退における歴史地理的考察	富山県教員

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1982	矢野 正浩	薩摩藩における局地的中心集落 ―大隅国始良郡蒲生を中心として―	志学館中部
	山口 昭博	羽黒派修験道の信仰圏に関する研究	山形県教員
1983	稲村 太郎	秩父事件の歴史地理学的研究	埼玉県教員
	霧生 岳	幕末期の村方よりみた生活交渉空間の研究 ―武蔵国多摩郡柴崎村の名主日記分析を中心として―	日本交通公社
	中島 裕治	伊那地方における洪水災害と住民の対応	長野県教員
1984	石川 裕之	幕末期、信州安曇平における地域構造の変容 ―薄荷生産、糸魚川筋中馬活動を指標として―	教育研究科→長野県教員
	岡村 治	蒲原平野における「市」とその流通機能 ―明治期、三条町を中心として―	歴史・人類学研究科→立正大学
	米中 利明	明治期海運による流通圏の研究 ―桑名港、四日市港を中心として―	東京都教員
	山内 雅人	新潟県の伝統的機業地における歴史地理学的考察 ―新潟平野の綿工業を事例として―	新潟県教員
1985	河野 敬一	明治期以降における中心地システムの変容 ―山梨県を事例として―	歴史・人類学研究科→常磐大学
	鈴木 貴靖	高度経済成長期における地域観光化とその展開過程 ―千葉県南房総を事例として―	環境科学研究科→日本放送協会
	陶山 明彦	村落社会の相互評価の形成過程に関する一考察	宮城県教員
1986	磯崎 晃	明治初期の下総台地における開墾村落の展開過程	野村不動産
	笹本 明男	大穂町大曾根の両墓制墓地 ―その諸相と住民の意識―	私立高校教員
1987	熊谷 仁	北関東農村の空間構造に関する一考察 ―茨城県石岡市大字井関を対象にして―	環境科学研究科→建設技術研究所
1988	石井 卓	長野県遠山地方における明治期以降の地域変容	埼玉県教員
	野木夕起子	近代移行期における内国海運流通の歴史地理学的研究	アメリカンファミリー生命
	原田洋一郎	萩藩領内の藩政村の地域差に関する研究	歴史・人類学研究科→都立航空高専
	満田 宏子	郡山盆地における明治期開墾地の変容に関する歴史地理学的考察	福島県教員
1989	川崎 俊郎	長野県東信地域における銀行の成立とその地域的特色	歴史・人類学研究科→福島高専
	幸田 一男	つくば市妻木における村落構造の歴史地理学的研究	紀伊国屋書店
	住田 勝宏	愛媛県東予地域における工業地域の形成	日本放送協会

執筆年度	氏 名	卒業論文題目	卒業後の進路
1989	中嶋 則夫	明治大正期猿島台地における商業的畑作農業の展開	歴史・人類学研究科→茨城県教員
1990	清水 芳江	台湾散居卓越地域の歴史地理学的研究	野村システムサービス
1991	篠崎 雄一	真岡地域における綿業地域の形成と変容	福島県教員
	竹江 信之	笠間における陶磁器業の発達とその地域的意味	茨城県教員
1992	木村 穂高	つくば市西部における土地利用の変化に関する歴史地理学的研究	(株)エコー
	寺島 康子	近代における河岸潮来の変貌	土浦日大岩瀬高校
	船杉 力修	中世宗教都市の歴史地理学的研究 ― 伊勢神宮外宮門前山田を事例にして ―	歴史・人類学研究科
	三木 一彦	三峯信仰の展開とその社会的基盤	歴史・人類学研究科→日本学術振興会特別研究員
1993	小池 太郎	山村社会におけるイエの新旧関係に関する歴史地理学的研究 ― 長野県木曽郡大桑村大野を事例として ―	環境科学研究科→システム科学コンサルタンツ
	山本 秀和	大井川上流地域における電源開発と地域に及ぼす影響	静岡県教員
1994	合地 健太郎	牛久市女化における開拓移民集落の形成	住友銀行
	多山 剛司	石岡における酒造業の展開	山口県庁
1995	奥江 展久	東京近郊都・武蔵野市における土地利用の変化	横浜市役所
	進藤 友恵	新四国霊場の成立と発展の社会的基盤 ― 相馬新四国霊場を事例として ―	富士鉄工
	福田 和昭	茨城県関城町周辺におけるナシ栽培地域の形成	
1996	国沢 恒久	千葉県長生郡白子町における民宿地域形成の歴史地理学的研究	教育研究科→日本女子大学附属中学
	滝野 規子	紬生産地域における女性労働の変質 ― 茨城県結城市結城紬生産地域を事例として ―	歴史・人類学研究科
1997	植松久美子	市街化にともなう農村地域の変容 ― 茨城県土浦市域を事例として ―	環境科学研究科
	飯塚 晃次	明治期茨城県真壁における製糸業の発展とその地域的基盤	
	木村 宏幸	足利市におけるイチゴ栽培地域の形成	
	山田亜砂人	埼玉県東部地域の地場産業の立地と変遷	近畿日本ツーリスト
1998	井上 洋介	伊万里港における港湾機能と立地の変化	
	宇都宮 久	茨城県波崎町におけるスポーツ施設の立地	
	中島 一	江別市野幌における煉瓦製造の展開	
	八巻 桂子	木曽馬主産地の地域変容 ― 長野県木曽郡開田村の事例 ―	

IV-3 修士論文および進路・現職の一覧

1. 地球科学研究科

入学年度	氏 名	修士論文題目	現 職
1975	矢ヶ崎典隆	(留学)	東京学芸大学・助教授
	山下 清海	横浜中華街の研究	東洋大学・教授
	渡辺 恭男	(中退)	千葉県・松戸国際高
1977	浅見 良露	東京大都市圏における経済変動の地域的連鎖関係	久留米大学・教授
1978	高橋 重雄	(留学)	青山学院大学・教授
1979	伊藤 悟	Spatial Variation of the distance parameters within the Tokyo Metropolitan Area	金沢大学・助教授
	大八木智一	大都市近郊地域における不耕作農地の形成に関する研究 — 神奈川県厚木市三田地区の事例 —	(株)三菱総合研究所
	菊地 俊夫	那須山麓の戦後開拓地における酪農地域の形成	東京都立大学・助教授
	村山 祐司	Canadian urban system and its evolution processes in terms of air-passenger flows	筑波大学・講師
	全 順任	内科医療施設の立地とその利用パターン — 茨城県八郷町を事例として —	
	南 榮佑	ソウルにおける結節地域の構造とその特性に関する研究	韓国, 高麗大学・教授
1980	加賀美雅弘	山形県における脳卒中死亡の病理地域構造	東京学芸大学・助教授
	中川 正	霞ヶ浦東岸地域における移住門徒村落の構造	三重大学・助教授
1981	大関 泰宏	東京都における都市的要素の外延化過程	文部省
	根田 克彦	仙台市における小売商業地域の構造とその変容	奈良教育大学・助教授
	尾藤 章雄	東京都市圏における住宅の分布と地域的性格	山梨大学・助教授
	金 健錫	利根川下流茨城県東村における水稻作の変貌	韓国, 江陵大学・教授
1982	井田 仁康	国内航空旅客からみた空港後背地の地域構造	筑波大学・講師
1983	丸山 浩明	浅間山南麓斜面における農業生産地帯の垂直的構造	金沢大学・助教授
	山下 宗利	東京都心部における土地利用の3次元構造	佐賀大学・助教授
	山本 充	北上山地北部における有畜農業の展開と山域利用の変化	埼玉大学・助教授
1984	井上 孝	双子都市における人口密度分布の時系列的変化	青山学院大学・助教授
	尾野 久二	(中退)	(株)パスコ
1985	篠原 秀一	銚子における漁港漁業の成立基盤	秋田大学・助教授
	洪 顕哲	パーセントリップと地域特性からみたソウル市の地域構造	韓国, 建国大学・助教授

入学年度	氏 名	修士論文題目	現 職
1986	安 在鶴	帰還人口移動による人口集団の特性変化 ― 韓国・全羅南道を事例地域として ―	韓国統計庁
	酒井多加志	モータリゼーションに伴う甲府市中心市街地の変容 ― 駐車場を指標として ―	北海道教育大学・助教授
	森本 健弘	茨城県波崎町における農業経営の変化と不耕作農地の形成 ― 中須田集落を事例として ―	筑波大学・講師
	山下 潤	関東地方西部における高齢者の分布とその形成要因	長崎大学・助教授
1987	伊藤 貴啓	東三河平野における工業的農業地域の展開 ― つまもの栽培を事例として ―	愛知教育大学・助教授
	呉羽 正昭	群馬県片品村における観光化に伴う林野利用の変化	愛媛大学・助教授
	須山 聡	石川県輪島市における漆器の生産・流通構造の変遷	駒澤大学・講師
	平 篤志	都心付近の人口減少に伴うコミュニティ及び公立小学校の変容 ― 東京都千代田区神田地区を事例として ―	香川大学・助教授
1988	橋本 雄一	神奈川県三浦半島における中心地システムの変容	北海道大学・助教授
	松村 公明	郡山市中心部における都心機能の地域的展開	秋田大学・助教授
1989	小田 宏信	浜松都市圏における機械金属工業の分布とその変化	桜花学園大学・講師
	林 秀司	栃木県におけるイチゴの新品種「女峰」の普及過程に関する研究	九州大学・助手
	吉村 忠晴	浜松市内部における都市活動の時間的变化	国立福島高専・講師
1990	若本 啓子	岩手県滝沢村における酪農業の地域的展開	宇都宮大学・講師
1991	鹿嶋 洋	京浜地域外縁部における電機・電子工業の連関構造 ― T社青梅工場を事例として ―	三重大学・助教授
	中村 康子 (側島)	埼玉県秩父山地における自然的基盤と農業的土地利用との関係	東京学芸大学・助手
	芳賀 博文	東京都心3区における大手企業本社の立地変容	
1992	堤 純	前橋市の市街地周辺地域における土地利用の転換過程	北海道大学・助手
	濱里 正史	近接性からみた沖縄本島地域の空間構造	筑波大学・文部技官
	松井 圭介	笠間稲荷信仰圏の空間構造	筑波大学・講師
	渡辺 正和	常願寺川における水資源利用域の変容	富山県職員
1993	川瀬 正樹	大都市郊外住宅地域における既婚女性の通勤行動圏に関する地理学的研究 ― 千葉県柏市を事例として ―	筑波大学・文部技官

入学年度	氏 名	修士論文題目	現 職
1994	草原 輝	地方中規模都市における住民の教育受容行動に関する地理学的研究 ― 愛媛県宇和島市を事例として ―	
	仁平 尊明	千葉県旭市における施設園芸の維持システム	
1995	伊藤 徹哉	仙台市における住宅景観の地域構成	
	櫻井 誠	(中退)	アルク
	平井 誠	埼玉県所沢市に居住する高齢転入者の移動特性	
1996	日野 敬仁	航空ネットワークからみた東アジアの都市群システム	
	藤永 豪	中山間集落における地名からみた住民の空間認識 ― 佐賀県脊振村鳥羽院下地区を事例として ―	
	松本 至巨	東京中心部における緑地の地域特性 ― 武蔵野台地末端部日暮里地区から品川地区に至るまで ―	
1997	有馬 昌英	大分県九重町菅原地区における入会林野利用の変化	
	岩間 信之	東京大都市圏における百貨店立地の空間構造	
	兼子 純	新潟県における小売業からみた流通の空間構造 ― ホームセンター・食品スーパーを事例として ―	
	佐藤 大祐	東京湾および相模湾におけるマリーナの展開	
	田中 耕市	個人属性別にみたアクセシビリティに基づく生活環境評価 ― 福島県いわき市を事例として ―	
	鄭 美愛	韓国ニュータウンにおける居住者の移動経歴の地域的特性 ― 京畿道城南市盆唐を事例として ―	
	横山 智	森林所有形態からみた台風災害復旧と荒廃地の分析	

2. 歴史・人類学研究科

入学年度	氏 名	修士論文題目	現 職
1978	小野寺 淳	歴史地理学におけるメンタルマップ研究 ― 江戸時代北上川の水路を事例として ―	茨城大学・助教授
1979	伊藤 寿和	条理呼称法整備過程に関する研究	日本女子大学・助教授
1980	森 勝彦	近代江南デルタの鎮の構造	鹿児島経済大学・助教授
1982	川口 洋	通婚圏からみた江戸時代後期の「大阪地域」 ― 生活空間の枠組をめぐって ―	帝塚山大学・助教授
1983	中西僚太郎	明治末期茨城県下町村の食物消費 ― 米麦消費とその規定要因を中心として ―	千葉大学・助教授

入学年度	氏 名	修士論文題目	現 職
1984	椿 真智子	移住における同化過程の予察的考察 — 米沢藩における法華宗移民を事例として —	東京学芸大学・講師
1985	岡村 治	定期市出店行動の空間システム研究	立正大学・講師
1986	河野 敬一	明治期以降の長野盆地における中心地システムの変容 — 動態的中心地モデルの構築に向けて —	常磐大学・講師
1989	原田洋一郎	秩父における鉱山業に関する歴史地理学的研究 — 近代化以前の天領小規模鉱山の一事例として —	都立航空高専・講師
1990	川崎 俊郎	明治・大正期における地方中小銀行の立地と地域特性 — 長野県佐久盆地を事例として —	福島高専・講師
	中嶋 則夫	猿島台地における茶業の展開とその存立条件	茨城県教員
1992	田中 達也	領域の形成と拡散 — 戦国期色部氏領における歴史的景観の復原を通して —	大東文化大学・講師
1993	舩杉 力修	戦国期における伊勢信仰の展開 — 越後国蒲原郡を事例として	
	三木 一彦	三峰信仰の展開とその地域の基盤	日本学術振興会特別研究員
1994	李 鎔一	高度経済成長期における関東台地農村の変貌	
1996	渡部 康代	近世における祭礼の変容と町の形成 — 下野国那須郡烏山町午頭天王祭礼を事例に —	
1997	滝野 規子	結城紬生産地域とその変質 — 織り手のライフ・ヒストリーと機屋の家族労働構成からの考察 —	
	山下 琢巳	天竜川下流域における治水事業とその経済的基盤 — 明治～昭和戦前期を中心として —	

3. 地域研究研究科

執筆年度	氏 名	修士論文題目	現職もしくは進路
1976	磯部 豊彦	カリフォルニアの自然環境	
	佐々木史郎	韓国民家の文化地理学的研究 — 車嶺山脈中部の民家調査を中心として —	宇都宮大学
	八田 茂樹	サンフランシスコの都市化と都市計画	熊本電波高専
1977	斉藤 正	フィリピン都市化 — 発展途上国型都市化の実態 —	厚木高
1978	市川 敦子	イランの都市形態 — テヘランの居住形態を中心として —	
	岩田 憲二	プランテーション産業の諸問題 — スリランカの茶産業を事例として —	石川県立白山自然保護センター・専門研究員
	内田 利昭	カナダにおける都市発達過程 — コンフェデレーション以前の中央カナダを例として —	千葉県教員 (高校)

執筆年度	氏 名	修士論文題目	現職もしくは進路
1978	片桐 秀一	ポーランドの工業—地域均等発展の実証的研究	東京都教員（高校）
	村山 祐司	カナダ国内航空交通の特質及び航空ネットワークの空間構造	筑波大学
1979	藤田 健三	ユーゴスラビアの地域差	日本板硝子
	ブンチパン ダ, S.M.	日本とスリランカにおける稲作農業の経営集約化過程に関する比較研究	農学研究科→
	渡辺 哲	アメリカ合衆国の農業における地域差	日本能率協会
1980	佐藤 克芳	人口的側面からみた韓国の都市化 — 1960, 70年代を中心にして —	
1981	上田 雅子	関東地方における地域呼称からみた住民の空間認識	水橋高
	新田目夏実	「発展途上国の都市化 — 社会発展期における「過剰都市化」の役割. フィリピン. メトロ. マニラの事例より	
	林 千根	マレーシアにおける青少年団体の発展	
	日野 克美	モントリオールの街路名の調査と考察	オックスフォード大（留学）
1982	石井 秀樹	西ドイツにおける外国人労働者問題 — 第二・第三世代の西ドイツ社会への統合について —	
	サマルカン ディ, A.F.	東京大都市圏の交通網の発達から見た都市化	サウジアラビア, ジッタ大学
	刈脇かおり	変動するスラム：その住民構成と態度 — フィリピン・マニラのイスラム地区における調査に基づいて —	国際基督教大学高
	福井 健二	Perspectives on Canada —Japan Business Relationship—	プロジェクションハウス
1983	山岸 信子	Schooling in the Rural Mid-West: the Struggle over Educational Reform —Saline, Michigan in the Late Nineteenth Century	日本国際交流センター
1984	山川 和彦	南チロルの人口地理学的分析	
1985	北川 エリ	アフリカ「地図」現状分析 —チュニジアにおける「地図」作成プロジェクト背景調査をとおして—	
	張 小萍	都市化に伴う農村の変貌 — 筑波研究学園都市の場合 —	
1987	渋谷 鎮明	鎮山を通してみる李朝邑集落の空間構造	中部大学
1988	石井 久生	メキシコ市における都市構造変動	共立女子大学
	奥井 雅久	シンガポールの人口分布および土地利用の変化	信越化学工業
1989	山崎 潤	日本統治時代の朝鮮における地方行政改革 — 1914年の行政区画の改革を中心に	東洋情報システム

執筆年度	氏 名	修士論文題目	現職もしくは進路
1990	平 誠司	アルゼンチン都市群システムの構造と動態	いのちのことは社
	芳賀 博文	高層ビル景観からみたソウルと東京の比較研究	地球科学研究科
1991	関 文三	EC 市場統合と日本企業の対応 ― 製造業を中心に ―	アイ・エス・エス
1992	青木 義昌	「ロシア脅威」に関する考察 ― 日露関係史からの分析	防衛庁へ復職
1993	浦部 浩之	チリ民政移管 ― 人権問題解決の試みと文民・軍部関係 ―	国際政治経済学研究科→愛国学院大学
	柿原 国治	米露戦略核戦力の推移と日本の防衛戦略 ― 21世紀の核戦略に関する一考察 ―	防衛庁へ復職
1994	宇野 佳子	観光からみる北欧 ― イメージとその背景 ―	国際交流基金
	道満 誠一	ソ連崩壊後のロシア海軍	防衛庁へ復職
	周 欣	中国における農村過剰労働力の移動 ― 改革以後の農村地域の問題を中心に ―	
1995	佐々木てる	現代ヨーロッパにおける定住外国人問題 ― 「シティズンシップ」論再考 ―	
1996	アリフ, J.K.	Development of the Industrial Labor Force in Yanbu Industrial City "Saudi Arabia"	
	菅 陽子	環境先進国ドイツの環境保全型都市に関する一考察	
	吉田 莊介	スイスの市民防衛に関する研究	防衛庁へ復職
1997	足達 好正	ロシアの膨張についての考察 ― 地政学及びロシア救世主思想（ロシア・メシアニズム）の観点から ―	防衛庁へ復職
	田崎 剛広	ポスト冷戦とフランスの核政策	防衛庁へ復職
1998	小川 健一	21世紀の NATO 戦略の考察 ― 黒海及びバルト海地域を中心にして ―	防衛庁へ復職

4. 教育研究科（教科教育専攻社会科教育コース地理的分野）

執筆年度	氏 名	修士論文題目	現職もしくは進路
1980	池上 親次	昭和35年度版高等学校学習指導要領批評 ― 社会科地理を中心にして ―	長野県・飯山南高
	高山 直子	高等学校社会科地理における都市の学習指導について ― 都市化の概念とその形成 ―	東京都世田谷区・桜丘中
	吉田 徳康	高等学校地理教科書における環境問題の取り扱いに関する研究	埼玉県・大宮高
1981	梅内 康博	LANDSAT 画像の教材開発およびその地理教育における授業効果	桐蔭学園高

執筆年度	氏 名	修士論文題目	現職もしくは進路
1981	新納 雅樹	イギリスのサンプルスタディを使った中学校社会科地理的分野の授業に関する研究	鹿児島県・沖永良部高
	松永 陽子	三沢勝衛の地理教育論に関する一考察 ― 反知識注入主義の立場に立つ地理教育の意義 ―	昭和女子大附属昭和高
	寺本 潔	児童・生徒の知覚環境の発達に関する基礎的研究 ― 熊本県阿蘇カルデラ内の小・中学生の場合 ―	愛知教育大
1982	飯田 誠	イギリスの中等教育における地図指導 ― 日本地図指導改善のために ―	千葉県・安蘇郡東中
	角海 紀雄	社会科における「祭り・芸能」を題材とした文化財学習について ― 栃木県栗山村湯西川湯殿山神社祭礼および奉納獅子舞を題材として ―	栃木県・真岡高
	大垣 圭子	映像教育にみる戦後社会科の変容 ― 小学校社会科 ―	栃木県教員（中学）
	木内 晃	文化地理学的成果の中学校社会科地理的分野への導入に関する一試論 ― ラテンアメリカの取扱いについて ―	徳島県・鳴門市北灘西小
1983	阿南 崇	地理的位置の認知に関する基礎的研究	慶應義塾高
	渡辺 敦子	シミュレーションゲームを用いた地理学習の展開 ― イギリスの地理教科書を参考にして ―	東京都・小石川工高
1984	上松 達三	社会科からみた中等学校における修学旅行	東京都練馬区・光が丘六小
	増田 義雄	社会科における郷土教材の研究 ― 間宮林蔵を中心として ―	
	加治由味子	明治後期の実業学校における地理学習	
1985	天野 真哉	高等学校社会科「地理」における国勢調査資料の取扱い ― 広島県を例として ―	広島県・安芸高
	小林 岳人	地理的世界認識の解明への一試論 ― グールドのメンタルマップの方法を用いて ―	千葉県・小金高
	田村 和浩	ウェーバー点と人間の発達段階における知覚判断に関する研究	茨城県・土浦一高
	平田 真幸	地理教科書における世界地理の学習の日米比較	国際観光振興会
	宮原 弘匡	地理的認知に関する基礎的研究 ― 筑波研究学園都市を事例として ―	長野県・蘇南高
1986	安部 憲文	結城紬生産地域における生産品種の地域分化に関する一考察 ― 高等学校地理における地域の調査の例として ―	長野県・皐月高
	加田 隆男	地形図の読図に関する基礎的研究 ― 認知心理学的アプローチ ―	大阪府・八尾北高
	中島 功	農業地域調査を中心とした地域学習の展開 ― 茨城県八千代町を例として ―	神奈川県・厚木西高

執筆年度	氏 名	修士論文題目	現職もしくは進路
1987	船澤小百合	荒川における河川敷の土地利用 — 自然環境の取り扱いにおける教材化の視点として —	秋田和洋女子高
	牧野 誠照	初等・中等教育における地図教育に関する考察 — 小縮尺地図の指導を中心に —	岐陽高 (校長)
1988	生地 陽	高等学校社会科における開発教育のあり方 — フィリピン人労働者の流入を題材に —	神奈川県・荏田高
	木村 保彦	社会科「地理」における国際理解に関する一考察 — 外国地名・用語等の取扱いを通して —	愛知県・知立東高
	小林 陽子	地理学習における工業化についての教材研究 — 茨城県の工業団地を中心に —	大妻多摩高
	小林 和夫	高等学校社会科における開発教育の教材化 — 東南アジアの熱帯林破壊を事例として —	日本ネグロス・キャンペーン
	羽佐田透一	開発教育における教材化についての一考察 — タイの NGO と農民による農村開発を事例として —	愛知県・豊田北高
1989	安藤伊知郎	地理教育における地域変容 — 茨城県つくば市の町村合併を題材として —	埼玉県立養護学校
	坂口 克彦	高校生の空間認知状態 — 都市地理学習に生かす一方法として —	東京都教員 (高校)
	高橋 浩史	地理教育における地域学習の意義 — 三澤勝衛の地理教育論を通して —	CDI
	三橋 浩志	地理教育における工業化に伴う地域変容の教材化 — 茨城県西部を事例として —	日本総合研究所
1990	佐藤 俊彦	交通変革に伴う地域変容とその教材化 — 中央自動車道を事例として —	麻布学園中・高
	長 佐知子	地理教育における水害の取扱い — 鶴見川を事例として —	青年海外協力隊→
1991	甲斐 譲二	地理教育における「交通変革と地域変容」の取り扱い — 岩手県を事例として —	宮崎県教員
	斎藤 之譽	地形環境と人間生活のかかわりに関する一試論 — 水害をてがかりにして —	岐阜県・土岐市西陵中
	廣田 育男	地理教育における研究開発 (R&D) 部門の取扱いに関する一考察 — 筑波研究学園都市を事例として —	三重県・員弁高
	福重健一朗	民間信仰を素材にした地域学習	
	美登志洋子	地理教育における野外学習の意義	茗溪学園中高 (講)
1992	稲田 哲也	鹿島開発とその教材化に関する研究	第一航業
	松尾 通成	グローバル教育の学習方法に関する研究 — オーストラリアの中等地理教育を中心として —	長崎県・平戸中

執筆年度	氏 名	修士論文題目	現職もしくは進路
1993	川嶋ユカリ	埼玉県における高校進学状況からみた中心地の配置とその変化 — 地理学習における教材化の観点から —	長崎県職員
	西澤 泰啓	中学校社会科における「郷土意識」育成の意義と方法 — 「小布施の生活と文化」をとおして —	長野県教員（中学）
	山口 泰宏	地理教育における「地域変容」の教材開発 — 茨城県新治村の養豚業を事例として —	埼玉県・三郷高
1994	松本 昌三	笠間焼生産地域の構造	文部省
	吉村 夕紅	那珂川における水辺の観光レクリエーション利用 — 地理教育における水の教材化の一視点 —	栃木県・氏家中
	請川 竜司	「自動販売機」 — 地域学習・総合学習への試み —	
1995	折式田由紀	福岡市都心部の地下空間に関する地理学的研究	大妻女子大付属高
	久保 京子	千葉県長生郡・夷隈郡における定期市の存立基盤	和洋女子大付属高（非）
	河野 敏弘	結城紬産地における高級品生産地域の存立基盤	つくば秀英高
	松崎 康弘	大井川流域における川狩りの変遷過程	教育学研究科
	山田 義尚	沖縄県恩納村における生活用水源の変遷過程	沖縄県教員
	竿代 愛也	高度情報化社会における多機能都市の形成 — 幕張新都心を事例として —	関東学園大付属高
	福井 朋美	北海道における行政組織の確定過程と機能地域の成立に関する考察	北海道・八雲高
1996	宇都木宏一	つくば市における地価の変容についての一考察	茨城県・岩井西高
	鴨志田直子	地理教育における自然災害の取り扱いについての一考察 — 神田川流域を事例として —	山脇学園中高
	北村 章	埼玉県浦和市を中心としたスポーツ活動の地域的展開 — サッカーを事例として —	東邦大付属東邦中
	富田 直伸	首都圏における観光農業の地域的特性 — 埼玉県横瀬町を事例として —	常総学院高
	中村 匡輝	茨城県つくば市における公民館活動の地域的特性	明治学園高
	中川 健	情報メディアによる観光レクリエーション地域の形成 — 横浜元町を事例として —	聖徳学園高（講師）
1997	田中 豪一	環境教育における「持続可能な社会」の視点の導入に関する一考察	茨城県教員（高校）
	鳥海 亮	千葉県白浜町の沿岸環境	千葉県教員（小学）
	中村 智美	茨城県平磯における岩石海岸地形の南北変化	新潟県教員（高校）
	眞崎恒一郎	首都圏周辺山村における住民の環境認識と小地名との関係 — 茨城県七会村を事例として —	茨城県つくば市、二の宮小

執筆年度	氏 名	修士論文題目	現職もしくは進路
1997	松川 理治	レクリエーション開発に伴う国有林野利用の変容と地域社会の動向 — 栃木県藤原町を事例として —	静岡県教員（高校）
	山崎 統	地理教育における「文検」の役割	北海道教員（高校）
1998	國澤 恒久	静岡県牧ノ原台地における茶業経営の再編	日本女子大付属中
	小松 直子	横浜中華街における在日中国系人社会の変容	福井県・藤島高（非）
	齊藤 實信	圃場整備の教材化と学習指導 — つくば市桜川流域を事例として —	
	古川 顕	地理教育における効果的な野外観察に関する実証的研究	共立女子高
	星加 泰子	新制高等学校社会科選択科目「人文地理」の成立と展開 — 石田龍次郎の地理学思想を手がかりに —	同志社国際中・高

IV-4 博士論文・勤務先一覧

1. 地球科学研究科

(1) 研究科入学者

入学年度	氏 名	博士論文題目	勤 務 先	備 考
1975	陳 憲明	The urbanization of the low plains in the suburbs of Tokyo and Taipei: A comparative study on the agricultural aspects	台湾, 台湾 師範大学	課程博士, 三年編入
	福島 義和	千葉市と岐阜市における CBD の構造と機能に関する研究 — 大都市圏内の中規模都市の事例 —	専修大学	課程博士, 三年編入
	矢ヶ崎典隆	Ethnic cooperativism and immigrant agriculture: a study of Japanese floriculture and truck farming in California	東京学芸大学	Ph.D., University of California, Barkeley, 1982
	山下 清海	A geographical study on the segregation of Chinese dialect groups in Singapore	東洋大学	論文博士
1976	手塚 章	An analysis of regionality in the outer suburban area of metropolises: Viable farming types at the Shimo-otsu district, Ibaraki prefecture	筑波大学	論文博士, 三年編入
	奥井 正俊	A geographical study on the types of automotive traffic region and their distribution in the Kanto District, Japan	宇都宮大学	論文博士, 三年編入
1977	市南 文一	A geographical study on the distribution patterns of productivity of agricultural land in Japan	岡山大学	論文博士, 三年編入
	上野 健一	The regional structure and its change in Tokyo: 1920-1970	大東文化大学	論文博士, 三年編入
	佐々木史郎	A geographical study on the north-south variation of Korean house form	宇都宮大学	論文博士, 三年編入
	浅見 良露	The geographical analysis of the inter-area linkage of economic fluctuations in Fukuoka region, Japan	久留米大学	論文博士
1978	高橋 重雄	Multiple stops and retail choices: their intraurban variations	青山学院大学	Ph.D., University of Kansas, 1987
1979	伊藤 悟	An analysis of the distance parameter of spatial interaction model in the greater Tokyo metropolitan area	金沢大学	課程博士
	菊地 俊夫	The bases of development of viable dairy farming in the Kanto district	東京都立大学	論文博士

入学年度	氏 名	博士論文題目	勤 務 先	備 考
1979	村山 祐司	Regional structure of commodity flows in Japan: An application of dynamic geographical field theory	筑波大学	論文博士
	南 榮佑	空間的相互作用からみた巨大都市ソウルの地域構造	韓国, 高麗大学校	論文博士
1980	加賀美雅弘	Geographical study of regional variation of diseases	東京学芸大学	論文博士
	中川 正	The cemetery as a cultural manifestation: Louisiana necrogeography	三重大学	Ph.D., Louisiana State University, 1987
1981	大関 泰宏	A geographical study on urban migration in the Kanto region	文部省	論文博士
	根田 克彦	The urban retailing system in Kushiro and its change	奈良教育大学	論文博士
	尾藤 章雄	Geographical study on residential structure of Tokyo 23 wards and the suburban areas	山梨大学	論文博士
	金 建錫	利根川下流域における稲作経営とその地域的特質	韓国, 江陵大学校	課程博士
	サマルカン ディ, A.H.	サウジアラビア・タイフ市における都市の内部構造	サウジアラビア, ジッタ大学	課程博士, 三年編入
1982	井田 仁康	A study on regional differences of air passenger flow patterns and the cause of the regional differences	筑波大学	論文博士
	季 増民	内陸工業団地の地域的展開と隣接農村地域の対応 — 北関東地方を事例にして —	椋山女学園大学	課程博士, 三年編入
	郭 金水	台湾における交通イノベーションと地域経済の関係に関する地域的分析	台湾, 台北師範大学	課程博士, 三年編入
1983	丸山 浩明	A geographical study of the agricultural land use patterns on the lower volcanic slopes in Central Japan	金沢大学	課程博士
	山下 宗利	A geographical study on the three dimensional structure of the central Tokyo metropolis	佐賀大学	論文博士
	山本 充	A geographical study of changes in the mountain agricultural region in Tirol, Austria	埼玉大学	論文博士
1984	井上 孝	The integrated model of intra-urban population distribution and migration	青山学院大学	論文博士
1985	篠原 秀一	A geographical study of the modern fisheries' structure: the fisheries' space of Choshi	秋田大学	論文博士

入学年度	氏 名	博士論文題目	勤 務 先	備 考
1985	洪 顕哲	ソウル市における結節地域構造とその変容に関する地理学的研究	韓国, 建国 大学校	課程博士
	張 長平	東京都区部における小売業の均衡的立地パターンに関する地理学的分析 — 買物行動モデルに基づいて —	国際航業	課程博士, 三年編入
1986	安 在鶴	韓国における人口移動の地域パターンと決定要因 — 1965年～1985年間の変化 —	韓国統計庁	課程博士
	森本 健弘	A geographical study on cultivation abandonment in intensive agricultural regions of Kanto plain	筑波大学	論文博士
	山下 潤	Spatial interaction and spatial structure: A study of public facility location	長崎大学	Ph.D., Lund University, 1995
1987	伊藤 貴啓	A geographical study on the evolution of industrialized agriculture in Higashi Mikawa plain, Aichi prefecture	愛知教育大 学	論文博士
	呉羽 正昭	Die Wintersportgebiete in Österreich und Japan: Ein geographischer Vergleich der Entwicklung der Wintersportorte in den Ostalpen und den japanischen Berggebieten	愛媛大学	Ph.D., Univetsität Innsbruck, 1993
	須山 聡	A geographical study of continuance and development of traditional industry: Regional bases of <i>shikki</i> industry in Wajima, Ishikawa prefecture, Japan	駒澤大学	論文博士
	平 篤志	Spatial dynamics of Japanese-affiliated companies in the Chicago metropolitan area: Global localization of multinationals	香川大学	論文博士
1988	橋本 雄一	The transformation of central place system in the Tokyo metropolitan area	北海道大学	論文博士
	カミキハラ シズエ	日本における農家の契約栽培に関する地理学的研究 — 茨城県麻生町の事例を中心として —		課程博士, 三年編入
1989	小田 宏信	The location dynamics of the small and medium-sized machinery industry during the technological innovation: A case study of the mold manufacturing industry in the Kanto region, Japan	桜花学園大 学	論文博士
	林 修司	Diffusion and adoption of new strawberry varieties in Japan: A case study of <i>Nyoho</i> and <i>Toyonoka</i>	九州大学	論文博士
1990	若本 啓子	Regional characteristics of the feed-supply basis of dairy and beef cattle raising in Iwate prefecture, Japan	宇都宮大学	論文博士

入学年度	氏 名	博士論文題目	勤 務 先	備 考
1992	松井 圭介	Geographical study on the sphere of <i>Kanamura Betsurai</i> shrine faith	筑波大学	論文博士

(2) その他 (東京教育大学やその他の大学の出身者で、地球科学研究科にて論文審査を受けた者)

学位記授与年度	氏 名	博士論文題目	勤 務 先
1980	白坂 蕃	The development and transformation of tourist settlements on the heavy-snowy regions of Japan — With emphasis on ski settlements —	立教大学
1982	宮坂 正治	The Thünen structure of agriculture in Japan, basing on gravity model	広島県立大学
1984	櫻井 明久	A geographical study on the changes of agricultural land use in the Limburg region, West Germany	駒澤大学
1985	溝尾 良隆	A geographical study on evaluation of landscape resources	立教大学
1987	淡野 明彦	Formation of coastal tourist areas in the Kinki district	奈良教育大学
1987	坂口 慶治	近畿内帯山地における廃村現象の地理学的研究	京都教育大学
1990	犬井 正	A geographical study on the use of the plain forests in the Kanto plain	獨協大学
1990	長坂 政信	A geographical study on the production area formation of the broiler industry in Japan	近畿大学
1990	篠原 重則	四国山地における集落の変貌過程に関する地理学的研究	香川大学
1991	伊藤 達也	A geographical study on the regional pattern of household composition and household formation in Japan	(逝去)
1995	安積 紀雄	The regional development of commercial warehouses and its locational bases: Focusing on the Tokai and Hokuriku districts	名古屋女子商科短大
1996	北村 修二	A study of regional structure of Japanese agriculture based on the part-time farming	岡山大学

2. 歴史・人類学研究科

入学年度	氏 名	博士論文題目	勤 務 先	備 考
1977	古田 悦造	近世関東における魚肥流通の地域的展開	東京学芸大学	三年次編入
1978	小野寺 淳	近世河川水路図の空間認識研究	茨城大学	
1979	小口 千明	相対的環境観の歴史地理学的研究	筑波大学	三年次編入

入学年度	氏 名	博士論文題目	勤 務 先	備 考
1979	伊藤 寿和	日本における農業的土地利用の歴史地理学的研究 — 古代・中世の大和国を事例として —	日本女子大学	
1982	川口 洋	18・19世紀における会津・南山御蔵入領の人口変動とその地域的特徴	帝塚山大学	
1983	中西僚太郎	近代日本農村の歴史地理学的研究	千葉大学	
1985	岡村 治	六斎市の成立と展開に関する歴史地理学的研究	立正大学	

地理学に輝かしい未来を ―あとがきにかえて―

来るべき21世紀へ余すところ僅かになった1998年は、未曾有の不況が日本経済を襲い人々の生活に暗雲を投げかけた世紀末の時期であった。しかも、日本政府が銀行や経済界に年間の国家予算に相当する莫大な資金を投じてても日本経済は底を打つ気配がなく、自衛のためか庶民の財布はゆるまない傾向が続いている。かつて「妖怪がヨーロッパの空を徘徊している」とマルクス・エンゲルスは『共産党宣言』で書いたが、その妖怪とは今日、日本経済を混乱させているヘッジファンドとかデリバティブと呼ばれる国際金融資本であろう。妖怪たるゆえんは、その正体の姿形が見えず、私たち庶民の手の届かないところで、為替レートや株価を変動させているからである。

私にとってこの妖怪は時代の変換点を意識させるものであった。野茂投手が大リーグで活躍しているのを喜んでいたら、いつの間にか日本の高校生にまで大リーグの触手が延びてきた。国際化の波がひしひしと日本のあらゆる分野に押し寄せているのである。地理学もこの国際化の波に押しつぶされるのではなく、その波に乗るよう心がけなくてはならないであろう。

ところで、筑波大学の地理学・水文学専攻、なにかんづく人文地理学・地誌学の分野は、この冊子で明らかのように大学院生の教育・学位の取得・大学教官への就職と輝かしい成果を上げてきた。これは偏に大学院生、先輩教官の努力の賜である（資料の蒐集に尽力された若手教官にもお礼申し上げたい）。しかし、この伝統を将来につなぐためには一層の努力が要請されよう。というのは越えなければならない障壁は大きく、個人の能力は限られているからである。ここで、その障壁のいくつかに触れてみたい。

その一つは、小子化に伴う教育学部の改組であろう。大学の教育学部から教員免許証を必要としない学部への移行である。この改編で地理学教官の半数近くが、地域研究、環境、経済地理などの分野に移籍した。地理学者の現有ポストは確保されるものの、将来にわたってそのポストが地理学分野で確保される保証はない。このことは教育学部を大学院生を主要な就職先としてきた本専攻分野には大きな痛手である。

もう一つは、大学の大綱化に伴う大学院大学の創出である。文部省は将来修士を含めた大学院生の数を50万人にしたいと考えている。その結果、多くの大学で大学院が設置され、旧帝大では大学院化が進行した。このことは、地理学を専攻する大学院生が大幅に増加したことを意味する。それはまた大学院生にとって研究室の狭隘化とともにライバルの出現でもある。筑波大学では創設以来、地球科学系・地球科学研究科という1学系・1研究科という心地よいぬるま湯に浸ってきたので25年間改革を行って来なかった。大学院化に遅れをとった筑波大学でも、大学当局が最後のチャンスにかけて「Science（基礎科学）とTechnology（実学）の融合」という形で、従来の8研究科を統合して生命環境科学研究科、数理物質科学研究科、システム情報工学研究科という三つの大研究科に改組するという、大学院化に乗り出した。

この概算要求で地理学・水文学専攻の属する地球科学研究科は、生物科学研究科と農学研究科と共に生命環境科学研究科に属することになっている。生命環境科学研究科は8つの専攻から構成され、地球科学研究科は地質学専攻が地球進化科学専攻に、地理学・水文学専攻が地球環境科学専攻になる。また、地球科学研究科と生物科学研究科で新しい生態環境科学専攻（仮称）を新設するというものである。この案は社会的ニーズに合わせた研究分野の拡充をめざし、入学定員の増加を狙ったものであるが、官庁の削減とエージェンシー化、公務員の削減が叫ばれている現在、概算要求には相当の難題が課せられると予想される。

以上のように、地理学・水文学専攻は地球環境科学専攻に改編される方向で検討されているので、今後21世紀を目指した環境利用、余暇活動など環境志向の研究者やグローバル化に対応した地域研究者の養成が要請されることになろう。一般に人文地理学・地誌学の分野は自然地理学に比べ、国際対応が遅れている。自然地理学でも物理学・化学など理系の研究科に比べれば国際対応が遅れている。国際化の波にさらされている現在、日本の若い研究者が国際会議や国際学術研究に積極的に参加することを期待したい。幸い来年度から個別の文部省科学研究費でも海外調査が可能になるので、積極的に活用したいものである。こうすることによって無理することなく国際化の波に乗る方法を身に着けることが可能となるからである。

ギリシャ・ローマ時代から地理学は「諸科学の母」として、また、「自然と人間とのかかわり」を解明する環境科学として発展してきた。地理学を「科学の抜け殻」として卑下することなく、また「あれは地理学ではない」と排他的に扱うものではなく、これからは「あれも地理、これも地理」という寛容の態度が必要であろう。私は1985年にブラジルの調査をまとめるに際してワープロを知ったが、当時は新しもの好きの教授の部屋を「パソコン長屋」と揶揄する風潮さえあった。しかしながら、今ではパソコンは誰にも不可欠で、E-mail、インターネットは当然となっている。私の参加しているアメリカ大平原ハイプレーンズの国際学術研究に関連し、研究室にしながらカンザス州の小麦農家やグレインエレベーターのホームページがみられる時代に入ったのである。

地理学を志す大学院生には地図、環境、フィールドワーク、GIS、総合というようなキーワードを武器として新たな航海に乗りだして頂きたい。国際ネットワークなど新しいメディアの発達で学術論文等の入手や地図作製が容易になった現在、大学院生や若手研究者には各自の好きな研究分野を信念をもって進め、来るべき21世紀を見通した地理学の新たな地平を切り開いて頂きたいものである。そうすれば国際化、社会化を実現し、地理学の未来は明るいものとなろう。

斎藤 功